

■目次

〔研究論文〕	文化学園大学「学生生活調査」における
津具花祭の翁の衣装および道具に関する調査・研究……………1	喫煙率・喫煙者数の男女別分析…………… 49
角谷 彩子	杉田 秀二郎
アクターネットワークと持続可能性移行	異年齢の外あそびにおける育ち合いに関する考察…………… 59
—沖縄県 読谷山花織の復興過程—…………… 10	石川 基子
糸林 蒼史、山崎 功	古英詩 <i>The Panther</i> における感覚的表現のリアリズム…………… 65
〔研究ノート〕	白井 菜穂子
戦後原宿の「若者の街」イメージの形成	〔書評〕
—原宿の記憶と表象に基づいて—…………… 21	浅間哲平著『ブルーストと愛好家』
田中 里尚	『ブルースト叢書』クラシック・ガルニエ社、
フィルムやビデオテープをデジタルデータ化する作業の	2020年、389 pp. …………… 70
内製化に関する研究…………… 34	勝山 祐子
昼間 行雄	
大学生と読書	
—読書環境の変化5—…………… 42	
吉田 昭子	

■ Contents

〔Research Papers〕	<i>SUGITA Shujiro</i>
<i>KADOYA Ayako</i>	Analysis of Student Smokers' Gender Statistics
Research on Okina Costumes and Ritual Implements	Based on the Student Life Survey
for Tsugu-Hanamatsuri 1	Conducted by Bunka Gakuen University 49
<i>ITOBAYASHI Yoshifumi and YAMAZAKI Isao</i>	<i>ISHIKAWA Motoko</i>
Actor Networks and Sustainability Transitions :	A Study of Mutual Development across Age Groups
Reconstruction Process of Yuntanza Hanai in	through Outdoor Play 59
Okinawa Prefecture 10	<i>SHIRAI Naoko</i>
〔Research Notes〕	Realism of Sensuous Description in <i>The Panther</i> 65
<i>TANAKA Norinao</i>	〔Book Reviews〕
Building an Image of Harajuku as “A Town for Young	<i>KATSUYAMA Yuko</i>
People” after the World War II :	Teppei ASAMA, <i>Proust et les amateurs</i>
Based on Memories and Symbols 21	Classiques Garnier, « Bibliothèque proustienne »,
<i>HIRUMA Yukio</i>	Paris, 2020, 389 p. 70
Research on the Digitalization of Film and Video	
Utilizing In-House Methodology 34	
<i>YOSHIDA Akiko</i>	
University Students and Reading :	
Changes in Reading Environment Part 5 42	

津具花祭の翁の衣装および道具に関する調査・研究

Research on Okina Costumes and Ritual Implements for Tsugu-Hanamatsuri

角谷 彩子

KADOYA Ayako

要旨

筆者は以前の研究において東北地方の修験系神楽の「翁」を対象に衣装や道具の実地調査を行ってきた。その研究結果として、衣装や道具の類似および相違性が確認できたため、調査範囲を広げて研究を継続することにした。

本研究では、愛知県北設楽郡設楽町に伝承される「津具花祭」を対象に、翁で着用される衣装と道具の実地調査を行った上で、近隣地区の田楽および東北地方の修験系神楽の調査結果との比較を行った。翁が着用する白衣は舞庭に入る際に着る重要な衣装で、古くは官人の衣装であったと推測される。下衣はたつけから寄贈された袴に変わっており、奉納や寄贈によって衣装が変容することが確認できた。津具花祭の翁面は白色尉の特徴を持ち、豊根村の間黒地区の翁面と面相が類似するほか、花の舞の衣装も豊根村と同じ形式であることから、花祭の系統によって衣装や道具にも相違があった可能性がある。花祭は舞う人の役割や身分に応じた衣装があることから、芸能の神事的要素が衣装の決定に影響を及ぼしたものと考えられる。

●キーワード：民俗芸能衣装 (costume of performing folk arts) / 花祭 (Hanamatsuri) / 比較研究 (comparative study)

I. はじめに

国内の民俗芸能に関する学術的研究は1927年「民俗芸術の会」結成を機に始まったが¹⁾、衣装については消耗が激しい上に民間伝承という点から実物資料に乏しく、先行研究も少ない。衣装や道具は芸能発生当初から製作あるいは着用されてきたと考えられるが²⁾、成立から伝承、変遷の過程は明らかでない。こうした事態を受けて、筆者は今までの研究で、東北地方の修験系神楽³⁾の「翁」⁴⁾を対象に、現存する衣装や道具の実地調査を行った。翁は能楽の「式三番」⁵⁾との関係が認められる演目で、国内の民俗芸能に広く伝承されることから、芸能間の衣装の比較研究が可能な演目として調査対象とした。その結果、地域や芸能の近い芸能は衣装や道具も類似する傾向にあることが分かった。一方で、地域や芸能が異なる芸能間でも、共通する特徴を持つ衣装や道具の存在も確認できた。前者は芸能の伝播過程が関係する可能性、後者は広範囲にわたって衣装や道具について規定があった可能性が推測されることから、調査の範囲を拡大して研究を継続することにした。衣装の実物調査と複数の調査結

果の比較を通して、地域ごとの衣装の特徴や分布の様子を明らかにすること、また芸能と衣装の関係性や、衣装の成立から変遷の過程について考察することを本研究の目的としている。

愛知・長野・静岡の3県に跨って流れる天竜川とその支流沿いに、「花祭」と呼ばれる霜月神楽が多数伝承されている。花祭は1976年5月4日の第一回国重要無形民俗文化財に指定された30件のうちの1つであり、早くから民俗学を中心に研究者の注目を集め、芸能や神事の解明、祭文や史料の分析、歴史的背景や地域社会に関する研究など多くの先行研究がある⁶⁾。衣装については高橋が「日本の舞踊衣裳の構成」(1968, 1969)^{7) 8)}に、幾つかの地区の花祭の衣装の構成や模様、着装を演目別に記録しており、演目と衣装の模様は絶対的ではないこと、それぞれの動作に適した衣装の形態であることなどを報告しているが、膨大な先行研究に対して衣装のみに着目した研究は少ない。また、他芸能の衣装と比較した研究は見られない。本研究では愛知県北設楽郡設楽町に伝承される「津具花祭」に対して、翁に用いられる衣装と道

具の実物調査および聞き取り調査を実施した。また津具花祭の調査結果を提示した上で、近隣地域で伝承される田楽および東北地方の修験系神楽の調査結果との比較を通して考察した結果について述べる。

II. 花祭

花祭は愛知県北東部の北設楽郡を中心に行われる霜月神楽である。伊勢神宮外宮の神楽を祖とすることから伊勢流神楽、湯立が行われることから湯立神楽⁹⁾とも呼ばれる。北設楽郡は北が長野県下伊那郡、東が静岡県浜松市天竜区に接しており、東栄町、豊根村、設楽町の3町村で構成される。早川「花祭」(1930)によると、東栄町12、豊根村7、設楽町1の計20ヶ所の伝承が確認されるが¹⁰⁾、3ヶ所が廃絶、3ヶ所が休止し、現在は東栄町10、豊根村3、設楽町1の計14ヶ所で行われる¹¹⁾(図1)。早川は天竜川水系の川に沿って、花祭を「大入系」と「振草系」の2つに分類したが、東栄町的小林地区は両系統に属さない特殊性が認められることから「大河内系」と呼ばれる¹²⁾。

花祭の起源については、現存する史料や伝承によると室町期に吉野・熊野の修験者によってもたらされたと推測される¹³⁾。当初は湯立を中心とした神事であったが、室町末期から江戸初期の間に、伊勢信仰(伊勢流神楽)の移入によって「花の舞」などの舞や、面を用いる面形舞(猿楽芸)が加えられ¹⁴⁾、江戸期に白山信仰の影響を受けて「生まれ清まり」の祈願、浄土入りの意義付けがなされた¹⁵⁾。慶応4年(1868)「神仏分離令」を受けて仏教色を排除し、神道的に変化させた地区もある¹⁶⁾。現在の花祭は、時代の経過と共に他要素と融合し盛大化、芸能化したものと考えられる。

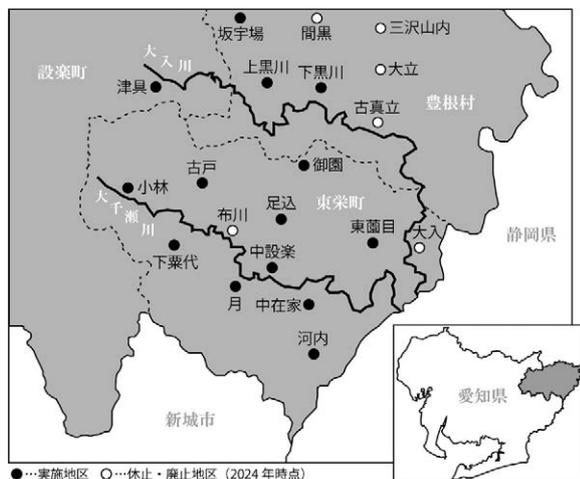


図1 早川孝太郎「花祭」(1930)掲載 北設楽郡の花祭伝承地

花祭は禰宜に当たる花太夫と、宮人と呼ばれる特殊家系の者が神事や湯立などの中心行事を執り行う。舞は年齢階梯によって構成され、地内の青少年が当るが、面形舞は重要な役として宮人が行うなど(役舞)¹⁷⁾、年齢や家系によって役割が決定された。花太夫や宮人は世襲制であったが、家の没落や離村により維持が困難となったため、近年は親類縁者や地内あるいは近郷近在の者が中心となることが多い。したがって、以前ほど身分に応じた役割分担に厳密さを求めなくなった風潮がある。花祭の行われる場所は花宿と呼ばれる民家で、土間の中央に竈を築き、五方に柱を立て榊や笹を添え(舞庭)、囃方の楽座となる神座を設け、竈の上に湯蓋、四方にざげちと呼ばれる切り草を飾る。現在は民家でなく、集会所などの決まった場所で行われる。

1. 花祭の翁

花祭の面形舞は「榊鬼」などの鬼と、「翁」などの田楽・猿楽芸系統のものがある。花祭の翁は、猿楽芸(翁猿楽)のうち三番猿楽(三番叟)を取り入れたもので、伊勢信仰の影響下に禰宜・巫女・尉(三番叟)の形式¹⁸⁾に再編成したものと考えられる¹⁹⁾。三番叟は翁に続いて出る老人舞で、後半に黒色切顎の老人面(黒色尉)を着けて種卸しや種蒔の所作を行う。荘重な翁に対して、三番叟は極めて軽快で躍動的な動作である²⁰⁾。花祭の翁問答の詞章は、自身の存在を明かして都入りから鎌倉下りとなり、最後に万歳楽を唱えるもので、近隣地域で行われる田楽の三番叟と類似する²¹⁾。また翁に用いられる面の多くは黒色尉で、右手に鈴を持つことから三番叟であることが窺える。花祭にはいわゆる能楽の翁は伝承されないが、田楽には宝数えをする翁が存在する²²⁾。

花祭の翁役は古くは宮人、あるいは「おきな」屋敷と呼ばれる家の宮人が務めたが²³⁾、先述した通り、現在はこの限りではない。

III. 研究対象

1. 津具花祭

津具花祭は設楽町(旧津具村)に伝承される唯一の花祭である。津具は天竜川水系の大千瀬川の支流である大入川の上流部に位置し、大入系に分類される。現在は津具の氏神である白鳥神社の舞庭で、1月2日午後から3日の朝にかけて行われる²⁴⁾。

津具花祭は神仏分離令を受けて、神事に関わる行事を除外し、舞を中心とした構成へと変わった²⁵⁾。明治期初

年に警察の干渉があった際、禰宜と一部宮人の中で花祭廃止論が生じたが、残りの宮人らは明治14年（1881）に「倭舞」と改称し、湯立などの一部神事を除き花祭を継続させた²⁶⁾。明治25年（1892）4月12日には面や衣装を保管していた小学校が火災にあい、多くを焼失したが、当時の禰宜と宮人7名が京都に赴き、山見鬼と白鬼、古榊鬼、本榊鬼の半焼けの面を修復したため、花祭は中断することなく存続したという²⁷⁾。この伝承にはもう1説あり、「村松米一控」によると、火災後、榊鬼面の焼け残りを名古屋に持参し、ほかの面はその特色を絵に描いて製作を依頼したため、山見鬼と白鬼は面相が変わったと記されている²⁸⁾。

2. 津具花祭の翁

津具花祭曰く、近年の翁は宮人ではなく舞の出来る年長者が当るが、明治期以前のことは分からないという。津具の宮人は禰宜家を中心に榊屋敷と山見屋敷があり、それぞれ舞う家が定められていたが²⁹⁾、明治期に禰宜と一部宮人が花祭から離れたことにより、役舞の制度も失われたと考えられる。早川「花祭」（1930）に津具の翁問答の詞章が採録されているが、この問答は現在行われていない。花祭の翁の問答は改め役（もどき役）との間で交わされる長大かつ滑稽なもので、津具花祭に限らず、現在は省略あるいは短縮して行われている。

翁の扮装は、肌着の上からたつけ（袴）を履き、羽織を着る。この羽織は白色無地のため、津具では「白衣」と呼ぶ（以下、白衣とする）。白衣の胸紐（衿）を結び、たつけの腰紐の下に通し、その上から襷を掛ける。着用者の額に面の中央が当たる位置に翁面を着け、黒布を頭頂部から顎下にかけて結ぶ。白足袋に草履を履き、採物は右手に鈴、左手に翁幣を持つ。筆者は2021年10月30日と31日に津具文化資料展示センターにて、翁のものを中心に津具花祭の衣装と道具の実物調査を実施した。現在使われる衣装や道具のほか、以前使われていた古いものも調査対象とした。形態や色、模様など外観の調査を中心に、詳しい用途や製作された状況などについて、津具花祭保存会会長の高井氏と副会長の村松氏にお話を伺った。

IV. 調査結果

津具花祭が所蔵する中で、最古といわれる翁の衣装および面を表1に示す。現存する衣装と道具は、焼失を免れた鬼面を除き、明治期の火災以降に作られたものと考

えられる。いずれも、焼失前の要素をどの程度継承したものかは不明である。

1. 翁衣装の実物調査の結果

(1) 白衣

身頃は衿が無く、袖は筒袖、両脇と後ろ中心の裾にスリットが入る。衿は胸部より上は身頃に縫い付けられ、それより下は身頃から切り離された形で、胸紐として用いられる。衿の裏側に「平成二十九年度 元気な愛知の市町村づくり補助事業」の記銘があることから、2017年に補助金を得て製作された衣装であることが分かる。津具花祭曰く、この白衣は1つ前のものを参考に製作されたというが、前の白衣が所在不明のため、実物を確認することは出来なかった。2005年に撮影された写真を確認したところ、現在使用される白衣とほぼ同じ形態であったことが窺える（図2）。

津具花祭曰く、白衣は子どもを含む花祭関係者が着用できるように寸法違いで小4着、中3着、大20着程度が用意されており、舞庭に立ち入る時は必ず着用するという。舞では「ひのねぎ」「ばちの舞」「式さんば」「御神楽」「一の舞」「播り粉木の舞」のほか、お供役が着用する。また津具花祭では三拍子の舞の時は白衣を着用する風習がある。「地固めの舞」「三つ舞」「四つ舞」では、序盤に三拍子の舞が入る「扇の舞」と「八刀の舞」で登場から舞の中盤まで白衣を着用し、後半は白衣を脱ぎ、下に着用した衣装姿で舞う³⁰⁾。また「花の舞」の「花笠の舞」でも同様に白衣を舞中に着脱する。

(2) たつけ（袴）

茶地に黄と茶の糸で蔓花模様の刺繍が施されたものである。茶地はS撚りとZ撚りの糸が不規則に織りこまれ、



図2 津具花祭の翁 2005年撮影 津具花祭保存会提供

梨地織のような組織である（図3）。梨地織は昭和初期に愛知県尾州で開発された織物であることから³¹⁾、たつげはこの時代以降に製作されたものと推測される。現在はたつげではなく、平成24年（2012）に寄贈された袴を着用している（図4）。袴は青地に金の向鶴丸文様の織地で、たつげと形態や模様が相違する。津具花祭曰く、伝承者らで衣装を新調する時は、模様や色を変えないように古いものを参考にして製作するが、外部から寄贈や奉納された衣装については、以前のものとは外観と異なることがあったという。このたつげ（袴）は、「ひのねぎ」の舞と兼用される。



図3 たつげ 組織拡大

2. 翁に用いられる道具の実物調査の結果

(1) 翁面

額や目尻、頬などに皺の彫刻が施され、瞳のみを削り貫いた目、切顎の造形である。植毛による円形の飾り眉と顎髭がある。顔は肉色、唇は赤、目の縁取りは黒で着色されており、表面の様子から塗り直されたことが窺える。能楽の翁面（白色尉）に見られる笑みの表情ではなく、尉面に近い面相である。面に記銘はなく、製作者や年代は不明である。

(2) 小物・採物

津具花祭では鬼や女役など一部を除き、舞う人は上衣の上から「湯だすき」と呼ばれる襷を掛ける。掛け方は片襷の要領で、左肩から両脇に通して左胸の前と後ろの位置で結ぶ。現在は予め結んだ状態で固定されたものを、頭から被って着用する形式となっている。襷は綿入りで先端に房が付いており、布地や房の色違いのものが数種類ある。翁は赤紫地に鹿の子模様の布地で、赤の房が付いた襷を用いる。

翁幣は、花祭りの予行演習（刀立て）の前までに他の切り草と共に毎年製作される。翁幣は、5色の紙を2つ折りにして切った「ひいな」に、肩と持ち手の棒を付けた御幣である。ひいなは五方位に飾るという意味があり³²⁾、津具は東緑（青）、西白、南赤、北黒（紫）、中央黄の5色で、それぞれ青竜、白虎、朱雀、玄武、麒麟の神を表す。持ち手の棒の上部中央に顔面が切り出されている（図5）。



図4 袴 平成24年（2012）寄贈品



図5 翁幣

V. 考察

1. 津具花祭の翁衣装と道具の特徴

(1) 白衣

津具花祭の衣装道具に関する史料として、明治27年（1894）旧正月「倭舞器具寄付人名記」がある³³⁾。

- 一、楠鬼 壱ツ 今泉品次郎 村松又四郎 佐々木滋三
- 一、白鬼 壱ツ 畠山常六 長谷川鉄五郎 村松歌二郎
- 一、猿田彦命 壱面 村松亘
- 一、山見鬼 一面 村松太七 佐々木善八 佐々木福十一
- 一、箆笥 壱ヶ 山崎三六
- 一、称宜・翁・倭舞装束四人揃 村松梅次 外三十三名
- 一、太鼓 一個 村松梅次 外三十三名
- 一、獅子 一ヶ 明治二十八年旧正月 鶴田清
- 一、獅子皮 一枚 村松丈吉
- 一、鉦 一挺 鈴木鉄弥
- 一、鉦 一挺 清川道五郎
- 一、鈴 二ふり 佐々木徳五郎

この史料は明治25年（1882）の火災後に、衣装道具を調達した時の記録で、「称宜・翁・倭舞装束四人揃」が白衣に当たる衣装であったと推測される。また「倭舞装束」とあることから、当時花祭の中心を担っていた宮人の衣装であったとも考えられる。「津具村誌」（2000）によると、火災の翌年である明治26年（1893）旧暦正月13日に、鬼の衣装や襷、鉦が奉納されたとあるが³⁴⁾、この記録史料の原本は現在所在不明である。これらの史料からは、白衣と鬼の衣装が、祭を開催する上で必要不可欠である面や採物、楽器類と共に、焼失後の早い時期から用意されたことが分かる。したがって、特に重要な衣装と認識されていたことが窺える。史料には白衣の形態や模様に関する記述はないが、焼失後すぐに用意され、かつ重要視された衣装であったことを考慮すると、焼失前の衣装の形式から、大きく変わらない形で製作されたのではないかと考えられる。現在の白衣も、多くの舞で用いられ、舞庭に立ち入る時にも必ず着用する風習があることから、特別な衣装として扱われていることが分かる。

（2）奉納された衣装

津具花祭曰く、衣装を新調する際は舞う人の体格に合わせて寸法の調整を行うが、衣装の形態や模様は古いものを継承するという。一方で、翁のたつげが袴に変更されたように、衣装の奉納や寄贈があった場合はその限りでない。花の舞の「花笠の舞」の衣装も、大正7年（1918）の寄贈によって単の上衣から、筒袖長着の上に袖無羽織を重ねる形式へと変化した（図6）。模様も筒描染色による鶴や松から、金駒刺繍による鶴になっている。花祭の花の舞の衣装は、東栄町が筒袖あるいは広袖上衣の上に金糸刺繍などで模様を表した袖無羽織を重ね、豊根村は下着用の広袖上衣の上に模様を染色した直垂を重ねる

形式である。津具花祭の「花笠の舞」の衣装も、古くは豊根村と類似した形式であったと考えられる。なお、津具花祭の花の舞の「ほんの舞」「ほんでんの舞」の衣装は、現在も豊根村と同様の形式である。

（3）翁面

面の焼失後、幾つかの鬼面は京都あるいは名古屋で修復したとされる。また青鬼（伴鬼）面は、交流のあった豊根村の間黒地区からきたものと伝わる³⁵⁾。津具花祭の翁面は白色尉の特徴を持つが、花祭は黒色尉の翁面が多い。東栄町の中設楽地区の翁面は、津具花祭と同様に肉色切顎の造形であるが、目の形や表情など全体的な面相が異なる。豊根村の間黒地区の翁面は、切顎ではないが、肉色で目鼻の造形が津具花祭のものに類似する。津具花祭の翁面は焼失後に変容した可能性も否定できないが、



図6 花の舞「花笠の舞」衣装
上：古い上衣（袴は所在不明）、下：大正7年（1918）寄贈衣装

青鬼面や花の舞の衣装の形式を踏まえると、衣装や道具は豊根村の花祭との関連性が窺える。

2. 他芸能の翁の衣装・道具との比較

筆者の調査によると、花祭の翁は宮人の衣装を着用する地区と、ひのねぎと同じ衣装を着用する地区がある。津具花祭の白衣は「称宜・翁・倭舞装束」であることから前者に相当すると思われるが、たつけ（袴）は後者に該当する。花祭の翁の上衣は羽織あるいは直垂、下衣はたつけあるいは袴の形態で、色や模様は地区によって異なる。頭部は、頭巾を被るか布地（手拭い）を頭頂部から顎下にかけて結ぶ。採物は鈴と翁幣である。翁面の形式は黒色尉が多いが、白色尉や尉面、父尉面の要素を持つものなどが混在する。天竜川とその支流沿いは、田楽や神楽が多数分布する地域であることから、他種芸能の面の系統を受け継いだものがある可能性が考えられる。

(1) 田楽

田楽とは田植の行事を芸能化したもので、平安末期には田楽踊、鎌倉末期には田楽能を主要芸とした。その後田楽は衰退したが、修験者によって三信遠地方を中心とする地方の寺社に伝えられた³⁶⁾。設楽町には「田峯田楽」と「黒倉田楽」が伝承されており、前者は「翁面」、後者は「四寸の鍵取り」が花祭の翁であり、能楽でいう三番叟に相当する。黒倉田楽は、中断した時期に指導を受けた花祭の要素を持つ³⁷⁾。

田峯田楽は世襲制による24の役割で組織され、「魔払」役が翁面を演じ、衣装は役割で固定のため他の演目でも兼用される。魔払の衣装は綿入り長着とたつけを着用し、襷を掛け、頭に鉢巻を巻き、手甲、足袋、草履を履く。黒倉田楽は世襲制であったが、現在は集落全体で伝承しており、1戸につき1着ずつ揃いの衣装を持つ。鬼役を除く衣装は羽織と袴を着用し、足袋、草履を履く。四寸の鍵取りでは頭巾を被る。双方ともに黒色の翁面で、田峯田楽は切顎、黒倉田楽は切顎でない。また採物は前者が鈴と扇子で、後者は鈴と御幣である³⁸⁾。設楽町の2つの田楽は面や採物が共通するが、衣装は形態や模様、着装方法が相違する。津具花祭の翁と比較すると、黒倉田楽は衣装の形態が類似する。また田峯田楽は舞う人の役割（身分）によって衣装が割り振られている。その点は、宮人が行う神事や、役舞で着用する専用の衣装を保持する花祭と同質といえる。

津具花祭の翁面は顔の正面に着けず、額に面の中央が当たる位置に着け、顔の下半分が露出する（図7）。「ひ

のねぎ」「揺り粉木の舞」も同様の方法で面を着ける。津具以外の花祭では鬼面を除き、面は顔の正面に着ける。津具花祭と類似する例としては、新城市や静岡県の田楽の翁に、面を額上に着けるところがある。この地域の翁は紙や扇に書かれた詞章を読み上げることから、手元を見るために面を額上に着けた可能性がある。一方で、翁の詞章に「額に当てしかの面」「額に当てし木の面」とあることから、額上に着けたとも考えられる³⁹⁾。津具地区はこれら田楽の影響を受けた可能性もあるが、津具花祭の翁は詞章の読み上げを行わず、また問答に同様の文言はない。津具花祭の翁面は瞳のみを刳り貫いた目の造形で、顔の正面に着けると前方や足元の確認が困難になることから、視界確保のために面を額上に着けたのではないかと推測される。また、花祭の鬼面は舞う人の頭や顎に「枕」と呼ばれる緩衝材を固定し、面の中央が顔の上部に当たる位置で装着する。津具花祭も同様の方法で鬼面を着け、目の正面に位置する鬼面の鼻の穴から外を見ることから、鬼面の装着方法に倣ったとも考えられる。

(2) 東北地方の修験系神楽

東北地方の修験系神楽と花祭の翁について、本田は次のように述べている⁴⁰⁾。

花祭の「翁」は、実はその「三番叟」の翁であつた。（中略）この「翁」と「三番叟」は對をなしてはるでも、主復の関係ではなかつた。昔色々の翁舞が行はれてゐて、そのうち眞面目なものゝ滑稽なものゝが偶々選ばれて残つたのであらう。その點は、主復の関係にある山伏神楽・番樂の「翁」及「三番叟」とはやゝ異なる。

東北地方の修験系神楽の翁の衣装は、筆者が以前行った調査によると、東北地方全域で共通点が見られる⁴¹⁾。三番叟の衣装は伝承地によって形態や模様が異なるが、上半身は衣装の上から襷掛け、または両袖を脱いで垂らす「脱ぎ垂れ」姿で、下半身はたつけや脚絆を着用し、赤の衣装あるいは小物を身に着けるところが多い。手拭いを頬被りし、剣先烏帽子を被り、黒色尉、右手に鈴、左手に扇子を持つ。いずれの地域も翁と比較して世俗的な印象を受ける格好であるが、本田の記述にある通り、三番叟は主となる翁のもどき⁴²⁾であるということ、また三番叟特有の激しい動作に適應するためと推測される。花祭の翁の衣装は、東北地方の修験系神楽の翁よりも三番叟に近いが、烏帽子を被らないなど相違する点も多い。



図7 津具花祭の翁面の装着方法

東北地方の修験系神楽は、ほぼ全ての演目で同じ衣装を着用する早池峰流神楽を除き、大抵は演目専用の衣装のほか、武士役、道化役、山伏役、女役など役柄に合わせた衣装があり、必要に応じて着回す。翁の衣装は翁の裏舞である「松迎」や「蕨折」の老翁役、上衣は三番叟の脱ぎ垂れ用の着物として兼用するところが見られる。花祭も鬼役、女役など役柄に合わせた衣装もあるが、花祭は家系や年齢によって神事や舞における役割が決定されることから、宮人の衣装など舞う人の役割に応じた衣装がある。その点は、東北地方の修験系神楽には見られない特徴といえる。東北地方の修験系神楽は演目や役柄に合わせた衣装が割り振られ、芸能の演劇的要素が衣装に反映されるが、花祭は舞う人の役割(身分)に応じた衣装があることから、衣装の決定に芸能の神事的要素からの影響が窺われる。一方で、面や採物は演目や役柄に合わせたものが用いられた。近隣地域の田楽の衣装や道具にも同様の現象が見られることから、この地域の特徴であるのか、今後検討を要する。

VI. まとめ

津具花祭の翁に用いられる衣装と道具の実物調査と、その調査結果を近隣の田楽や東北地方の修験系神楽の衣装と比較したところ、以下の結果が得られた。

- ①翁の羽織に当たる白衣は、舞庭に入る際に着用するほか、多くの舞で着用される。白衣は「禰宜・翁・倭舞装束」として、火災の2年後には用意されたことから、鬼の衣装と並び重要な衣装であったことが窺われる。

また「倭舞装束」とあることから、当時花祭の中心を担った宮人の衣装であったとも考えられる。

- ②翁のたつげは、昭和初期以降に製作されたものと考えられる。現在着用する寄贈品の袴は、模様や形態などがたつげとは相違する。伝承者らで衣装を新調する時は古い衣装を継承する形で製作するが、外部から寄贈や奉納があった場合は変容することがある。
- ③翁面は白色尉の特徴を持ち、交流のあった豊根村の間黒地区の翁面と面相が類似するが、他地区の花祭は黒色尉の翁面が多い。花の舞の衣装も豊根村と同様の形式であることから、津具花祭の衣装や道具は豊根村の花祭との関連性が推察される。津具花祭と豊根村の花祭は大入系に分類されることから、系統によって衣装や道具にも相違があった可能性が考えられる。
- ④津具花祭の翁面は、顔の正面ではなく額上に着けることから、新城市や静岡県の田楽の翁面の装着方法と類似する。しかし、津具花祭の翁は詞章の読み上げを行わず、また詞章に「額に当てしかの面」などの文言は見られない。津具花祭の翁面の目の形状から、視界確保のために面を額上に着けた可能性が高い。
- ⑤東北地方の修験系神楽は演目や役柄に合わせた衣装が用いられるが、花祭は舞う人の役割や身分に応じた衣装もあることから、芸能の神事的要素が衣装にも影響を及ぼしたものと考えられる。一方で、面や採物は演目や役柄に合わせたものが用いられており、近隣地域の田楽にも同様の現象が見られる。

今後も東栄町と豊根村の花祭のほか、田楽も含めて包括的に調査を進める予定である。その上で、系統による衣装の相違、舞う人と衣装の関係性など、本研究で得られた結果についても更に考察を深めたいと考えている。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP20K00220の助成を受けたものである。調査にご協力頂いた津具花祭保存会会長の高井公夫様、副会長の村松元樹様、および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 民俗学事典編集委員会『民俗学事典』丸善出版, 2014, p.606
- 2) 舞踊と扮装の関係は「舞踊を生かすための扮装」と「扮装を生かすための舞踊」の2つに分類される。芸能は衣装や道具を用いた動作や着替えが多く、こうした物着は儀式的舞踊の名残とされる。(小寺融吉『舞踊の美学的研究』大河内書店, 1948)

- 3) 東北地方の山々で活動した修験山伏が伝えた芸能で、太平洋側では山伏神楽、日本海側では番楽、下北半島では能舞などと呼ぶ。信仰圏の山麓の村にて獅子舞や猿楽能などを演じ、家内安全や五穀豊穡を祈祷した。修験道廃止令以降、山伏から村の人々へ引き継がれた。(菊池和博『東北の民俗芸能と祭祀行事』清文堂, 2017, pp.113-116)
- 4) 老人の姿をした「神」を意味する。翁が自分の素性を語り土地を祝う言葉を述べながら、舞台を踏み回り五穀豊穡、息災延命を祈る舞。(三隅治雄『日本民俗芸能概論』東京堂出版, 1972, pp.109-114)
- 5) 翁猿楽。鎌倉中期頃に翁面・三番猿楽・父尉の3人の老翁が登場する形式が古い形とされ、現在は千歳・翁・三番叟の3番形式が定着した。(小林責, 西哲生, 羽田昶『能楽大事典』筑摩書房, 2012, p.414)
- 6) 花祭研究の代表的なものとして、早川孝太郎による大正13年から昭和5年(1924-1930)の調査をまとめた『花祭』(1930)が挙げられる。また、折口信夫による花祭および近隣地域の芸能についての研究(『山の霜月舞』(1930)など)や、武井正弘による花祭の祭文研究(『花祭の世界』(1977)など)、山崎一司による花祭の成立や伝承過程の研究(『花祭りの起源』(2012)など)がある。
- 7) 古戸地区の花祭の衣装を中心とした研究。(高橋春子「日本の舞踊衣裳の構成—三河地方の花祭装束について—」『民俗史学』8, 1, 1968, pp.13-29)
- 8) 月地区の花祭の衣装を中心とした研究。(高橋春子「日本の舞踊衣裳の構成—三河地方における花祭の舞と装束—」『名古屋市立女子短期大学紀要』18, 1969, pp.39-60)
- 9) 清めの行事である湯立が、神楽に取り入れられ祈禱化したものが湯立神楽。釜に湯を沸かし、その湯を勧請した諸神に献じ、集まった人々も同じ湯を受けて清まり、巫覡が神懸りして神の託宣を乞う神事。(本田安次『日本の伝統芸能第一巻』錦正社, 1993, pp.103-105)
- 10) 早川孝太郎『早川孝太郎全集I』未来社, 1971, pp.34-36
- 11) 東栄町の大入、豊根村の大立と古真立が廃絶。東栄町の布川、豊根村の三沢山内と間黒は活動を休止。
- 12) 中村茂子『奥三河の花祭り—明示以後の変遷と継承—』岩田書院, 2003, pp.75-94
- 13) 山崎一司『隠れ里の祭り』富山村教育委員会, 1987, pp.75-100
- 14) 面形舞のうち、鬼は大神楽から、そのほかは猿楽や田楽の流れを引くもので、行事に興を添え、願主や見物客の興奮を導くための工夫であった。(本田安次『日本の伝統芸能第六巻』錦正社, 1995, p.316)
- 15) 前掲書13), pp.147-198
- 16) 神仏分離令の影響は各集落に及び、仏教語が神道語に変更されたほか、如来の名称や文言も神道的に変化している。(北設楽郡東栄町『東栄町誌伝統芸能編』東栄町誌編集委員会, 2004, pp.48-52)
- 17) 前掲書10), pp.325-342
- 18) 花祭の翁は禰宜・巫女の舞によって迎え出される。禰宜・巫女の場面は一続きで、双方の詞章はほぼ同じである。禰宜は「火のねぎ」ともいい、もとは巫女を誘い出す火や松明であったものが、火と人物を別個にして独立させたものと考えられる。(前掲書10), pp.229-242)
- 19) 新井恒易『能の研究古猿楽の翁と能の伝承』新読書社, 1966, pp.146-149
- 20) 仲井幸二郎, 西角井正大, 三隅治雄『民俗芸能辞典』東京堂出版, 1981, pp.212-213
- 21) 前掲書19), pp.146-161
- 22) 翁の語りの目的は宝数えにある。三信遠地方に伝わる宝数えをする翁は東栄町の古戸(廃絶)のほか、愛知県新城市の黒沢、長野県下伊那郡の新野、静岡県浜松市の西浦と懐山、神沢、寺野、川根本町の田代、静岡市の日向。(前掲書19), pp.83-87)
- 23) 前掲書10), pp.340-342
- 24) 昔は白鳥神社の境内で1月15日に行われた。
- 25) 特別展「奥三河のくらしと花祭・田楽」実行委員会『特別展奥三河のくらしと花祭・田楽』特別展「奥三河のくらしと花祭・田楽」実行委員会, 2013, p.86
- 26) 安藤慶一郎, 津具村編『津具村誌』津具村, 2000, pp.494-497
- 27) 北設楽花祭保存会『中世の神事芸能花祭りの伝承』北設楽花祭保存会, 1980, p.25
- 28) 前掲書26), pp.496-497
- 29) 前掲書26), p.496
- 30) 地固めの舞と三つ舞、四つ舞は「剣の舞」のみ白衣を着用せず、花の舞は「花笠の舞」で白衣を着用する。
- 31) 新村出編『広辞苑第七版』岩波書店, 2018, p.90
- 32) 前掲書10), p.74
- 33) 前掲書27), p.26
- 34) 前掲書26), p.497
- 35) 前掲書26), pp.497-498
- 36) 前掲書4), pp.155-157
- 37) 北設楽郡設楽町『設楽町史教育・文化編』北設楽郡設楽町, 2004, pp.218-225
- 38) 角谷彩子「翁を中心とした衣装の比較調査—愛知県北設楽郡設楽町の田楽—」『服飾文化学会第25回総会・大会要旨集』2024, p.6
- 39) 山内登貴夫『民俗の仮面』鹿島研究所出版会, 1967, pp.79-81
愛知県新城市の黒沢、鳳来寺、静岡県浜松市の懐山、寺野の翁が顔を額上に着ける。
- 40) 本田安次『日本の伝統芸能第二巻』錦正社, 1993, pp.16-17
- 41) 角谷彩子「実地調査と科学分析に基づく翁衣装の研究—山伏神楽・番楽—」『令和三年度民俗芸能学会大会要旨集』2021, p.2
- 42) 芸能において神の言葉や所作を副演出すること、およびその役をいう。神の言葉や所作を翻訳し、解説するのがもどきの原義である一方、神の動作をからかったり、誇張したりする滑稽な性格をも兼ね備える。(前掲書20), p.447)

図版出典

- 図7 特別展「奥三河のくらしと花祭・田楽」実行委員会『特別展奥三河のくらしと花祭・田楽』特別展「奥三河のくらしと花祭・田楽」実行委員会, 2013, p.95

表1 津具花祭 所蔵する中で最古の翁の衣装と面

白衣 2017年製作



たつけ



翁面



アクターネットワークと持続可能性移行

—沖縄県 読谷山花織の復興過程—

Actor Networks and Sustainability Transitions :
Reconstruction Process of Yuntanza Hanai in Okinawa Prefecture

糸林 誉史* 山崎 功**

ITOBAYASHI Yoshifumi and YAMAZAKI Isao

要旨

本研究は、読谷山花織の復興過程についてアクターネットワーク理論（ANT）を援用して分析し、持続可能性移行研究との接合への展望を示した。ANTの翻訳プロセスの枠組みを用いた分析により、以下の発見が得られた。問題化段階では、村長と婦人会長が復興を地域発展の課題として定義した。関心付け段階では、熟練技術者による高機を用いた新たな織り方の開発が技術的・社会的イノベーションとして機能した。登録段階では、各アクターの役割が明確化され、特に技術指導者の貢献が重要であった。動員段階では、事業協同組合の設立を通じてネットワークの制度化が進んだ。これらの発見は、伝統工芸の復興が複雑な社会的プロセスであることを示している。ANTと社会技術システムの変遷を研究する持続可能性移行研究の接合により、長期的な構造変化と短期的なアクターの相互作用を同時に捉える分析が可能となり、地域主導の持続可能な発展におけるリーダーシップ、イノベーション、制度化の重要性をより包括的に理解できると考えられる。¹⁾

キーワード：アクターネットワーク理論 (actor-network theory) / 読谷山花織 (Yuntanza Hanai) / 持続可能性移行 (sustainability transition)

I. はじめに

読谷山花織は、沖縄県読谷村に伝わる伝統的な紋織織物である。第二次世界大戦による壊滅的被害と戦後の社会変動により、その技術継承が一時途絶えかけていたが、1960年代半ばから始まった村の復興運動を契機として、現在では沖縄を代表する伝統的工芸品の一つとして広く認知されるに至っている。2024年3月現在、読谷山花織事業協同組合は下里直美理事長のもと104人の組合員を擁し、伝統技術の継承と発展に取り組んでいる。

本稿では、フランスの社会学者ミシェル・カロンが提唱した翻訳社会学（Callon, 1984）のフレームワークを援用し、読谷山花織の復興プロセスを分析する。ここで「翻訳」とは、異なるアクターの利害や目的を調整し、共通の目標に向けて協力関係を構築していく過程を指す。この過程を通じて、アクター間のネットワークが形成され、変容していく。具体的には、アクターネットワーク理論（ANT）の中核的概念である翻訳プロセスの4段階（問題化、関心付け、登録、動員）に沿って、読谷山花織の復興における多様なアクターの相互作用と、ネットワークの形成・変容過程を明らかにする。

本研究でカロンの翻訳社会学を援用する学術的意義は主に3点ある。第一に、この理論が人間と非人間のアクターを対称的に扱うことで、読谷山花織の復興過程における技術（高機や染料など）や制度（組合や法律など）の役割を、人間アクターと同等に分析できる点である。第二に、翻訳プロセスの4段階（問題化、関心付け、登録、動員）という分析枠組みが、長期にわたる複雑な復興過程を時系列的かつ体系的に理解する上で有効である点が挙げられる。第三に、この理論がアクター間の利害調整や同盟形成のダイナミクスに焦点を当てることで、伝統工芸の復興という文化的実践が同時に政治的・経済的なプロセスでもあることを明らかにできる点である。これらの特徴により、カロンの翻訳社会学は読谷山花織の復興過程を多角的かつ動的に分析する上で適切な理論的枠組みを提供すると考えられる。

本研究は、2011年から継続して行われてきた読谷山花織に関する共同研究の成果に基づいている。主な調査方法として、聞き取り調査と参与観察が採用され、得られたデータはアクターネットワーク理論の枠組みを用いて分析・解釈された。今回の分析では、これまでの調査結

果に加え、最新の聞き取り調査のデータを質的分析ソフトウェアNVivo14に蓄積し、総合的な分析を行った。

II. 歴史的背景と前提

読谷山花織の復興過程を理解するためには、その歴史的背景と問題化の前提を把握することが重要である。

1. 米軍基地の影響

1945年4月、米軍が読谷に上陸し、地域住民は米軍と日本軍の地上戦に巻き込まれた。2002年3月までに判明した読谷村の戦没者は3924名に上り、4人に1人の犠牲を出すこととなった(橋本編著 2009: 33-35)。生き延びた村民も、焦土と化した読谷から避難を余儀なくされた。

1946年4月、米国海軍軍政府下で沖縄民政府が設立され、知花秀康が読谷村長に任命された。1946年8月より47年11月までに5次にわたる村民移住があり、1万4千あまりの住民が帰村したが、物資不足のため多くの人々が米軍作業に従事せざるを得なかった。

1951年以降、米軍基地の拡大に伴う土地収用が本格化した。1953年4月の米国民政府令「土地収用令」による軍用地強制収容により、読谷村の耕地は戦前の3割にまで減少した(橋本編著 2009: 34-42)。この急激な農地の喪失が、村の経済構造を基地依存型へと変容させた。

2. 変化と問題化の萌芽

1950年代から1960年代にかけて、読谷村の経済は基地依存型へと移行していった。多くの住民が基地内での労働や基地関連産業に従事せざるを得ない状況が続いた。一方で、本土復帰前の特殊な経済体制下で、低関税により日本本土から流入する安価な化学繊維製品が市場を席卷する中、伝統的な織物産業は衰退の一途をたどっていた。

1962年、ケネディ政権下で「新沖縄政策」が打ち出されたが、1961年に就任した高等弁務官キャラウェイは「沖縄が軍事的に重要であり、制限なしにアメリカが統治できる沖縄を返還すべきではないとの立場をとっていた」。「キャラウェイは、日本と沖縄を引き離す離日政策を断行し、日本政府からの援助を米国からのものより低く抑えた」(宮城 2022: 92-97)。この「キャラウェイ旋風」と呼ばれる強権的な統治は、沖縄住民の反発を招き、本土復帰を求める動きを加速させた。同時に、この状況は読谷村において伝統文化の再評価と地域経済の自立化を模索する契機ともなった。

1960年代半ばになると、基地経済への依存からの脱却と伝統文化の再評価を求める機運が高まり始めた。特に、強権的なキャラウェイ旋風下の1964年、「パラシュート降下訓練の反対運動に対する懲罰的な意味があったか、米軍基地に雇用されていた女性の多くも大量解雇された」²⁾。この状況は、基地経済の脆弱性を露呈させ、地域経済の自立と女性の雇用創出という喫緊の課題を浮き彫りにした。

さらに、この出来事は、基地経済への依存度が高かった読谷村においても、経済構造の転換と伝統産業の再評価の必要性を認識させる契機となった。これらの歴史的背景と社会経済的文脈は、次節で詳述する問題化段階における中心的な問題設定の基盤となった。

III. 読谷山花織の復興過程

本研究では、読谷山花織の復興過程を分析するためにアクターネットワーク理論(ANT)の枠組みを採用した。ANTの中核的概念である「翻訳」プロセスは、異種混交のアクターが相互作用し、ネットワークを形成・変容させていく過程を説明する。本節では、カロンの翻訳理論の4つのモーメント(問題化、関心付け、登録、動員)に沿って、読谷山花織の復興プロセスを分析する³⁾。

1. 問題化段階

問題化(Problematization)段階は、1960年代半ばから1970年頃にかけて展開された。この段階では、主要なアクターが問題を定義し、他のアクターの関心を引きつける過程が観察される(Callon 1984: 196-203)。

(1) 問題の文脈

1964年の米軍基地での大量解雇は、キャラウェイ高等弁務官の強権的な統治下で、パラシュート降下訓練反対運動への報復とも言われるものであり、地域経済の自立と女性の雇用創出という複合的な課題を浮き彫りにした。この出来事は、基地依存型経済からの脱却と、地域に根ざした持続可能な産業の育成の必要性を明確にした。

池原昌徳(1916-2015: 読谷村長)は、この危機的状況を次のように認識し、伝統工芸の復興を通じた地域再生の可能性を模索していた。

「祖先伝来の花織、村の文化財だから、これを何とか復興したいという願いもありました」と述べ、さらに「子供を育てながら現金収入を得るということは、家庭経済を支えるという考え方でもありましたから」(池原 1997: 12)と説明し、文化的価値と経済的側面の両方を強調し

ている。

一方、与那嶺貞（1909-1999：人間国宝）は次のように述べている。「昭和39年当時、読谷山花織の名称さえ知らなかった。」（読谷村役場 1997：5）。この発言は、当時の技術の断絶の深刻さを如実に示している。

（2）主要アクターの識別と分析

問題化段階における主要アクターとして、池原昌徳村長、曾根美津子婦人会長、与那嶺貞が挙げられる。池原昌徳は、1962年から1971年まで読谷村の15代村長を務め、村の経済振興計画の一環として読谷山花織の復興を位置づけた（読谷村役場、1997：12-13）。曾根美津子は、1964年当時の読谷村婦人会長として、池原村長とともに花織復興の中心的役割を果たした。

与那嶺貞は、首里女子工芸学校で染織を学んだ経歴を持ち、1964年に55歳で復興事業に参画し、高機を使用した織り方を確立するなど、技術面で多大な貢献をした（読谷村役場、1997：5）。以下のような主要アクターが特定された⁴⁾。

1. 池原昌徳（1916-2015：村長）：村の経済振興計画の一環として読谷山花織の復興を提唱。
2. 曾根美津子（1926-1980：村婦人会長）：復興に向けた活動を組織的に推進。
3. 与那嶺貞（1909-1999：技術指導者）：高機を用いた効率的な織り方を考案。
4. 比嘉文江（1907-1992：技術指導者）：ティサージとミンサーの復元に貢献。

非人間アクターとしては、

1. 読谷村経済課：復興事業の実務を担当し、資金調達や技術支援を行う中心的組織
 2. 読谷村婦人会：復興活動の中心的組織
 3. 琉球政府：支援や規制を行う中央行政機関、労働局を通じて復興事業を支援。
- ほかに織機、糸、染料、資金、法律などが挙げられる。

これらは人間アクターの行動を制約し、また可能にする重要な要素として機能した。

（3）共通の関心事の提示

問題化の段階では、異なるアクターの利害を調整し、共通の関心事を提示することが重要である。池原村長は複数の側面を提示した。経済的側面と文化的側面を強調し、読谷山花織の復興が地域にもたらす多面的な価値を示した。この提示には、当時の社会状況や女性の立場も影響していた。「外で働かないで家で子どもを育てて欲しいという夫の気持ちもあったため家にいたが、もともと手仕事、細かい仕事が好きだった。」（話者2 恵美子）という証言は、花織が内職として適していた社会的側面を示している。

この共通の関心事の提示により、村の経済振興と伝統文化の保護という二つの目標が明確化され、様々なアクターの参加を促す基盤が形成された。特に、家庭内で行える仕事として花織を位置づけたことは、当時の社会規範に沿いつつ、女性の経済活動への参加を促進する効果があったと考えられる。

（4）義務通過点（OPP）の設定

義務通過点（Obligatory Passage Point, OPP）は、ネットワーク形成プロセスにおいて、全てのアクターが通過しなければならない必須の要素や状況を指す（Callon, 1984：205-206）。

読谷山花織の復興においては、以下の3つのOPPが設定されたと考えられる：

1. 失われた花織技術の復元：与那嶺でさえ「読谷山花織の名称さえ知らなかった」状況から、失われた技術の復元が最重要課題となった。池原村長と曾根婦人会長が中心となり、技術復元を復興の第一歩として位置づけた。
2. 高品質な製品の生産と販路の確保：花織を収入源として確立するためには、和装として高品質な製品を

表1 聞き取り調査の話者別の対象者リスト（敬称略）

氏名（敬称略）生年	話者	講習会	受講の前職	地域の役職	組合理事長	文化財・行政職	調査時期
池原美枝子（1934年生）	話者1 美枝子	1期生	生命保険会社	婦人会長（宇・村）		県中部地区婦人会長	2011年8月25日
比嘉恵美子（1934年生）	話者2 恵美子	2期生	米軍家庭の洋裁、飲食自営	宇婦人会長、与那嶺の後継者	5代目	県指定重要無形文化財	2012年8月24日 2012年9月11日
池原竹子（1937年生）	話者3 竹子	1期生	米軍家庭のメイド		3代目・9代目	伝統工芸士	2023年12月18日 2024年2月19日
池原ケイ子（1940年生）	話者4 ケイ子	2期生	主婦	婦人会長（宇・村）	2代目・4代目	県指定重要無形文化財	2023年12月18日 2024年2月19日

生産し、安定した販路を確保することが不可欠であった。村役場経済課が中心となり、品質向上と市場開拓を重点課題として位置づけた。

3. 組織的な生産体制の確立：持続的な生産と品質管理を実現するために設定された。村役場と織り手たちの協議により、組織化の必要性が認識され、1975年に「読谷山花織事業協同組合」が設立され、公的事業の受入れができる事業主体が整備された。

これらのOPPは、読谷山花織の復興を目指すアクターたちにとって、新たな段階へと進むための重要な通過点となった。

(5) 初期的な同盟関係の形成

池原村長と曾根美津子のリーダーシップのもと、村行政、村婦人会、技術指導者、村の女性たちなどが協力し合い、「読谷山花織の復興」という共通の目標を達成するために、初期的な同盟関係を築き上げた。この過程では、以下のような具体的な取り組みが行われた。

1. 村婦人会との連携：「曾根美津子さんに相談して婦人会の中の生活改善グループで織物を進めようという話がまとまりました」（読谷村役場 1997：2）
2. 高齢者との協力：かつて花織を経験した高齢者から技術や知識を引き出す試みが行われた。
3. 教育機関との連携：「首里高校に末吉安久先生を訪問して読谷山花織手巾の織方研究について勉強しようと思った」（池原 1997：38）

これらの多面的なアプローチにより、問題が関係者の「自分事」として認識され、復興プロジェクトの基盤が形成された。

このなかでも婦人会と生活改善グループは、読谷山花織の復興過程において重要な役割を果たした（仲松 2015：4）。特に、これらの組織との連携は、花織復興の義務通過点（OPP）を設定する上で極めて重要であった。この連携の重要性を理解するためには、まず楚辺という地域の特徴を把握する必要がある。

楚辺は読谷村の字の一つであり、米軍基地との関わりが深い地域である。1952年のサンフランシスコ講和条約発効時点で、読谷村の約88%が米軍用地となっており、楚辺にも「楚辺通信施設」が設置されていた。このような環境下で、地域コミュニティの結束と自立が特に重要となっていた。

このような背景のもと、婦人会の構造と機能は地域社会において重要な役割を果たしていた。楚辺の婦人会の慣習について、元婦人会長は次のように述べている：「楚

辺では、女性たちは学卒後23歳までは青年会に入っていた。そして24歳になると自動的に名簿が青年会から婦人会に送られて婦人会員となった。また24歳未満でも既婚者はむろん婦人会員である。」（話者1美枝子）この制度により、婦人会は地域の女性たちを広く組織化する基盤となっていた。

次に、生活改善グループの活動に注目する。これらのグループは婦人会の重要な取り組みの一つであり、米軍基地の存在による制約下でも、地域の自立と発展を目指す重要な役割を担っていた。楚辺では地区ごとにA～Dの4つのグループが作られ、「ほがらかグループ」や「若草グループ」といった独自の名称で活動を行っていた。特筆すべきは、これらのグループが行った2セント貯金活動である。メンバーたちは様々な物品の購入や視察旅行のために資金を捻出し、活動の幅を広げていった（話者1美枝子）。

こうした生活改善グループの活動は、婦人たちの経済的自立心を育むとともに、地域のコミュニティ形成や相互扶助の精神を強化する役割を果たした。これは、米軍基地の存在による制約下で、地域の自立と結束を維持するための重要な取り組みであった。これらの基盤があったからこそ、後の花織復興活動においても、組織的な取り組みが可能となったのである。

結果として、この連携により、村の女性たちを中心とした人的資源の活用が可能となり、既存の地域組織を通じた効率的な活動展開の基盤が整えられた。婦人会と生活改善グループの存在は、読谷山花織の復興過程において、組織的かつ持続的な取り組みを可能にする重要な要因となった。さらに、これらの活動は、米軍基地の存在という困難な状況下でも、地域の文化と経済を守り、発展させる原動力となったのである。

2. 関心付け段階

関心付け（Interessement）段階は、主要なアクターが他のアクターの関心を引き付け、ネットワークを構築していくための具体的な仕掛けや戦略を展開する（Callon, 1984：206-211）。

(1) アクターの利害関心の特定と関係性の構築

池原村長は、複数の側面を提示した。経済的側面と文化的側面に加え、社会的意義として、「家庭で仕事をすることは、また青少年の非行防止運動にもつながると思っていました」（読谷村役場 1997：12-13）と強調した。この多面的なアプローチは、異なるアクターの利害を調

整し、共通の関心事を提示する戦略として機能した。

関心付け段階では、問題解決に関わる主要なアクターの特定と、その利害関係の分析が重要となる。この過程で、以下の主要アクターとその特徴が明らかになった。

1. 織り手(講習受講者):技術継承や生活向上を目指す。
2. 読谷山花織愛好会:伝統文化継承を目指す。
3. 読谷村役場(行政):経済活性化や雇用創出、工芸の産業化を目指す。
4. 消費者:花織のストーリーに価値を見出す。
5. 研究者・技術指導者:伝統技術の保存と研究に興味がある。
6. 仲介者(小売店、問屋):販売利益の追求を目指す。

これらのアクターは、それぞれの立場や動機、利害関係に基づいて行動し、時に協調し、時に対立しながら花織の復興に関わっている。関心付けの段階では、これらのアクターの利害を分析し、問題解決への協力を得ることが重要となる。特に、技術の継承や経済的自立、地域振興といった共通の目標を設定し、アクター間の協力関係を構築することが、読谷山花織の復興成功の鍵となった。

(2) 利害関心装置と技術的な障壁の除去

関心付けにおいては、各アクターの利害関心を特定するだけでは不十分である。特定された利害に基づき、彼らを惹きつけ、積極的にネットワークに参加させるための具体的な働きかけが必要となる。読谷山花織の復興においては、以下のような具体的な「関心付け装置」が導入された。高機の導入、講習会、材料調達支援、資金援助、展示会などである。

特に重要なのは、与那嶺が中心となって高機を用いた新たな織り方を考案したことである。読谷山花織の復興の最も重要な技術的障壁は、複雑な花織の技術を効率的に再現することであった。

この問題に対し、与那嶺が中心となって高機を用いた新たな織り方を考案した。元受講生は「与那嶺先生は『地機よりは高機で織る時代』を見越し、高機を用いた花織の織り方を考案した」(話3竹子)と述べている。この技術革新の核心は、高機と花綜統を組み合わせた新たな製法にあった。花綜統は、複雑な花模様を織り出すための専用の綜統であり、特定の経糸を選択的に操作することを可能にする重要な技術要素である。

具体的には、以下の工程が考案された:

- 花綜統の準備:地機の仕組みで織られた花織を参考に、高機で織るための花綜統を作成

- 地糸への花綜統掛け:機械に仕掛けた地糸に花綜統を掛ける
- 経糸の操作:布巻き棒から織り付け部分はずし、経糸を手前に引っぱり、布巻き棒の下から向こう側へ返す
- 花綜統の固定:出来上がった花綜統の下に棒を入れ、固定させる

この技術革新により、織り手が直接花模様を見ながら織ることが可能になり、作業効率が大幅に向上した。特に、花綜統の導入は製作時間の短縮と品質の向上に大きく寄与した。これらの技術的革新は、より多くの織り手を引き付けるための障壁除去として機能した

同時に、これは地機にとってはロックインとなった。ロックインとは、アクターが特定の技術や方法に固執し、他の選択肢を考慮しなくなる状態を指す。読谷山花織の復興過程では、高機の導入がロックインの一例となった。高機の効率性と品質の向上が認識されるにつれ、従来の地機による製法は徐々に放棄され、高機の使用が標準となっていった。

(3) 経済的なインセンティブの提供

読谷山花織の復興は、当初、経済的なインセンティブよりも、女性の収入源の確保という社会的な目的が強く意識されていた。しかし、復興過程では材料調達など様々な障壁に直面した。これらの状況を改善するため、以下のような経済的インセンティブの提供と材料調達の支援が行われた:

1. 講習会の開催:村が花織講習会を主催し、技術習得の機会を無償で提供
2. 織機の提供:村が高機を購入し、織り手に貸与
3. 販路の開拓:本土の土産物に適した商品開発と販路開拓を推進
4. 材料調達の支援:村の経済課職員が仲介役となり、糸や小道具の購入を可能に

読谷山花織の復興過程において、素材調達は大きな課題であった。特に、綜統糸の入手は困難を極めた。この問題に対し、南風原の琉球餅復興の第一人者がアイデアを提供し、具体的な原材料の調達は村の経済課職員が中心となって創造的な解決策を模索した。

「花綜統をつくるのに那覇の釣具屋で糸を買いました」。この技法は、琉球餅の戦後復興を導いた大城廣四郎から学んだものだという証言(話者3竹子)は、花綜統に使う糸を魚網糸を糊付けして代用する革新的な方法が外部から採用されたことを示している。この釣具の

糸は強度と柔軟性を兼ね備えており、綜統糸の代用として理想的であった。

さらに、「今でも綜統糸は変わらないです。釣り糸です。漁協から買ってます。」(話者 ケイ子) という証言は、この代替方法が長期にわたって継続されていることを示している。

綜統糸以外の原材料や小道具の調達も容易ではなかった。「南風原に木綿糸を買いに行ったが売ってくれなかった。商売敵だと思われた。経済課の人が購入し、1球を3箇所に分けて使用しました」(話者 3竹子) という証言が示すように、初期段階では深刻な困難に直面していた。この状況を克服するため、村の経済課職員が積極的に介入し、材料の確保に尽力した。

「役場職員が出張行く時にね。これこれ鹿児島で買ってきてちょうだいて、餞別を渡した、お願いするって」(話者 3竹子) という証言は、経済課職員による支援の具体例を示している。これらの積極的な取り組みにより、技術的・経済的な参加障壁が低減され、多くのアクターの参加が促進された。

村の支援策は、単に経済的インセンティブを提供するだけでなく、復興に必要な基盤整備として機能し、読谷山花織の復興プロセスを大きく前進させる役割を果たした。経済課職員の創意工夫と献身的な支援は、伝統工芸の柔軟性と適応力を表す興味深い事例といえるだろう。この過程は、現場レベルでの問題解決能力と制度的サポートが相互に作用し合い、伝統工芸の持続可能な発展を可能にした好例として捉えることができる。

(4) ネットワークの変容と抵抗

関心付け段階を通じて、ネットワークの構造は変化し、新たな同盟関係が形成された。特に、技術指導者と織り手の間に強い結びつきが生まれ、知識と技術の伝承が促進された。一方で、伝統的な織り方にこだわる高齢の織り手たちは、高機の導入に当初難色を示した。これらの成果と課題は、次の「登録 (enrolment)」段階へと引き継がれ、さらなるネットワークの強化と拡大に向けた取り組みが行われることとなる。

3. 登録段階

登録 (Enrolment) 段階は、各アクターが提案された役割を受け入れ、ネットワークの一部となることが重要となる。

(1) 役割の定義と交渉プロセス

登録段階における最初のステップは、各アクターの具

体的な役割と責任を明確化することである。読谷山花織の復興運動では、焦点となるアクター (focal actor) である池原村長が、他のアクターに対して期待する役割を提案し、それをめぐって交渉が行われた。

役割の定義は、単なる割り当てではなく、アクター間の交渉と調整の結果として生まれる。例えば、与那嶺貞の技術指導者としての役割は、当初の消極的な姿勢から、積極的な関与へと変化していった。組合設立の役割の定義と交渉プロセスでは、時に複雑な様相を呈した。この点について、総会前に「理事長は与那嶺先生に決まっているから、あなたは副会長で」(話者 3竹子) と話しがあったとその様相を述べている。

(2) アクターの同意獲得と抵抗

役割が定義された後、次のステップは定義された役割をアクターに受け入れてもらうよう説得することである。同意獲得のプロセスは、必ずしも一方的なものではなく、アクター間の相互作用と交渉の結果である。例えば、婦人たちの同意獲得では、経済的インセンティブの提示だけでなく、伝統文化継承の意義を強調することで、より強い動機付けがなされた。

一方で、一部の高齢織り手からは、新しい技術導入への抵抗も見られた。これらの抵抗に対しては、段階的な技術導入や個別指導などの対応策が講じられた。「3期の人たちはまだは緋はやってない。最初の本綿の着尺でも、緋を入れていない。あくる年、緋も入れないといけないといって緋講習をやって、それから着尺に緋緋を入れるようになった。」(話者 3竹子) という証言は、本土の和装市場が視野に入る以前の状況とともに技術導入の段階的なプロセスを示している。

(3) 物質的配置と技術的要素の役割

登録段階において、物質的要素や技術的要素も重要な役割を果たした。特に、緋と帯の導入は単なる意匠の変更ではなく、花織自身や経済的価値を大きく変える要因となった。

外部の専門家として重要な役割を果たしたのが大城志津子 (1931~1989) であった。女子美術大学で洋画を学び、帰郷後は美術教師として活動した大城は、後に沖縄県立芸術大学教授となり、「本場首里の織物」保持者としても認められた染色家であった。

大城志津子は読谷山花織の復興過程において、特に緋と帯の技術指導に重要な役割を果たした。「帯は大城志津子先生から習いましたので。自分たちは帯の寸法もわかりませんし。名古屋帯の寸法とかも全然。」(話者 3竹

子) という証言は、大城の指導が読谷山花織の技術的発展に不可欠であったことを示している。

大城の指導により、織り手たちは従来の着物や手巾の製作に加え、帯という新たな製品分野に参入することが可能となった。これは読谷山花織の商品価値を向上させ、市場を拡大する上で重要な役割を果たしたと考えられる。

さらに、「大城志津子先生、招いてね。この講習会は県の指導だったかな。」(話者3竹子) という発言から、大城をはじめとする講師による技術講習指導が県の支援を受けて実施されたことが示唆される。

大城志津子の事例は、読谷山花織の復興過程において、地域内のアクターのみならず、外部の専門家も重要な役割を担ったことを例証している。この点は、読谷山花織の復興が単に地域内の取り組みにとどまらず、県レベルの支援を得て推進されたことを示している。これは、ネットワークが地域を超えて拡大し、より広範な支援と認知を獲得していく過程の一側面として捉えることができる。

(4) ネットワークの再構成と安定化

登録段階を通じて、読谷山花織を取り巻くネットワークは大きく再構成された。技術指導者、織り手、行政、消費者などの間に新たな関係性が生まれ、それぞれの役割が明確化されていった。このネットワークの安定化と拡大のために、様々な取り組みが行われた。

まず、組織の設立が重要な役割を果たした。1969年に読谷山花織愛好会が、1976年には読谷山花織事業協同組合が設立された。「池原昌徳さんが愛好会結成しようって言って一期生が終わってから愛好会を結成したの」(話者3竹子) という証言は、組織化が村長のイニシアチブで進められたことを示している。

次に、村主催の講習会が再構成と安定化の装置として機能した。「花織の講習会に参加したのは昭和45年(1970)、末子が幼稚園に入った頃。『きっかけは村の広報紙を見てのことだったように思う。』」(話2恵美子) この証言は、村が積極的に広報活動を行い、主婦層を中心に参加を促していたことを示している。

講習会の内容も、時代とともに進化した。初期の講習会では木綿を使用し、着尺、ミンサー、テーブルセンターの製作が中心であったが、その後、帯や絹糸を使用した着尺の製作、さらには緋の技術まで範囲が広がっていった。これは、読谷山花織のネットワークが技術的にも、製品の多様性においても拡大していったことを示している。



写真・講演会(2部)で制作した花織
池原ケイ子氏 提供

この技術的発展と製品の多様化の過程は、表2に示す原料糸・技法・図案等の変遷からも明確に見て取れる。

表2 原料糸・技法・図案等の変遷

	糸	染料	道具	技法	図柄
戦前期	綿糸	植物・一部化学染料	地機 割竹	浮花織・手花織・グーン花織・ティサージ	用途ごとに、花織・緋・縞
1964年~1970年	綿糸・毛糸	化学染料・藍(南風原に依頼)	高機糸車・割竹	緯浮花織・手花織・グーン花織	紺地、紋糸(白・黄・赤)
1971年~1975年	綿糸・絹糸	植物染料・藍染め	高機糸車・割竹	緯浮花織・手花織・グーン花織	紺地、紋糸(白・黄・赤)
1976年~1980年	絹糸	植物染料・藍染め(組合一括)	高機糸車・割竹	経緋・緯緋・経浮花織・緯浮花織・名古屋帯	茶・ベージュ、花織と緋・縞を併用
1981年~1985年	絹糸	植物染料・藍染め	高機糸繰機	経緋・緯緋・経浮花織・緯浮花織・名古屋帯+組織	花織とのバランスから緋を減少

表に示されるように、読谷山花織は時代とともに原料糸、技法、図案等を変化させ、市場のニーズに応じて進化してきた。特に、原料糸の変化(木綿から絹へ)や新たな技法の導入(緋技術の習得)は、製品の高級化と多様化をもたらし、読谷山花織の市場価値を高める上で重要な役割を果たした。

さらに、講習会は長期的な技術継承の基盤となった。「一緒に講習を受けた人のなかでトミさんという楚辺の人がいる。彼女はもう89歳くらいだが、今でも花織を織っている。自宅ではなくてずっと楚辺の工房で織っている。」(話者2恵美子) という発言は、講習会が幅広い年齢層を巻き込み、組合が長期的な技術継承の場となったことを示唆している。

最後に、外部機関との連携も重要であった。1977年には、県工芸指導所の協力で緯緋・経緋・帯地の技術講習会が開催され、国・県・村の三者から助成を受け、後継者養成事業にも着手した。これにより、国・県・村の三者ネットワーク形成が進み、読谷山花織の伝統的工芸品としての専門性と信頼性が向上した。

これらの多面的な取り組みを通じて、読谷山花織のネットワークは徐々に安定化し、同時に技術的・組織的

に拡大していった。特に、村主導の講習会から県や国を巻き込んだ事業へと発展していったことは、ネットワークの拡大と強化を示す重要な指標といえる。

4. 動員段階

組織の設立、村主催の講習会、外部機関との連携などを通じて、読谷山花織を取り巻くネットワークは大きく再構成された。

(1) 代表者の確立と正当性

読谷山花織の復興運動において、与那嶺貞は、その専門知識、技術力、そして献身的な活動を通じて、産地の代表者としての正当性を確立していった。1975年に沖縄県指定無形文化財保持者に認定されたことは、単なる個人の榮譽以上の意味を持ち、ネットワーク全体の正当性を高め、新たな発展段階への移行を促す触媒として機能した。

初期段階：当初の与那嶺は、村長や婦人会長といった既存の権威から協力を求められる立場であった。しかし、首里女子工芸学校で染織を学んだ経験や、高機を用いた効率的な織り方を考案するなど、その技術力と実績を示すことで、周囲からの信頼を徐々に獲得していったと考えられる。

正当性の確立：与那嶺貞は、単に技術指導を行うだけでなく、花織の図案化、糸や道具の調達、後継者育成など、多岐にわたる活動を通じて、読谷山花織の復興に献身的に取り組んだ。このような積極的な活動姿勢が、彼女の指導者としての正当性をさらに強化したと言える。

公的な認知：1975年に沖縄県指定無形文化財保持者に認定されたことは、与那嶺の技術と貢献が公的に認められたことを意味する。これにより、彼女の代表者としての立場がより強固なものとなった。

この県無形文化財指定は、読谷山花織のネットワークを「文化的に価値のある伝統工芸」として再定義し、そのアイデンティティを強化する重要な転換点となった。同時に、この認定は新たな義務通過点（OPP）としても機能し、ネットワークに関わるすべてのアクターが、文化財としての価値を維持・向上させるという共通の目標に向けて行動することを促した。

与那嶺は、後継者への技術指導を通じて他のアクターにも波及効果をもたらした。弟子のひとりの「与那嶺先生は自分のことを認めてくれて後継者になるよう強く進めた。私は与那嶺先生を母のように思っていた」という証言が示すように、新たなアクターの参入を促進した。

また、「先生がいつもいったのは『人に自分の製品を見せようこと』だった」という発言から、産地全体の発展を視野に入れた活動を行っていたことが分かる。さらに、「沖展、西部展などに出品するようになり、私は名刺など持っていなかったが先生が付き添って表彰式にいらしてくれた」（話者2 恵美子）という。

読谷山花織のネットワークが他の文化領域とも接続し、その影響力を拡大していったことがわかる。また、市場価値の向上も、この認定がもたらした重要な効果の一つである。無形文化財としての認定は、読谷山花織の商品価値を高め、より高価格での販売を可能にした。沖展や全国の工芸展への出展機会が増加し、読谷山花織は沖縄のみならず日本の伝統工芸として認知されるようになった。

(2) 利害関心の翻訳と共通目標の設定

動員段階では、「伝統文化の継承」と「地域経済の活性化」という二つの主要な目標が設定されたこれにより、文化保護に関心のある研究者や行政、経済的利益を求める織り手や問屋など、異なる立場のアクターの利害を調整することが可能となった。

池原村長は、この二重の目的を次のように表現している：「読谷だけにしかないんだよ。再興しておかなければ、滅びてしまうという危機感もあったのですよ」（文化的側面）、「私達の村は県外からお客さんが来た時に、お土産品として差し上げるものが何もないよ。この花織は伝統工芸品ですよ、これを作ってお土産品にしようじゃないか」（経済的側面）（読谷村役場 1997：13）。

このような多面的な目標設定により、文化保護、経済振興、女性の社会参加という異なる利害を持つ多様なアクターの参加と協力が促進された。

(3) ネットワークの拡大と強化

読谷山花織の復興運動は、初期の小規模なネットワークから、徐々に規模を拡大し、より多くのアクターを巻き込んでいった。この過程で、以下のような取り組みが行われた：

1. 組織の設立：1969年に読谷山花織愛好会、1976年に読谷山花織事業協同組合が設立された。
2. 行政との連携：読谷村役場が積極的に支援を行い、1982年には読谷村伝統工芸総合センターが設立された。
3. 県専門家の参画：1977年には、県工芸指導所の協力で技術講習会が開催され、国・県・村の三者から助成を受けた後継者養成事業が始まった。

4. 地域住民の巻き込み：村主催の花織講習会や展示会の開催を通じて、多くの地域住民が花織復興に関わるようになった。

1976年の伝統的工芸品指定獲得は、読谷山花織の復興と発展にとって重要な転換点となった。この指定は、ネットワークの拡大と安定化、さらには経済的基盤の強化に大きく寄与した。

指定獲得のプロセスは、読谷山花織のアクターネットワークの結束力と組織力を示す好例となった。池原村政を引き継いだ山内徳信村長を中心とする村役場、経済課職員、そして織り手たちが一丸となって申請準備に取り組んだ。特に、技術の標準化と品質管理体制の確立が指定獲得までの課題となった（設立40周年記念誌発行委員会 2016：23-25）。

（4）外部との交渉と資源の獲得

動員段階では、ネットワークの代表者が外部と交渉し、必要な資源を獲得することが重要である。読谷山花織の復興運動では、以下のような取り組みがなされた：

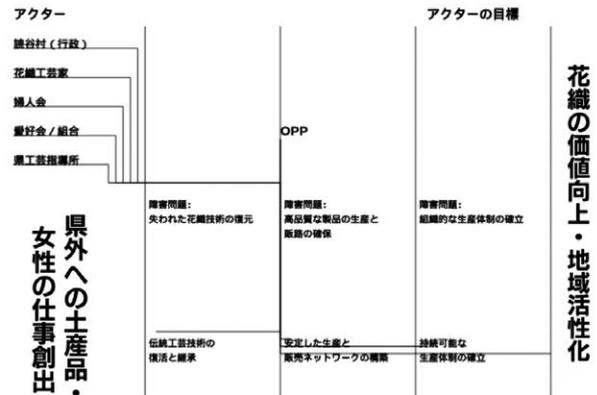
1. 伝統的工芸品指定の獲得：1976年に通商産業大臣により伝統的工芸品に指定された。
2. 販路の拡大：沖縄物産センターへの委託販売から始まり、1975年の沖縄海洋博覧会を契機に本土の間屋との取引が拡大した。
3. 補助金の獲得：1984年から1987年にかけて、順次地域工房を設置し、設備の近代化を進めた。

1975年に「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」が制定され、その翌年の1976年に読谷山花織は伝統的工芸品に指定された。指定獲得後、読谷山花織の市場拡大は着実に進展した。この過程について、ある元役員は次のように述べている：

「私が会長をしていたときに、展示会を持ったんですよ。その時に少し問屋さんが来て。そこから少しずつ売れるようになっていった。帯なんかは作ってない。その時は木綿だけだった。」（話4 ケイ子）

この証言は、展示会が単なる作品の発表の場にとどまらず、新たな市場開拓の機会として機能したことを示している。特に問屋との接点ができただことは、読谷山花織の商業的な展開にとって重要な転換点となった。

図は、読谷山花織の復興プロセスをアクターネットワーク理論の枠組みで可視化したものである。中心に位置するOPP（義務通過点）を介して、5つの主要アクター（読谷村行政、花織工芸家、婦人会、愛好会／組合、県工芸指導所）が相互に影響を与え合う様子が示されてい



図アクターとOPP（義務通過点）の構造

る。各アクターが直面する3つの障害問題と共通目標が、最終的な「花織の価値向上と地域活性化」へと動員されており、これがネットワーク全体の方向性を示している。

この図を通じて、花織復興が単なる伝統工芸の再生ではなく、地域社会全体を巻き込んだ複雑な社会的プロセスであることが理解できる。

1982年2月に読谷村伝統工芸総合センターが国・県・村の三者から助成を受け設立され、生産・展示・販売の中心的拠点として機能し始めた。さらに、1984年から1987年にかけて順次整備された地域工房は、生産体制の拡充と近代化に貢献した。（設立40周年記念誌発行委員会 2016：23-25）。この一連の取り組みにより、読谷山花織は商業的成功と文化的価値の保持を両立させ、持続可能な発展の道筋を確立したのである。

IV. 考察と持続可能性研究への展望

本研究では、Callon (1986) の翻訳理論に基づく4つのモーメント（問題化、関心付け、登録、動員）を分析枠組みとして採用し、読谷山花織の復興プロセスの解明を試みた。この分析を通じて、複雑な社会技術システムの再構築プロセスとしての読谷山花織の復興の特徴が明らかとなった。

問題化の段階では、池原昌徳村長と曾根美津子婦人会長が中心となり、伝統文化の再生と地域経済振興という二重の課題を設定した。彼らは、村役場、婦人会、技術指導者、織り手などの主要アクターを特定し、自らを「義務通過点」として位置づけた。

関心付けの段階では、講習会の開催、高機の導入、資金援助などの「関心付け装置」が用いられた。特に、与那嶺貞による高機を用いた新たな織り方の開発は、技術的障壁を取り除き、より多くの織り手の参加を促した。

登録の段階では、愛好会や事業協同組合の設立を通じ

て、アクターたちがそれぞれの役割を受け入れ、ネットワークに参加した。この過程で、伝統的な技法と市場ニーズへの適応のバランスをとる交渉が行われた。

動員の段階では、ネットワークが安定し、読谷山花織が伝統的工芸品として認定されるなど、一体となって行動する段階に至った。

読谷山花織の事例は、伝統工芸が現代社会の中で持続可能な形で発展していくためのモデルを提示している。読谷山花織の復興過程では、技術革新（高機の導入と新たな織り方の開発）、組織化（愛好会と事業協同組合の設立）、市場開拓（伝統的工芸品指定と販路拡大）の三要素が相互に作用し、バランスよく発展したことが重要であった。特に、これらの要素が時系列的に展開し、各段階で適切な対応がなされたことが、復興の成功につながったと考えられる。

しかし、Callonの枠組みだけでは、より広範な社会経済的变化や長期的な持続可能性の課題を十分に捉えきれない。そこで、Geels (2020) の多層的視座 (MLP) と「構造-アクター間モデル」を導入することで、より包括的な分析が可能となる。ここで「持続可能性移行」とは、社会技術システムが長期的かつ根本的に変化し、より持続可能な生産・消費様式へと移行していく過程を指す。

MLPは、ニッチ（革新的実践の場）、レジーム（既存の制度や慣行）、ランドスケープ（より広範な社会経済的コンテキスト）の相互作用を通じた社会技術システムの変化を説明する枠組みであり、読谷山花織の復興をより広範な社会変革の文脈の中で理解することを可能にする。一方、「構造-アクター間モデル」は、アクターの行動と社会構造の相互作用をより詳細に分析することを可能にし、復興過程における個々のアクターの役割とその影響をより明確に理解することができる（Geels 2020 : 11-12）。

これらの理論的枠組みを導入することで、読谷山花織の復興プロセスを持続可能性移行の観点から再解釈することが可能となる。例えば、高機の導入をニッチイノベーションとして捉え、それが既存の織物産業のレジームをどのように変容させたか、また沖縄の文化的アイデンティティの再評価というランドスケープの変化にどのようなつながったかを分析できる。さらに、村長や婦人会長といった中心的アクターが、いかにして社会構造を変革し、新たな制度を確立したかを詳細に検討することができる。

このような理論的拡張は、地域振興や伝統工芸の持続

可能性に関する研究に新たな視点をもたらす。具体的には、地域に根ざした伝統技術がいかにして現代的なニーズと調和し、経済的・文化的に持続可能な形で発展できるかという問いに対して、より体系的なアプローチを提供する。また、地域のアクターたちの主体的な取り組みが、より大きな社会変革につながる可能性を示唆し、ボトムアップ型の持続可能性移行の道筋を探る上で重要な示唆を与える。

今後の研究課題として、これらの理論的枠組みを実際に適用し、読谷山花織の事例をより多角的に分析することが挙げられる。特に、Köhler et al. (2019 : 22) が指摘するように、持続可能性移行研究では、ニッチイノベーションがレジームを変容させる過程や、多様なアクターの役割の重要性が注目されている。読谷山花織の事例は、これらの側面を具体的に示しており、さらなる分析を通じて、地域主導の持続可能な発展におけるリーダーシップ、イノベーション、制度化の重要性をより包括的に理解し、持続可能性移行研究のさらなる発展に貢献することが期待される。

注

- 1) 本稿は、科学研究費助成事業 (JP20K01224) の助成を受けた。
- 2) 主な調査方法として聞き取り調査と参与観察を採用し、村主催の講習会受講者で組合役員や婦人会役員経験者4名に半構造化インタビューを実施した。
- 3) データ分析にはNVivo14を使用し、インタビューデータと参与観察ノートをコーディングした。ANTの翻訳プロセス4段階（問題化、関心付け、登録、動員）に対応するテーマを抽出し、これまでの調査結果と最新データを統合して総合的分析を行った。
- 4) 本研究では、本文および聞き取り調査の話者の敬称を省略し、特に聞き取り調査では表1に示す話者番号で（話者1美枝子）のように引用を行った。

参考文献

- Callon, Michel, 1984, "Some Elements of a Sociology of Translation : Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Brieuc Bay," *The Sociological Review*, 32 (S1) : 196-233.
- Geels, Frank W., 2020, "Micro-Foundations of the Multi-Level Perspective on Socio-Technical Transitions: Developing a Multi-Dimensional Model of Agency through Crossovers between Social Constructivism, Evolutionary Economics and Neo-Institutional Theory," *Technological Forecasting and Social Change*, 152 : 119894.
- Köhler, Jonathan, Frank W. Geels, Florian Kern, Jochen Markard, Elsie Onsongo, Anna Wiczorek et al., 2019, "An Agenda for Sustainability Transitions Research: State of the Art and Future Directions," *Environmental Innovation and Societal Transitions*, 31 : 1-32.

- 池原昌徳、1997、「花織復興日記」読谷村役場編『輝く読谷山花織——その復興に情熱を傾けた二人』読谷村役場、37-45.
- 橋本敏雄編、2009、『沖縄 読谷村自治への挑戦』彩流社
- 仲松庸次、2015、『読谷山花織復興のプロデューサー 曾根美津子』自費出版.
- 宮城修、2022、『ドキュメント〈アメリカ世〉の沖縄』岩波書店.
- 読谷山花織事業協同組合設立40周年記念誌発行委員会編、2016、『緯経（ゆくたてい）——設立40周年記念誌』読谷山花織事業協同組合.
- 読谷村役場編、1997、『輝く読谷山花織——その復興に情熱を傾けた二人』読谷村役場.

戦後原宿の「若者の街」イメージの形成

—原宿の記憶と表象に基づいて—

Building an Image of Harajuku as “A Town for Young People” after the World War II :

Based on Memories and Symbols

田中 里尚

TANAKA Norinao

要旨

「原宿」という地域を評価し歴史を辿ろうとする視線には個人的な思い出が深く関わっている。駐留米軍のイメージ、東京オリンピック後の《エキゾチズム》のイメージなどが個々にあるため、その形成の経緯が臙化されてきた。本ノートでは「原宿」地域への記憶と雑誌による表象に基づいて成層化したイメージを明らかにしようとする。戦後、駐留米軍の存在は征服者と被征服者との緊張関係をもたらしていた。独立後、緊張は緩和し風紀問題の解決と自治への自信の高まりの中でアメリカを見る目線は憧れへと傾斜した。基地返還とオリンピック開催による都市開発によって原宿地域は《エキゾチズム》を抱え込み、そのムードと閑静さを求めてクリエイターたちが集まり、業界が求める服飾店も次第に増えていった。1970年前後に原宿地域はセントラルアパートをランドマークとしてメディア性を持ち、雑誌はそのムードを「シャンゼリゼ」などのファッションタウンを想起させるキーワードを用いて表象する機運が高まった。すなわち、アメリカ、《エキゾチズム》、クリエイターの仕事場という3つのイメージの成層によって原宿のイメージは構成され、そこに若者の存在はまだなかった。

●キーワード：原宿 (Harajuku) / 東京オリンピック (Tokyo Olympics) /
イメージの成層 (image stratification)

I. 原宿＝若者の街というイメージ

原宿は現在でもなお日本の若者の街としてみなされることが多い。新聞でも「コロナ禍が落ち着き、これまで自粛されてきた対面でのコミュニケーションを楽しめる場が都内でも人気を集めている。若者の聖地・原宿では、店員が友達に話しかけるように「ため口」で接客にあたる飲食店が話題に」なっていると書かれるように、ある常套句として定着していることがわかる¹⁾。

しかし、1980年代のファッション雑誌の記事をみると、原宿にくる消費者の若年化を嘆く声も見られる。「クルーズ自身、シニアアダルトからヤングアダルトと移行してきて、今やティーンエイジャーの対象にもなっている。昔から来ていて、よさを楽しめる人が来づらくなってきているのは残念です」と、アメカジの代表的名店・クルーズの店長である萬小路氏は述べ、「ティーンエイジャー」を歓迎するどころか、街のセンスに合わない存在として忌避する感情を吐露している²⁾。

この2つの発言のズレは、原宿という地域が若者たち

と取り結んできたアンビバレントな関係性を示唆している。そもそも原宿にはいつから若者が集まり始め、「若者の街」を自負するようになったのか。

この問いを解くには、史料が必要である。それら史料については多くの証言が存在している。けれど、証言者における原宿をめぐる記憶には思い入れや時代性といったバイアスがあり、そのバイアスに基づいて語られる原宿像が、原宿という街のイメージを豊かにしている一方で、そうやっていったことの歴史的な経緯を臙化している。

本ノートでは、原宿地域への証言に関わるバイアスを検討しつつ、原宿が若者の街と自負するまでの曲がりくねった原宿イメージ形成の歴史を明らかにしようとする。本稿ではそのうち1970年前後までの原宿のイメージ形成について、検討を行うこととする。

II. アメリカン・イメージと原宿

日露戦争前後には、原宿地域は軍人街として見なされ

ていたようだ³⁾。地域の北辺に隣接する青山練兵場に関連する人々が居住する空間とみなされていたわけである。練兵場が青山から代々木に移転することで、その印象はより明確化し、軍人街・原宿のイメージは拡張された。

明治天皇が崩御すると、代々木練兵場には明治神宮が建設されることとなった。大きな参道が形づくられ、観光名所ともなった⁴⁾。ただ、裏通りを一本入ると政治家などの大きな邸宅が立ち並ぶ「お屋敷町」であった。家城定子は「私が子どもの頃、原宿はお屋敷町と言われ、あちらこちらに広大なお屋敷がありました。その中でも一番大きかったのは、私の家の斜め前にあった池田侯爵さんのお屋敷でした。今、明治通りにある東郷神社やパレフランス、その北側にある外苑中学校、生長の家はこの池田さんのお屋敷でした」と述べている⁵⁾。そうした軍人街、お屋敷町のイメージは、戦後までつづいた。ここまで「若者の街」というイメージは原宿にはなかった。では、いつごろから、そのイメージの母体となるものが生まれたのか。

原宿表参道榊会の当時の理事長だった山本正旺氏は「戦後の日本人にとって、あこがれのアメリカ文化に随所で触れることができた。そんな街に、デザイナーやイラストレーターが集まってきて、若者のオリジナル文化を生み出した」と述べている⁶⁾。

この山本氏の印象は、しばしば、戦後のある時期から原宿に若者が集まってきた要因を説明する言葉として利用される。もちろん、こうした記憶には真実性があるだろう。その上で、いつからいつまで、原宿はアメリカ文化と、どの程度触れることができる場所だったのかの検討を欠かすことは出来ない。

終戦後、代々木公園には進駐米軍のための宿舎（以後ワシントンハイツ）が出来た。自伝的小説である『ワシントンハイツの旋風』の中で山本一力が描写しているように、それは一つの街であった⁷⁾。

『朝日新聞』には「家屋八百二十七棟、六百人収容の学校、礼拝堂、劇場、医療院クラブ、プール、ガソリン・スタンド、消防署、雇人宿舎を完備、三千五百名を擁する純米国式進駐軍家族村になる予定である」と書かれている⁸⁾。鉄条網の内側に、小さな米国があったとさえいえる。ただ、それら街区は厳密に管理されていた。

その空間から文化が流出するとはどういうことだろうか。そして「アメリカ文化に随所」で「触れることができた」というのは、どういう経験を指すのだろうか。

流出の1点目は人である。進駐軍の関係者が外出することはもちろんあった。「だってワシントンハイツから一歩出れば、原宿駅だったでしょ。そこから電車に乗って、あちこち出かけたわ。遠出しないときは、東京でショッピング。楽しかった。お気に入り、伊勢丹、三越、高島屋。それに、原宿の街でも色々買い物をしたわ。目の前ですもの、歩いて行けたから。オリエンタルバザールで指輪を買ったり、トイショップで花火を買ったり」⁹⁾。ネルソン氏の2番目の妻であるドンナ氏は、このように述べている。ただ、二人が結婚したのは、日本の独立後にネルソン氏が再来日した1952年以降のことであった。

占領期においてアメリカ人が見られたのは、原宿近辺だけではなくなかった。「リトルアメリカ」と呼ばれた「第一生命ビルから銀座にかけての一带」や、六本木近辺など、むしろ象徴的な強度は原宿近辺よりも高いものと言える。それら接触できるアメリカは原宿以外にも、無数にあったのである¹⁰⁾。

占領期（1945～1952）においては、占領者と被占領者という区分は、厳密に守られていた。大泉博子は『ワシントンハイツ横丁物語』の中の一短編で、フィクションの形式だがある居住民の幼少期の体験を生々しく書いている。

その体験とは、以下のようなものであった。子どもであった主人公の健一と友人は横断歩道を渡っていた。向こうから来た車がうしろにいた友人を轢いた。その車から出て来た運転手は外国人で、助手席には女が乗っていた。その後、警察に呼ばれた健一は、犯人と対面した。その犯人とは助手席に乗っていた女だった。健一は、「違う」と言おうとしたが、女からの圧力を感じ、本当のことを言えなかった。大人になっても健一は、その光景を思い出して酒浸りになり、最後まで本当のことを言えぬまま亡くなった¹¹⁾。

また、原田等の回想記である『タイムスリップ原宿』では、横倒しになったジープと装甲車のまわりに、運転手らの死体と走り回るMP、そして野次馬を追い払おうとする日本人巡査、という情景が描写されている。

帰ると健は母ちゃんに今見て来たことを得意になっていった。
「いまね、表参道の交差点で、外国の兵隊さんが交通事故で、三人ひっくり返っていたよ」
「本当かい、見てきたのかい」
「うん、死んじゃってるかもしれない」
「あーそう」と言ったきり母ちゃんは何も言わなくなってし

まった。

健は何か言ってくれたらと思ったが、何も言われなかったので部屋の中にはいつてしまった。

当時の明治通りの人たちは毎晩、騒音に悩まされていた¹²⁾。

近隣住民であった経験のある、大泉や原田が記すのは、占領者の威圧からくる圧迫感と、米国人と日本人の格差の感覚がもたらす微妙な感情である。近隣住民は、戦後、進駐軍に対する葛藤を抱えつつ生活していたのだといえる。特に「交通上の」問題は近隣住民にとって、安全を脅かしかねないものとして強く意識されていた。

街の「風紀」もまた問題視された。「朝鮮戦争を境に、近辺には米兵相手にいかがわしい商売を行うホテルが建つようになった」という¹³⁾。占領直後は、敗戦国民による反乱も想定されていたはずである。そのため、進駐軍も緊張感につつまれていた。例えば、鉄条網を超えて入った区民を、射殺した事例もあったほどである¹⁴⁾。

朝鮮戦争を境にして、ふたたび進駐軍人の数は増加したようだ。そうした軍人たちの性的活動の問題は依然として残っていたがゆえに「いかがわしい商売」は目立つようになった。1951年にサンフランシスコ講和条約が締結されることで、進駐軍は撤退するものと予想されていた。けれども、ワシントンハイツはそのまま居住地域として残された。それゆえ、占領軍から駐留軍になった米兵たちは、占領期とは異なる活動の幅を広げていったのだろう。

この記憶は、1965年の新聞記事にも取り上げられている。「戦後、日本青年館に進駐して来た駐留軍相手の売春宿が千駄ヶ谷に生まれて以来、さる三十年ごろまで千駄ヶ谷、鳩森地区に雨後のタケノコのようにアベック旅館が林立した。住民は、このとき「文教地区を守る会」を結成、アベック旅館反対ののろしをあげ、三十二年四月には、都からこの地域一帯に「文教指定地区」のおスミ付きを獲得し、「旅館の新、増築ができないように旅館業法も改正させた」のである¹⁵⁾。

1953年に「原宿では「環境浄化期成同盟」が母親たちを中心に結成されていた。現在の竹下通りのあたりにも、そうした旅館が何軒か営業していた」という¹⁶⁾。そして、翌年「住居専用地区」指定を受けることになっていく。

だからこそ、ワシントンハイツに新たに独身宿舎が建設されるということについては、周辺住民からの声が上がったのだろう。独身宿舎建設問題に端を発した市民運動によって1956年に「渋谷地区日米連絡協議会」が生み出され、心配された風紀問題を解決へと導くよう、方向

付けられた¹⁷⁾。そして、1957年には原宿地域も文教地区指定を受け、それが後の都市開発に影響を与えていくことになった。米兵との交渉は、近隣住民にとって死活問題だった。アメリカ文化を体現する人間の基地の外への流出は、地域住民にとっては緊張感を強いられる体験でもあったのである¹⁸⁾。

流出の2点目は、文化的記号である。秋尾の調査においても、アメリカ文化の流出と接触はオリエンタルバザーやキデイランドとの結びつきにあるという。

確かに、オリエンタルバザーは、進駐軍を顧客として登場した店だ。HPの「ご挨拶」には「現在の表参道に移転したのは、第二次世界大戦の傷跡を色濃く残す1951年でした。当時、近隣に建ち並んでいた米軍の宿舎・ワシントンハイツの方々に向けた土産物店として再スタートを切り、ここから「オリエンタルバザー」としての歴史が始まったのです」と書かれている¹⁹⁾。

ただ、進駐軍向けの店舗であるからこそ、外観は「日本らしさをひと目で感じていただけるよう、外観は神社を思わせるような仕立てに」していたという。HPに掲載されている外観写真をみると、アメリカ風とは言い切れない。これを、アメリカ文化の流出として日本人はどのように見たのだろうか。

「表参道の最初の店はオリエンタルバザールにしても、キデイランドにしても米軍の人を相手にしたお店でね。英語の看板を掲げ、垢抜けた感じだった」と原宿樺会の会長山本正旺は述べる²⁰⁾。先ほど述べたように外観は進駐軍にとって重要な東洋風のエキゾチズムが表現されていたので、アメリカ文化的外観を体現していたわけではなかった。ただ、おそらく看板には英語が使われていただろうから、若い頃にアメリカ文化に世代にとっては、アメリカ文化の記号流出として眺めたことも否定できない。

キデイランドのイメージ受容の実態については史料が足りない。その中で、作家の三木卓に『わがキデイランド』という詩集があり、「わがキデイランド」と題された自由詩が掲載されている。ここで、三木は戦争の恐ろしい記憶と戦後社会の資本主義的幻影を対比的に描き出している。キデイランドはその幻影の代表的ガジェットとして、詩の中では描き出されている。その解釈が適切ならば、進駐軍向け玩具店であると同時に、資本主義的な力の象徴として、多くの人々には畏怖と憧れを含んだ形で受け取られていたのかもしれない。

原宿地域においてこれら店舗は、憧れを先験的に抱い

た人々に、アメリカ文化の記号の流出として受け取られる可能性を含んだものであった。しかし、ワシントンハイツの付近に海外風の建物が並び、街区全体がアメリカ化していったわけではなかった。憧れのまなざしが、文化の流出を見逃すまいとして一部の記号を発見するくらいアメリカ文化経験が、戦後原宿のアメリカ化の実態ではなかったか。むしろ、文化が截然と分離されていたからこそ、かすかな記号を読み取らざるを得ないくらいの強い憧れが喚起され、想像力が飛翔する余地が生じたのではないか。

「ハイツでは、一般には売られていなかった缶コーラも簡単に手に入った。高知なまりが消えず、中学のクラスで浮いた存在だった山本さんが、何気なく缶コーラを持って行ったところ、「おまえ、それ何だ」と、教室で一躍注目の的になった。アメリカ製のお菓子を配ると、普段は見向きもしなかった女子が、猫なで声で近づいてきた」と自身の金網の内側での経験を新聞に語っている²¹⁾。もし、実態として「金網」の外に、多くのアメリカ文化が流出していたのなら、ここまで金網の内に関心が向くことがあるだろうか。山本一力の物語の舞台は返還間際の1962年のことである。返還がすでに予期されていた当時でも、基地は日本国とは金網で隔てられているという感覚は強かったのではないか。

先述した山本正旺も「昭和30年(1955年)代の初めですかね、ワシントンハイツという米軍将校の集合住宅があったじゃないですか。金網越しに見るアメリカのライフスタイルがカッコ良くて、僕はまだ中学生ぐらいだったんですが、本当に憧れましたね」と述べているように²²⁾、隔てられていたからこそ憧れは強まり、文化の流出への感度が高まったと言えないか。

ただ、それでもアメリカ的文化が一部流出していた事実がないわけではない。「今の渋谷区役所の近くにハイツの正門があり、その前の喫茶店「ナカタニ」には、アメリカ人たちが顔を見せた。なんとか「アメリカ」に近づきたくて」、山本正旺も「店に通い詰めた」という。「1ドル360円の時代。お小遣いを必死にためて、彼らと同じハンバーガーを食べた」と別メディアで述べている²³⁾。

この記憶は繰り返し語られている。「ナカタニっていう喫茶店がワシントンハイツのゲートのそばにあって、ホットドッグやハンバーガー、ナポリアイスなんていうものまであったんだ。高かったけど、こづかいを貯めちゃ通った。外国のにおいがすごくしたんですよ」と、2004年のインタビューでも具体的に思い出されている²⁴⁾。

山本正旺が表参道に隅田商事の本社ビルを作るのが、1973年で、彼が28歳のときであったとするなら、上記のアメリカ文化的記号への接触経験は1956～1957年くらいのことと推定できる。被占領者としての葛藤よりも、憧れを強く持つことができたのは「風紀」問題を対等に話し合うことができるようになった社会背景の賜物ではないだろうか。

1952年に日本は独立を果たし、1956年に「もはや戦後ではない」と経済白書は宣言した。独立と経済的な復興が、住民自治への強い志向をもたらした。そのため、居住米軍も周辺住民感情に配慮せざるを得なくなっていったのだろう。そうしたものの象徴が、「風紀」問題解決のための「日米連絡協議会」の設立だと言える。この前後に、アメリカ文化に対するアンビバレントな感情は、若者の中で憧れへと傾斜していったのではないか。

もちろん、占領期のころからアメリカ文化への関心を持ち続け、それら流出する記号を想像的に受容する人々はいたであろう。ただ、ワシントンハイツ周辺におけるアメリカ文化の流出の実態は、ごく限定的であり、流出する記号に憧れるという姿勢を緊張感なしにとることは、独立と経済的な復興の機運が必要だった。日米関係の変化と山本正旺の原宿への記憶は、時期的に符合している。アメリカ文化への憧れは、占領下という緊張状態を脱したのち、様々な要因とともに増幅されていったのだといえよう。

Ⅲ. オリンピック開催と原宿地域イメージの変容

1956年以降の日米関係の緊張緩和の中で、原宿地域には新たな建物が建造されることになった。のちに原宿地域のランドマークとみなされるセントラルアパートである。

1958年に竣工したセントラルアパートは、以後の原宿地域のイメージ形成に影響を及ぼした。建設後しばらくは、占領軍関係の仕事で日本にきた外国人たちの居住地としてあったとされる。それでは、ワシントンハイツに出入りする外国人の居住環境が形成されたことは、原宿地域のイメージ形成に影響を及ぼしたであろうが、それはどのようなものであったのだろうか。

8階建ての巨大な集合的建築は、住宅街であった原宿地域にできた独特な建物だった。ただ、初期の段階では、居住するための価格は高価で、日本人がおいそれと住めるような場所ではなかった。麴谷宏が述べているように、「日本人居住者の第一号は女優の京マチ子」かもしれず、

以後「石坂浩二、大橋巨泉、高橋圭三、三保敬太郎、いずみたく、それに伊東絹子や中村絃子といった名前はよく噂に聞いた」と、高額所得者たる芸能人や業界人が住んでいると噂されるような空間だった²⁵⁾。そうした記述から伺えることは、この建物にはワシントンハイツで働く人々が居住していながらも、必ずしもアメリカ文化を代表するものではなかったという点である。

原宿地域に充溢するとされる《エキゾチズム》がアメリカ的なものだけで構成されていないことを指摘したのは、君塚太が編集した『原宿セントラルアパートを歩く』である。直接にそうした言及があるわけではないが、当時の原宿地域にあったムードについて、少し長めの引用で提示しておきたい。

ワシントンハイツは63年末に返還されるが、それは翌年に東京オリンピックの開催を控えていたからである。同所は、渋谷区が誘致運動を展開（60年、オリンピック村招致区民連盟結成）した結果、選手村（参加選手の宿泊施設）として開放されるようになった。さらに東京オリンピックが開催された64年、そして65年へと至る期間には、NHK放送センター、岸記念体育館、渋谷公会堂等が次々に誕生し、渋谷～原宿エリアは大きく発展する。NHKの映像アーカイブを年代ごとに編集したDVDシリーズ『東京風景』（2003年／NHKソフトウェア）を見ると、オリンピックの開催で風景が様変わりしたのは、決してこの周辺だけではなくたことがわかるが、原宿の街が本来持っていた「外国人向け」のムードが、この時期さらに高まったことは確かであろう。50年代末に「米軍向け」の店舗が点在していた街が、その対象を「世界からやって来るお客様」に広げた時期と言える²⁶⁾。

原宿の街が本来持っていた「外国人向け」のムード、これが本ノートでいう《エキゾチズム》である。この《エキゾチズム》は米軍関係者が歩いている、ないしは米軍関係者向けの建物がある可能性が他の地域よりも高い、という人々の予期によって成立したイメージである。

もちろん、このイメージは原宿地域のみならず基地のあった全ての場所に当てはまるものであるが、原宿地域の場合は、オリンピック開催による都市改造によって、より強調され《エキゾチズム》へと昇華されたのではないだろうか。

君塚は、1962年にセントラルアパートに「足を踏み入れた」写真家の繰上和美に対するインタビューで次のように記している。

1958年に完成したセントラルアパートが、「クリエイターが集まるマンション」といったイメージで語られるようになった

のは、いつ頃からだろうか。少なくとも、「クリエイター」はもちろん、「マンション」という言葉すら一般的でなかった60年代の初頭ではないだろう。東京オリンピックが開催される数年前、原宿の街の発展がまだ想像もできなかった時代である。62年、杉木直也氏が主宰するセントラルスタジオが設立されると同時に、セントラルアパートに足を踏み入れた繰上和美さんの耳にも、そんな風評は届いていなかったはずだ²⁷⁾

写真家・杉木直也が主宰した写真スタジオであるセントラルスタジオには「西尾忠久さん、福田繁雄さん、小池一子さん、ライトパブリシティの伏見文男さんなどが、アルバイトで夜な夜な集まってくる」と繰上は語り、「不思議なスタイルの事務所でした」という印象を言葉にしている²⁸⁾。

山本一力も、先に述べた小説の中で、オリンピックを契機にして周辺の街が変わり始めたことを描写している。

今日は東京オリンピックの開会式である。オリンピック開催に合わせて、ワシントンハイツが日本に返還された。そして一戸建て住宅に手を加えて、オリンピック選手村ができていた。代々木八幡駅前の商店街に英語のポスターが目立つのは、選手村がすぐ近くだからだ。富ヶ谷界隈は、にわかにも国際色が豊かになっていった²⁹⁾

ワシントンハイツ周辺の地域における《エキゾチズム》が本格化するのには、オリンピック選手村に参加する外国人選手対象の店舗の増加によるものではないか。

実際、山本の小説の主人公の謙吾は、「アメリカン・ベーカリー」という富ヶ谷のパン屋で購入した「一個十円の揚げあんぱん五個」をPXで購入してもらった煙草のキャメルのお礼として、知り合いのゲリーに渡している。ゲリーは「甘くておいしい。初めてたべたよ」と感想を漏らしている。

「アメリカン・ベーカリー」という名前ならば、それはアメリカ軍人へと向けられた店舗のように感じられる。けれども、ゲリーはそこに行ったこともなく、そこで買ったこともないという状況が書かれている。

したがって、富ヶ谷の「アメリカン・ベーカリー」は占領軍向けのものでなく、日本人向けのものであった。「アメリカン」という記号が、日本人向けの店舗にキーワードとして流用されていることがわかる。いつこの「富ヶ谷のパン屋」ができたのか小説内に言及はない。もちろん、フィクションである可能性も高い。フィクションであるならなおさら、山本の中に日本人向けのエキゾチズムを利用した店舗の出現のイメージが、この時代の

雰囲気と結び付けられているという事実がある、ということにほかならない。

この小説のあとがきを書いた俳優の江守徹も「ぼくが代々木八幡に住んだのは一力さんよりずっと後である。だが、子供の頃から名前は知っていたワシントンハイツの側を実際に通ったのは、文学座研究所時代の一九六二年のことだ。(中略)ぼくは当時、ワシントンハイツの渋谷駅寄りにあった、桑沢デザイン研究所にモデルとして一日か二日行ったことがある。小高い丘に、白い鉄条網の付けられた柵に囲まれてグリーン芝生が広がり、遠くにアメリカ映画でしか見たことがないような家が立ち並んでいた。まさに「ワシントンハイツの旋風」の謙吾が妹の雅美に見させられた通りの印象をぼくも持ったのだ」と述べている³⁰⁾。

先述した麴谷宏も「原宿文化を語るには、東京オリンピックの開催が大きなポイントとなる。オリンピックによって静かでしゃれた小さな街、原宿の存在が一躍日本中で認知された」と、原宿の変容がオリンピック開催と関連していることを述べている³¹⁾。『装苑』(1965-2)において、デザイナーの水野正夫も「東京オリンピックが終わって、早くも数か月たつというのに、オリンピック諸施設への参観客がまだにたえないという。会場にある感激の余韻がまだ残っていて、それが人々をひきつけるのかもしれないが、もう一つははっきりしていることは、美しい建造物の魅力だ。原宿の主競技場、武道館、駒沢のオリンピック講演にしても、そこに共通しているバランスというものをぬきにしたらいったいどういうことになるのか、と」書いた³²⁾。

オリンピック開催によって、かつてワシントンハイツのあった周辺地域は、占領軍との接触面としてのアメリカ的イメージから国際的なオリンピックというイメージが上書きされ、コスモポリタンな《エキゾチズム》へと変質した。《エキゾチズム》は、新奇な建造物と結び付けられ、街区のイメージとして新たに装われていく。セントラルアパートも、それらのイメージを構成する主要なピースだったと言える。

オリンピック後の原宿周辺の開発は進んだ。オリンピック東京大会開催にちなんだ集合住宅であるコープオリンピアは1965年に竣工した。地下にはコインランドリーが設けられ、スーパーマーケットも完備されていた。これら施設の現代的イメージは、アメリカ文化に限定されていただけでなく、《エキゾチズム》を装いデザイン性の高い集合住宅というイメージで原宿の街に出現し

た。原宿地域は、コープオリンピアとセントラルアパートという点が結びついて、オリンピック由来の《エキゾチズム》がより強化されたのだと言える。

基地の移転、東京オリンピックの時期が過ぎて、ハイツに出入りしていたかつての居住者たちがセントラルアパートから去ってのち、新たな居住者が現れた。

65年には宇野亜喜良が入って来た。トレンドイイラストレーターとして宇野自身も独特のファッションセンスを持ち、その周りにはコシノ・ジュンコ、内藤ルネ、菊地武夫、金子国義、四谷シモン、安井かずみ、加賀まりこ、伊藤五郎、宮崎定夫などファッションナブルなクリエイターたちが独自の装いで集まったので、その雰囲気がまた原宿トレンドの一面となって注目を集めた³³⁾

広告関係のクリエイター、グラフィック関係のデザイナー、ファッション関係のデザイナーたちが、セントラルアパートにあるスタジオに集まり、仕事をするようになっていく。ただ、これはあくまで仕事場だ。なぜ仕事場として原宿を選んだのかというと、「静か」だったからである。

先の繰上和美は次のように回顧している。

もう、あつという間に賑やかになっていきましたね。セントラルアパートに入った頃は、もう本当に静かで、人通りもほとんどなかったのに。並木はきれいだし、道は広くて、『レオン』を始めとするお洒落な場所があつて。本当に気持ちのいい場所だった。朝、乗ってきた車を表参道にとめて、夜中に暗室から出てくるまでそのままにしておいても、何の心配もなかったですからね。それが観光地化して、子供が行列するような街になってしまって、そろそろうさくなってきたなあ³⁴⁾

先の山本正旺も「1971年に、表参道の通行量調査をやったことがあるんです。そしたら1日わずか1200人。原宿もその当時はまだそんな程度の数の人しか歩いていなかったんですよ」と述べている³⁵⁾。対談相手のコシノヒロコも「当時の表参道は街ついでという雰囲気ではなくて、田舎っばいというか、けやきはもちろんあったから道はきれいなんだけど、商店エリアではなかったですよ」と承けている³⁶⁾。

1971年といえども、原宿は昼に多くの若者が集まる街とはクリエイターたちには受けとめられていなかった。静かだからこそ、集中してクリエイティブな仕事に邁進できる場所として選択されたのだと言える。

閑静な街・原宿のイメージは、1960年代にクリエイターとして立った人々に共有されていたものだろう。「鋤田(正義)さんがいたデルタモンドが少し後かな(1965年

入居)。やがて鋤田さんも独立して、宇野亜喜良さんや浅井愼平さんも入ってくるようになるんです」と繰上は述べている³⁷⁾。1965年前後に、オリンピック後の静寂が原宿地域に充溢しており、集中できる環境を求めてクリエイターたちはセントラルアパートへと入居していったのである。

鋤田正義が所属していたデルタモンドは、同級生の宮原鉄生が立ち上げた会社で、「雑誌だと『メンズクラブ』(1954年創刊)とか、お店だと当時全盛だったTakaQの広告とか」をやっていたという³⁸⁾。鋤田も「『平凡パンチ』(1964年創刊)のファッション・ページの仕事を堀内さんからもらって、溼うが撮影をして宮原がデザインしたり。洋服のブランドだとJAZZ」などを手がけていた³⁹⁾。セントラルアパートに集まった写真家、グラフィック・デザイナーたちは、ファッション関連の写真やグラフィックも手がけており、その関係を通じて多くのファッション関係者がセントラルアパートに出入りするようになったと推測できる。

例えば、日本のスタイリストの草分けである高橋靖子も、そうした経験を語っている。

1960年代の半ば過ぎ、フリーランスのスタイリストになった私に最初に来た仕事の一つが、ある化粧品のプレゼンテーション用資料の撮影だった。カメラマンは日本デザインセンターから独立したばかりの沢渡朔さん。モデルは人形作家の四谷シモンさんとマドモアゼルノンノン(日本で最初のブティック)のフーチだった。スタッフのほとんどは原宿セントラルアパートを拠点にしていたクリエイターたちだったから、1階の喫茶店レオンに集合して出発した⁴⁰⁾

オリンピック後の原宿地域は閑静であるがゆえにクリエイティブな仕事に従事する人々が、事務所や打ち合わせ場所として最適な空間だと認知した。そして、その内容にはファッション・ビジュアルも含まれていたこともあって、センスのよい装いの業界人たちが集まる場所になっていったのだろう。

オリンピック開催前後を起点にして、アメリカ文化の融け込んだ《エキゾチズム》、集合住宅を中心とする地域開発がもたらす現代的なムード、セントラルアパートへのクリエイティブ業界人の集住、これら要素が1960年代後半に融合していったわけである。

こうした状況を「四十年余り前、米軍関係者の住居として建設され、六〇、七〇年代には、カメラマン、コピーライター、イラストレーターといったカタカナの職業人が事務所を構えた。吹き抜けの中庭や地下のブティック

には、「原宿族」と呼ばれた若者たちが集い、雑誌のグラビアを飾った」と朝日新聞は記述している⁴¹⁾。

前述した高橋は「明治通りと表参道の交差点のセントラルアパートに事務所はあった。今は衣料ブランドの商業施設だ。伝説の喫茶店「レオン」やクリエイターの事務所が入っていた。しゃれたインテリア、通りに並ぶ外国製の車。時代の先端の風景に魅了され、飛び込んだ」と回顧している⁴²⁾。

原宿地域についての証言は、アメリカ文化との接断面というイメージ、オリンピック前後の都市開発による《エキゾチズム》のイメージ、先端的なクリエイターたちが集まり躍動する閑静な空間としてのイメージの3点とどこかで触れ合うもので構成されていた。これらが後年、交じり合って語られることで、原宿地域の重層的イメージが形作られていったのだといえる。それでもなお、若者の街というイメージは出現していない。それでは、いつからそれは登場してくるのだろうか。

IV. 騒がしい「若者」の出現とファッション街化

1960年代後半、閑静な空間だった原宿地域⁴³⁾に、夜な夜な若者が集ってくるようになる。いわゆる「原宿族」である。「原宿族」が目指したのは、深夜営業の店だった。「オリンピックを契機に、この辺り、高層マンションが続々建ち、その一階、地下にレストラン、スナックバーが開店した。まずこれらが彼らの温床となった」と、原宿地域の変容について、新聞は伝えている⁴⁴⁾。

「原宿族」を呼び寄せたのは「立ち並ぶ高級マンションと表参道の並み木がকাশ出す独特のムード、外苑とオリンピックパークにはさまれたアベック向き環境、拡張整備されたドライブウエー、こう三拍子、四拍子そろっては、彼等が集まってくるのも無理はない」と、この時点では説明される。これは先の3つの原宿イメージと同じものだ。「独特のムード」があって、閑静であるがゆえに、若者たちの交渉に最適と、「原宿族」にも捉えられていたといえる⁴⁵⁾。

これら若者たちの出現は、1965年ごろにはじまる。すぐに、その深夜徘徊が問題視された⁴⁶⁾。例えば、「土曜日の夜。国電原宿駅から神宮の表参道は若者の町になる。この若者たちは国電やタクシーで原宿へかけつけ、つぎつぎに深夜レストランに吸い込まれていく。背広をきちっと着こなした十七、八歳の少年、セーター姿の少女。なかには乗用車やスポーツカーを運転してくるマイカー組もいる。いずれも三、四人のグループ。それも少年は

少年ばかり、少女は少女ばかりの小集団でやってくるのが多い」と記述されている⁴⁷⁾。

「原宿族」はファッションブルでなかったわけではない。「集まっているのは例のごとく、コンチネンタル、ボヘミアンなどのスタイルの若者」とあるので、ファッション意識は高い若者であったことがわかる⁴⁸⁾。ただ、「原宿族」は、最先端ファッションを買い集めてきていたわけではなかった。

原宿地域の住民たちは「原宿族」や深夜営業のレストランに対する反対運動を果敢に行っていく。若者の夜の町になりかかった原宿から、異物を排除する方向で住民たちは相対した⁴⁹⁾。ほどなく、夜に徘徊する若者たちは駆逐された。

「原宿を追われ追われて…」では「青山族」という言葉ができた。取り締まりと地元の排斥運動で原宿族が青山学院付近の深夜レストランに出現し始めたのである」と書かれた。住民の排斥運動の結果、若者たちは周辺地域へと拡散していった⁵⁰⁾。1967年前後に、反対運動に力を得た警察による補導や指導によって、「原宿族」は青山など周辺地域に拡散し、「族」としての成立が困難になっていったといえる。

こうした経緯をみると、若者たちを歓迎するムードは原宿地域にはまだ微塵もない。閑静で「独特のムード」にあふれる原宿地域は、それをかき乱す場違いの若者を排除しようとしていたといえる。

では、昼間に原宿を訪れる若者にはどういった人がいたのだろうか。服飾品を目的に原宿に昼間に訪れる若者は、どのようにして出現していくのだろうか。

服飾品を目的に若者が昼間に来訪するためには、服飾品関連の店舗が存在することが必須である。その流れについて、当時の代表的な服飾雑誌である『装苑』を見ていこう。

雑誌『装苑』は、服飾情報を提供する雑誌として、1960年代には他の雑誌と比肩しても優位な地位にいたといえる。その『装苑』における、服飾関係施設の紹介と住所について、「製品提供のご案内」ページから、めぼしいものを目視で調査した。

『装苑』(1963-10)には、日本洋装協会事務局が渋谷区原宿2-170-18にあることが書かれている。それ以外に、原宿地域での服飾品関連施設は確認できない。『装苑』(1964-3)には、「田村俊一デザイン・ルーム 渋谷区原宿1の160」があるが、それ以外には確認できない⁵¹⁾。したがって、オリンピック開催前にファッション製品をふ

んだんに揃えた店が原宿エリアのみならず現在の表参道エリア、青山エリアにあったとは言えない。誌面の情報量からも、原宿地域の開発と店舗増加は、オリンピック後であったことが伺える。

『装苑』(1966-2)には、原宿駅から現在の表参道交差点に向かって左側、同潤会アパートや伊藤病院を超えたあたりにあった「ブティック・マコ」というお店が紹介されている。現在の私達ならこの立地は原宿地域に含まれるものであろうが、この当時の住所は「港区赤坂青山北町六の三三」であり、原宿地域としてはマージナルな場所だった。それでも、表参道周辺にブティックが現れ始めたことについては注目したい。

『装苑』(1966-11)には「レン河内」というデザイナーの作品を購入できる「原宿<ティファニー>」という店の広告が紹介されている。『装苑』(1966-12)には「原宿駅から両側に豪華なマンションを見ながら並み木道を青山の方に向かいます。空気のきれいな、気持ちのよい、東京には珍しい緑の町です。表参道と環状五号線との交差点を少し新宿方面に行ったところの右手にこの「マドモアゼル・ノンノン」があります。向かいは教会、斜め向かいにはしゃれたドライブイン「ルート5」があります」と書かれた⁵²⁾。「マドモアゼル・ノンノン」は、高橋靖子の言う「日本最初のブティック」であった。デザイナーは荒牧太郎である。「しゃれた」飲食店とアパレルショップ、この2つが、明治神宮交差点周辺に出現しているさまがみてとれよう。

『装苑』(1967-3)には「キルティングのさいふ」が紹介されていて、それらが売り出されているのは「原宿・ルイ」という店であった。ルイは小物を扱っており、『装苑』(1968-1)でも継続的に紹介されていた。『装苑』(1967-11)では「ブチック藤堂」が「渋谷区神宮前二の六の六 秀和レジデンス」に居を構えた。そして、『装苑』(1968-3)ではグラビアの撮影協力に「原宿フランセ」の名がみえる。『装苑』の誌面に、「神宮前」や「原宿」と言ったキーワードが否応なく飛び込んでくるようになる。『装苑』(1968-12)の小物紹介の記事では、「原宿・志むら」「原宿・キディランド」のものが紹介の多数を占めた。徐々に、ファッション性の高いインテリアや服が買える地域として、『装苑』にも見なされるようになっていったことがわかる。

『装苑』(1969-2)をみると、1963年に比して、「神宮前」に居を構えるデザインスタジオが増えた。お店を分類するカテゴリーも「デパート及び注文服、既製服」と広が

り、「ブチック藤堂」や「マドモアゼル・ノンノン」のみならず「ブティック・ニコル」は「神宮前三の三八の一 原宿ロイヤルマンション内」にあるし、「リノローブ」も「神宮前四の三の三」にあった。『装苑』(1969-4)になると「製品提供の店」の分類のうち「その他」のカテゴリーでも服飾品の店が見られるようになる。「アロー・アクセソワール」は「神宮前一の五一の八 大坪ビル内」にあるし、「チェルシー」は「神宮前六の三〇の三」にある。「チェルシー」はセントラルアパートの筋向い、明治通りを渋谷方面に向かって右側にあった。「チェルシー」は「男物のデザイナー、小林秀夫さんの夫人がやっている店」であり、そこには「男物のカジュアルな上着やジーンズ、女物のスカートやニットワンピース。カッコいいベルトやカッコいい大きなバッグ」などが置いてあったとされる⁵³⁾。

『装苑』(1969-8)には「マコビス」という「ブチック」も紹介されている。「原宿で降りて、表参道を青山通りに向かって歩いていくと、左側に真っ赤なペンキを塗ったブチックがあります。それが私(岸本昌子：筆者注)のお店、〈マコビス〉です。赤で統一した店内には、シャツやミニスカートなどから、バッグやベルトなどのアクセサリまで、オリジナルの製品がいっぱい並んでいます」と説明された⁵⁴⁾。マコビスはすでに、提供紹介のところで名前が出ていたが、大々的に紹介されるのは、この号が初めてであった。

『装苑』(1969-9)ではセントラルアパート4階に店を構えた「シャレード」が紹介されている。「女主人の香山佳子さんは、ファッションモデルをやめて、もう長いことこの真珠の店を経営しているのです」と書かれている⁵⁵⁾。60年代末には、こうして、セントラルアパートを中心とした神宮前交差点近傍に、マドモアゼル・ノンノン、チェルシー、マコビス、シャレードといったブティック、アパレル小物、宝飾品のお店が現れた。

『装苑』(1969-9)でも「原宿を本店」とする「ブティック・オーサキ」が「新宿に進出」してきたことが紹介されている。『装苑』(1969-10)には自由が丘に「原宿・〈キャビン〉の姉妹店」として、「カジュアル一点張り」のお店が開店したことが紹介されている。『装苑』(1970-1)には「アトリエケイト」が「セントラルアパート内」に出店している。『装苑』(1970-6)では、「コープオリンピック内」に「ティファニー・ブティック」、「神宮前五の五一の八」に「ティディ・ガール」、「神宮前一の二〇の七」に「サロン・ド・ローズ(林桂子アトリエ)」などが誌

面に現れた。徐々に、目視での調査であっても、原宿地域の服飾品店舗のピックアップは容易になっていく。これらは、夜に徘徊する原宿族が駆逐されていく一方で、明治神宮交差点近傍にアパレル、小物、装飾品が買えるお店が集まってきたことを示すものとして読みうる。

そして、服飾品店舗に商品を提供するファッション関連のクリエイター達も、この時期に原宿地域に集まってきた。『装苑』(1966-11)の「装苑賞受賞者は今なにを考えているのか?」というインタビュー記事では、「第十八回」受賞者の渡辺信泰が「この冬に、自分自身のアトリエを原宿か青山に持つ計画です。落ち着いた、パリ・モードのよさを感じさせるような、そんなアトリエにしたいと思っています⁵⁶⁾。装苑賞を受賞したとはいえ、キャリアは浅い。それでも原宿か青山をアトリエにしたい、と望んでいた。

また「ルポ★私の絵の世界」で紹介されているファッションデザイナーである松本(旧姓 山口)はるみは「都内でもひととき美しい町並みの風情をたたえている原宿の表参道、その一角にあるマンションの五階が松本はるみさんのアトリエです」と紹介された⁵⁷⁾

『装苑』(1970-2)では装苑賞受賞者の山県清臣氏が「アトリエが狭くな」ったということで、新たな場所を探していた。「場所は青山か原宿」と指定し、「一軒建ちでもアパートでも結構」と書いている⁵⁸⁾。『装苑』(1970-4)にはやまもと寛齋も「いまや原宿にアトリエを構え全国に売りまくる意気込みである」と紹介されている⁵⁹⁾。『装苑』(1970-5)においても美容師の「丹羽辰代さん」が「原宿にお店を持ち、「撮影用の髪型、一般のお客様」の仕事を精力的に行っているという⁶⁰⁾。

ショップの新規開店、デザインアトリエの開業、こうした流れは、昼間の時間も、若者たちを誘引する魅力として作用した。

『装苑』(1969-4)では「若さを着る特権」として原宿において7枚のファッションスナップを撮影し、それを紹介している。すべて女性である。そこでは「原宿—ちょっと気どった町。エキゾチックではあるけれど、パリ、ロンドンにもないムードがここにある。いつの日にか、ここからまねごとではない、新しいモードが生まれてくるかもしれない。たとえ高価なものでなくても、最新のモードを自由にくずして、自分のものに着られるのは、まさに若い日の特権だと思う」と映画批評家の秦早穂子は述べていた⁶¹⁾。この記事は、原宿に集まる若者を可視化し、遊歩者として位置付けた特筆すべき記事だった。

それを承けるかのように『装苑』(1969-12)には「三つの声」という読者投稿欄に地方の女性の投稿が掲載された。「暑さには自信のあった私ですが、東京の暑さにはほんとうにまいりましたね」と札幌市出身の女性は述べ、「それにもめげず三日の間に、銀座、青山、原宿、六本木、横浜・元町と駆け足でブチック巡りをしました。このブチック巡りの時は『装苑』に出ていた地図を参考にしたんです」と喜びをあらわにした⁶²⁾。原宿が、銀座などと並んで、地方出身者がショッピングをする場所として認知されたことがわかる。『装苑』(1970-7)では、専属モデルのティナ・ラッツが「ウィンドーショッピングの好きなティナ。暇があると、銀座や原宿をぶらぶら歩きます」と述べたように、昼間の原宿はおしゃれな服や小物を求めることのできる空間として、認知されるようになっていったのである⁶³⁾。

以上のように、1960年代後半は、深夜に集まる若者たちが排除される一方で、服飾品のお店、服飾品のクリエーターたちが原宿地域に出店し、雑誌の中で、それらが可視化されていくようになった。そして、1970年前後には、原宿地域に服飾品を求めて買い物にくる人々が現れるようになったといえる。先に述べた原宿イメージの3要素に、これ以降ファッション的なるものが加わっていくようになった。

V. 「レオン」と「シャンゼリゼ」

ファッション関係のクリエーターたちと、セントラルアパートを活動拠点としていた業界人たちの接点はどのようなものだったのだろうか。先に述べたように「トレンドイラストラーターとして宇野自身も独特のファッションセンスを持ち、その周りにはコシノ・ジュンコ、内藤ルネ、菊地武夫、金子国義、四谷シモン、安井かずみ、加賀まりこ、伊藤五郎、宮崎定夫などファッションナブルなクリエーターたちが独自の装いで集まったので、その雰囲気はまた原宿トレンドの一面となって注目を集めた」ような交流はあったのだと想像できる⁶⁴⁾。

こうした交流の場所として、しばしば、記憶の中で取り上げられるのがセントラルアパート1階のあった喫茶店の「レオン」である。「レオン」は増淵が述べるように一つの業界人たちの「サロン」であった⁶⁵⁾。セントラルアパートを拠点とするクリエーターたち、原宿に居を構えるデザイナーやショップ経営者たち、は「レオン」を通じて有形、無形の交流を行なっていった。

「レオン」の記憶にアメリカ文化的なイメージは薄い。

どちらかといえば、「発展を後押ししたのは若者文化の担い手たちだった。神宮前交差点に立っていた原宿セントラルアパートには70年代、カメラマンやコピーライターらが事務所を構え、表参道には大手百貨店やスーパーが競ってファッション専門店を出した。「原宿」と書かれた紙袋は、最先端の流行を示すシンボルだった」というように、セントラルアパートと一体となったクリエイティブの息吹、こうしたものとなれなくなって思い出されるシンボルの一つだったといえる⁶⁶⁾。

高橋靖子のアシスタントを経験した中村のんの記憶では「ヤッコさんがもっともよく行っていた「レオン」は、神宮前交差点の角のセントラルアパートの表参道側の1階にあったガラス張りの店で、現在は「今をとときめくクリエイターや芸能人たちが常連としてたむろっていた伝説の喫茶店」として語られる⁶⁷⁾。そんな風を書くとき、いかにも華やかな洒落た喫茶店だったような印象だが、店自体は黒い壁に曲木の椅子が並んだ。ごく普通のインテリアで、トースト、チーズケーキのあるメニューも普通だった。ただし、1杯分のお値段でコーヒーを何杯もおかわりできるところは当時としても普通ではなく、セントラルアパートの若きクリエイターたちが長居していた理由に、そこも大きかったと思う」とある⁶⁸⁾。外観的には普通の喫茶店だが、そこに入出入りする人々の威光によって、メモリアルな空間としてイメージされていたのだといえる。

ただ、それはあくまで使用者だけのイメージだったのかもしれない。原宿を歩く人々や、まだ無名のクリエーター志望の若者たちにとっては、「レオン」には障壁が感じられたようだ。のちにZUCCAを立ち上げる小野塚秋良は「原宿という東京の閑静な住宅街を若者の街へ方向転換させたのは、伝説の喫茶店「レオン」に集まる人々だったであろう。そこには新東京人や外国人たちでにぎわっていた。学生だった僕にとっては、やたら入りづらい店だった。「レオン」があったセントラルアパートには、当時の有名カメラマンのオフィスやモデルエージェンツ、広告会社などが入っていて、素人との間には分厚い壁があった」という⁶⁹⁾。

とはいえ、小野塚の証言は、「レオン」はクリエーターたちの交渉、交流の場としてのみ機能するものから、そこに集まるクリエーターたちに接触できる場として、メディア性をもち始めたことを裏付けている。このメディア性が、「東京の閑静な住宅街を若者の街へ方向転換させ」、「新東京人や外国人」を集めたのではないだろうか。

メディア性の実装のみならず、都市開発もまた人の流れを変えた。「屋敷もあった表参道には、1927年に同潤会アパートが、58年には原宿セントラルアパートが建ったものの、静かな住宅街だった。72年に地下鉄の明治神宮駅が開業し、一変する。70年代のセントラルアパートには糸井重里さんら若手クリエイターが拠点を置き、78年にはラフォーレ原宿が開業」と書かれているように、1972年の地下鉄明治神宮駅の開業は、閑静だった原宿に人を呼び込む契機となった⁷⁰⁾。

先述した1971年の山本正旺の調査では1200人くらいだった昼間の人口も、これ以降急増する。1970年代に原宿は、昼間人口の増加を見込んだ開発業者によって、いわゆるファッションビルが続々と現れるようになった⁷¹⁾。

同時に、この地に続々と建てられる集合住宅にアトリエ兼住居としてマンションメーカーと呼ばれるデザイナーたちが集まっていく。伝統ある同潤会アパートに入居し、営業しようとするマンションメーカーに対する住民の反発も、新聞記事上に見られるほどだった⁷²⁾。

「レオン」だけではなく、参道として利用されてきた表参道についても、メディア性が徐々に備わる。『装苑』(1966-1)では、「東京のため息と喜びの顔<原宿>」というタイトルで、その印象を富田英三は次のように記している。

「東京オリンピックが残していった最大のみやげ物」である建築物が遠くに見え、「亭々たるケヤキの並木に色どられたSix-lane……六車線の、黒々と光る広い車道」があり、「その両側に、白と黒、オリーブ、れんが色の、巨大な高層ビルが、まるで、新建築の展示場のように並び、そこに流れる、摩訶不思議なムード」が感じられ、「その一階二階に、〈千疋屋〉と〈S&P〉なんて、パリにもローマにもないみたいにきれいなcafé terrasse……。そのグリーン・ファンタジアの向いが〈セントラル・アパート〉」が並ぶ原宿は、「パリのシャンゼリゼ大通り？ ニューヨークの五番街？ いえいえ、それ以上の魅力です」と書いている。

1960年代後半に増加した服飾品関連の店舗に合わせ、さらなるイメージの層が原宿地域に付加されていく。それが、ここで富田によって述べられた「シャンゼリゼ」というパリのファッション・ストリートのイメージだ。これまで、原宿地域のイメージにパリやニューヨークのイメージはなかった。けれど、街区の変容は、それに合わせて新たな衣装をまとうようになっていったのである。

オリンピック開催による《エキゾチック》なムードは、

街区が変容して備わった服飾品店舗のイメージから生れた「シャンゼリゼ」や「サンジェルマン・デ・プレ」やニューヨークの「五番街」といったキーワードによって上書きされていくようになる。

1970年にパークレイというアメカジの店がセントラルアパートに開店している。服飾評論家の遠山周平の記憶では、ニューヨーカーほか2社の商品が並べられたこの店舗は、アメリカというよりもニューヨークの香りがしたそうである⁷³⁾。またアメリカンカジュアルの女の子御用達の店「CABIN」もあったと中村のんは述べている⁷⁴⁾。徐々に、アメリカ文化の中でもファッション性に満ちたアメリカ文化へと具体化されていく。

また、若者ファッションの源流の一つとしてみなされる大川ひとみのMILKも、セントラルアパートの一階にあった。クリエイターの溜り場であり職場であったセントラルアパートも、徐々に、服飾品店舗が多く入ることによって、ファッション的イメージが強まっていく。

1970年前後において、原宿地域はメディア性を備えるようになった。セントラルアパートは、服飾品関連の店舗の増加と、クリエイターが集まる空間としての「レオン」によって、70年代のファッション・イメージをまとったランドマークとしてみなされるようになっていく。

そして、1970年代には、服飾雑誌『装苑』を追い越して『an・an』(平凡出版、現マガジンハウス)と『non-no』(集英社)が、原宿地域がまとったイメージを、よりファッションの方へとつなげていく。しかし、それでもなお、原宿地域は若者化へと抵抗していた。それは冒頭に記したクルーズの萬小路氏の発言に代表されるものだ。この時期についての消費者としての若者たちとの相克の歴史については、稿を改めて詳細に検討したい。

参考文献

- 秋尾沙戸子(2011)『ワシントンハイツ』新潮社(文庫)
蘆田伊人 編(1934)『大日本地誌大系 第1 第1冊 新編武蔵国風土記稿壺 新編武蔵国風土記稿. 第1至12冊 再版』雄山閣
家城定子(2002)『原宿の思い出』(講談社出版サービスセンター)
伊藤瞳「原宿駅」『旅客船：機関誌』(日本旅客船協会 1988)
大泉博子(1994)『ワシントンハイツ横丁物語』NHK出版
君塚太編(2004)『セントラルアパートを歩く』河出書房新社
月刊「環境ビジネス」編集部(2004)『原宿ecoものがたり』宣伝会議
(1952)『澁谷区史』
高橋靖子(2006)『表参道のヤッコさん』アスペクト
武田尚子(2019)『近代東京の地政学 青山・渋谷・表参道の開発と軍用地』吉川弘文館
竹中工務店(2000)『approach』Spring
「東京変貌」プロジェクトチーム(2007)『東京変貌 1958-2006』

幻冬舎メディアコンサルティング

中原慎太郎 (1930) 『千駄ヶ谷町誌』千駄ヶ谷町誌刊行会
西村渚山「原宿生活」『家庭雑誌5(2)』平民書房1906-1
原宿浪人「一週四磅組と我が海軍」『海軍』8(11) 畫報社1913-10
原宿シャンゼリゼ会 (1983) 『原宿1983』
原田等 (2021) 『タイムスリップ原宿』オルク
増淵敏之 (2020) 『伝説の「サロン」はいかにして生まれたのか』
イースト・プレス
溝口白羊 (1920) 『明治神宮案内』
山口輝臣 (2005) 『明治神宮の出現』吉川弘文館
山本一力 (2003) 『ワシントンハイットの旋風』講談社
(1971) 『新建築詳細図集 一集合住宅編一』

注

- 1) 2023年6月20日付『読売新聞』東京朝刊、p.23
- 2) 『an・an』1981年9/4号
- 3) 明治時代、現在の原宿地域の北側が原宿村、南側は穩田村となっており、「原宿」という言葉でカバーしている空間は今と異なっている。中原慎太郎『千駄ヶ谷町誌』(1930)には、「日露戦役前後より漸く軒を並ぶ機運を開き」、「一面交通機関の発達と都市の膨張とに伴って人口の増加は、一度畑に化した往年の邸地も、結構を誇った庭園も今や全地域を挙げて殆ど家屋を以て充塞さるるに至った」とある。西村渚山の「原宿生活」(1906)によれば、このころから「天長節の観兵式と云えば、都の隅から隅にまで、劇しい波動を与える刺激物であるが、原宿は勸進元と云う格で存外に騒がな」かった原宿に、「崖が壊されて新道が出来る。窪地が埋められて棟割長屋の設計が出来て居る。庭は段々と縮められて、青い物は段々と郊外に放逐せられる。これが時勢か。兎に角、数年来、首都にとっては足の裏の黒子のように、誰かばう人もなかった原宿が、今や一変して、複雑な巷となり、劇しい生活の流れが泡を立てて淀むて居るのである」と新たな住人が流入し、「近頃では、原宿も軍人町とは云われぬ事となった」と述べられるほどだった。
- 4) 溝口白羊『明治神宮案内』(1920)などを参照。
- 5) 家城定子『原宿の思い出』(講談社出版サービスセンター2002)、p.15
- 6) 1984年1月1日付『読売新聞』朝刊、p.21
- 7) 山本一力『ワシントンハイットの旋風』(講談社2003)を参照。
- 8) 1946年9月10日付『朝日新聞』東京朝刊、p.2
- 9) 秋尾沙戸『ワシントンハイット』(新潮文庫2011)、p.280
- 10) 同上、p.254
- 11) 大泉博子『ワシントンハイット横丁物語』(NHK出版1994)
- 12) 原田等『タイムスリップ原宿』(オルク2021)、pp.124-125
- 13) 「[わが] 街今昔 東京風土記 代々木(中) お母さん奮闘風紀守った」1992年3月15日付『読売新聞』朝刊、p.26
- 14) 秋尾、p.151
- 15) 「住民は追放運動 “静かな環境守りたい”」1965年12月16日付『朝日新聞』全国版 夕刊 p.7
- 16) 秋尾、p.379
- 17) 1956年1月17日付『朝日新聞』東京朝刊 p.8
- 18) こうした経緯は、秋尾、pp.361-398に詳しい。
- 19) https://orientalbazaar.co.jp/about_us/
- 20) 『原宿ecoものがたり』宣伝会議2004、p.72
- 21) 「東京の記憶」ワシントンハイット フェンス越しのアメリカ 2005年1月17日付『読売新聞』東京朝刊、p.34
- 22) 『原宿ecoものがたり』、p.34
- 23) 「[東京の記憶] ワシントンハイット フェンス越しのアメリカ」

- 2005年1月17日付『読売新聞』朝刊、p.34
- 24) 『原宿ecoものがたり』、p.72
- 25) 竹中工務店『approach』Spring 2000、p.5
- 26) 君塚太編著『セントラルアパートを歩く』(河出書房新社2004)、pp.16-17 (以後、「著」は省き、君塚編とのみ記す。)
- 27) 同上、p.22
- 28) 同上、p.25
- 29) 山本一力、p.92
- 30) 山本一力、pp.436-437
- 31) 竹中工務店『approach』Spring 2000、p.5
- 32) 水野正夫「バランスというもの」、『装苑』1965年2月号、p.216
- 33) 竹中工務店『approach』Spring 2000、p.7
- 34) 君塚編、2004、pp.37-38
- 35) 『原宿ecoものがたり』、p.33
- 36) 同上、p.34
- 37) 君塚編、2004、p.26
- 38) 同上、p.56
- 39) 同上、pp.56-57
- 40) 高橋靖子『表参道のヤッコさん』(アスペクト2006)、p.10
- 41) 「文化融合「ここで」と(世紀末の街角で:6)」1999年12月28日付『朝日新聞』夕刊 p.15
- 42) 高橋靖子「70年代原宿駆け抜けた スタイリストの草分け高橋靖子さん、半生まじえ出版」2006年7月3日付『朝日新聞』朝刊p.33
- 43) 1965年に原宿地域の住所表記が変更され、「神宮前」という住所で、旧原宿、旧穩田が統一される。それら経緯については割愛するが、その上で本ノートでは「原宿地域」という用語を継続して用いていく。
- 44) 「[サイドライト] 重症の原宿病」1967年7月4日付『読売新聞』夕刊 p.1
- 45) 同上
- 46) 「ハラジユク族騒動 奇妙な青春を楽しむ若者たち 深夜喫茶を根城に」1965年12月16日付『読売新聞』全国版 夕刊 p.7
- 47) 同上
- 48) 同上
- 49) 「[ギャラリー参道] 東京・原宿に」1972年4月20日付『読売新聞』朝刊 p.17
- 50) 1967年3月10日付『読売新聞』夕刊 p.3
- 51) 田村俊一デザイン・ルームは、主にアクセサリーのデザインをしていたようだ。
- 52) 『装苑』1966年12月号、p.204
- 53) 『装苑』1969年7月号、p.171
- 54) 『装苑』1969年8月号、p.75
- 55) 『装苑』1969年9月号、pp.152-153
- 56) 『装苑』1966年11月号、p.172
- 57) 『装苑』1969年4月号、p.176
- 58) 『装苑』1970年2月号、p.157
- 59) 『装苑』1970年4月号、p.183
- 60) 『装苑』1970年5月号、p.189
- 61) 『装苑』1969年4月号、p.166
- 62) 『装苑』1969年12月号、p.192
- 63) 『装苑』1970年7月号、p.141
- 64) 竹中工務店『approach』Spring 2000、p.7
- 65) 増淵敏之『伝説の「サロン」はいかにして生まれたのか』(イースト・プレス2020)
- 66) 「表参道 けやき並木の物語 焼け跡の10本が163本に(現場考)」2004年1月24日付『朝日新聞』夕刊、p.10

- 67) 中村のん (連載/20th Century Girl 新宿レオンは仕事場のサロン<https://www.mononcle.jp/column/20th-century-girl/5380/>)
- 68) 同上
- 69) 「(彩・美・風) 写真集『QUALITES』の存在 小野塚秋良さん」2011年12月14日付『朝日新聞』夕刊、p.4ページ
- 70) 「(らんどまあく@東京) 表参道 向田邦子、忘れ傘の遺言」2010年2月4日付『朝日新聞』朝刊 p.24
- 71) これら1970年代の原宿におけるファッションビル開発の状況については、別稿で論じたい。
- 72) 1974年9月29日付『読売新聞』朝刊、p.17
- 73) <https://www.ny-onlinestore.com/shop/pages/magazine-know-iconoftrad-9351.aspx>
- 74) <https://www.mononcle.jp/column/20th-century-girl/5380/>

フィルムやビデオテープをデジタルデータ化する作業の内製化に関する研究

Research on the Digitalization of Film and Video Utilizing In-House Methodology

昼間 行雄

HIRUMA Yukio

要旨

本研究ノートは、現在普及している高画質のデジタルカメラなどの民生用の映像機器を使用し、ビデオ編集ソフト、グレーディングソフトを活用したカラー補正の方法を含めて、主に8ミリなどの映画フィルムの映像、VHSなどのテープメディアをデジタルデータ化する方法について、約10年間の試行をまとめたものである。

●キーワード：テレシネ (telecine) / フィルムスキャン (film scan) / グレーディング (color grading)

はじめに

私は、10年ほど前から、民生用の映像機器を使用して、アナログメディア、主に8ミリなどの映画フィルムの映像、VHSなどのテープメディアをデジタルデータ化する作業を自分で行う方法を試行してきた。アナログメディアをデジタルデータ化する作業には、その専門業者が多数存在しているが、概ね工賃が高く、納期がかなり掛かる場合が多い。予算が潤沢にあり、ライブラリー業務の専門スタッフがいる事業所では専門業者に依頼することが普通だが、小さな事業所や個人では予算の関係からなかなか所有しているアナログメディアの映像資料を一気にデジタル化するという事は困難である。最近になって、小さなNPO法人や、過去に制作したフィルム作品を所有するプロダクション、個人作家から、デジタルデータ化についての問合せをいただくことが多くなった。たとえば、あるNPO法人からの依頼は、以下のような内容である。法人では、「所有している研究資料の写真、ネガフィルム、ビデオテープなどを将来に向けて教育的な資料としてデジタル化してホームページで公開したいが、その種類が多く、予算的にも業者に依頼できない状況で、なんとか自前でその作業を行う事したい。については、その方法を知りたい」という内容であった。「古いフィルムでは、褪色やフィルムベースの破損が見られ、その修復をどう行うのか」といった映像作家からの問い合わせもあった。

現在では高画質のデジタルカメラが普及しているの

で、その機材をアナログメディアのデジタルデータ化の際に活用できる。ビデオ編集ソフトやグレーディングソフトでのカラー補正の作業もやりやすい時代となった。そこで、それらをどう活用すれば安価にデジタル化や修復作業ができるのかという事をまとめておく必要があると感じ、本研究ノートを執筆した次第である。

8ミリフィルムのデジタルデータ化

8ミリフィルムのデジタルデータ化については、ここではまず、市販の8ミリスキャナーを使用した方法について言及する。その後にスクリーン再撮影の方法を述べる。スクリーン再撮影の方法については、以前に「文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要」第48巻（掲載ページ97-100P/2017年）で述べたが、その方法をアップグレードし、現在のデジタルカメラの撮影技術とグレーディングソフトウェアを用いて画質や色彩を調整する方法について言及する。

8ミリフィルムスキャナーを使用する方法

8ミリフィルムのスキャナーとしては、いくつかのメーカーから民生用の製品が発売されているが、その仕様はほとんど同じで、製造元は1つだと思われる。製品によって掛けられるリールのサイズや書き出される動画ファイルのフレームレートが異なる。私が使用した物は、Wolverine 8mmフィルムスキャナー「スーパーダビング8」と称する製品（写真1）。他の機種は50フィート

巻き（約3分20秒間）の小さいリールしか装填できないが、この機種は600フィート巻きの長尺リールが装填可能なので、40分間の作品を巻いてあるリールがそのまま装填できる事が、この機種を選択した理由である。

このスキャナーは、フィルム1コマ1コマをコマ送りしながら内蔵した小さなデジタルカメラでキャプチャーしていき、その静止画を本体内で動画データ化してSDカードに保存するという仕組みである。映写機ではアパーチャ（映写窓にフィルムを圧着させる部品）で画面の上下左右が多少マスクされてしまうため、実際の映写画面ではフレーム内に撮影されている画像全てが映らない。しかしこのスキャナーは、キャプチャーする画面サイズを1コマの画面よりも広く調整できるような画面サイズよりも大きいアパーチャが備わっているので、1コマの画面全てをキャプチャーできる。この点がこの機種の優れている点である。1コマの画面よりも広くキャプチャーすると、1コマに隣り合った上下のコマの端と左側にパーフォレーションが写り込む（写真2）。これは編集ソフト上でトリミングすれば問題ない。操作方法だが、フィルムをフィルムゲートに沿って装填し、アパーチャのプレッシャープレートを開けて、コマ送り爪にフィルムのパーフォレーションを引っ掛けた位置でプレッシャープレートを開める。キャプチャー開始ボタンを押すと、自動的に1コマずつフィルムが送られてキャプチャーが開始され、停止ボタンを押すと、自動的にMP4の動画としてレンダリングされて装填したSDカードに収録される。操作は簡単であるが、注意点としては、装填するフィルムの状態である。スプライス部分の経年劣化で繋いだコマの間隔が微妙に空いてしまっているフィルムの場合、そこでコマ送りが停止してしまう。フィルムベース

が傷んでいる箇所では、コマ送りが正確に行われず、キャプチャーした画面が上下にブレるといった問題が生じる。また、アパーチャの下側に位置しているLEDの透過光で照らされた乳白色板に、フィルムに付着している微細な塵が落ちると、それが影となって画面にぼんやりと写り込むことがあるので、乳白色板のこまめな清掃が必要である。この製品の一番の問題点は、キャプチャーするカメラの明るさ調整が固定できない事である。暗いカットや黒味部分では、自動的にカメラの感度が上がってしまうためグレーがかった画面になり、高感度フィルムを使用した室内のカットなどではフィルムの粒子がかなり目立ってしまうのだ。この点は是非とも改良を望みたい。

次に、このフィルムスキャナーで動画化されたMP4の動画ファイルを動画編集ソフト「アドビ・プレミアプロ」で調整する方法について述べる。このスキャナーで書き出される動画ファイルは1440×1080ピクセル（画面のアスペクト比が4：3のスタンダードサイズ）である。「アドビ・プレミアプロ」では、1920×1080ピクセル（画面のアスペクト比が16：9のフルハイビジョンサイズ）のタイムラインを作成し、その中に1440×1080ピクセルの動画ファイルを配置する。すると自動的に左右にサイドクロップの黒味が付いたように見える。しかし、この黒味部分は画像が無いためにプロジェクトファイルのプレビュー画面上では黒として表現されているに過ぎないので、JPEGの静止画像で作成した黒帯画面を画面の左右に配置してクロップする。コマの画面全てをキャプチャーした場合の上下に隣り合ったコマの端と左側のパーフォレーションの写り込みを除外するためには、画面を多少拡大して4：3の画面に画面1コマの上下左右を合



写真1 スーパーダビング 8



写真2 キャプチャーした1コマ

わせる必要がある。サイドクロップを付けずに16:9のフルハイビジョンサイズにする場合には、左右の黒味を配置せず、左右一杯まで画面を拡大する。上下がフレーム外に切れてしまうので、モーションの機能を使って上下の位置を1カットごとに調整していく。しかしこの方法では、画面の拡大率が大きいため、デジタル上でのピクセルが拡大されるため、画質が劣化してしまう。そこで改善の方法を試行してみた。それは1280×720ピクセルのハイビジョンサイズのタイムラインを作成し、その中に1440×1080ピクセルの動画ファイルを配置してモーションの機能で縮小して画面の左右を合わせるという方法である。YouTube等にアップする場合には、タイムラインを1280×720ピクセルのハイビジョンサイズで書き出せば画質は充分である。また「アドビ・プレミアプロ」では、動画の書き出し時にピクセルサイズをリサイズして書き出せる機能が優れていて、拡大した時のピクセル補完がなされるので、フルハイビジョンサイズで書き出しても画質は充分実用に耐える動画ファイルが作成できる。

タイムラインに動画を配置した際には、もう1点、フレームレートの調整も必要である。このスキャナーで書き出される動画は、フレームレートが20fpsである。タイプSの8ミリフィルム（スーパー8、シングル8）は標準の撮影コマ数が18コマ/秒か24コマ/秒であるため、20fpsでは再生速度が合わないのので、それも編集ソフト上で調整する。先に述べたタイムラインではそのフレームレート設定について触れなかったが、ここではYouTube等にアップしたりDVDを作成したりするのに適した30P（29.97fps）での設定として話を進める。「アドビ・プレミアプロ」のタイムライン（シーケンス設定）は、最初に設定したフレームレートのタイムラインに異なるフレームレートの動画を配置しても、そのタイムラインでのフレームレートを変えない設定にしておくと、自動的にそのフレームレートに変換された画面が再生される。なので、元の動画が20fpsでも画面上での動きは変わらない。この状態では、元の8ミリフィルムが18コマ/秒の場合、1.1倍動きが速くなっているのので、元が20fpsのそのクリップを選択して「アドビ・プレミアプロ」の「速度・ディレーション設定」を90%にすることで、フィルムで撮影された本来の速度が画面上で再現される。

このスキャナーで書き出される動画ファイルは8bitのMP4形式で、かなり圧縮率が高いため、「アドビ・プレミアプロ」で褪色したフィルムの色彩を調整するなどの

カラーコレクションを行う際には注意が必要である。明るさや色彩を大きく変化させようとすると、圧縮ノイズや、明るさの階調が段階的に現れた画像として見えるバンディングが出てしまう。また、高感度フィルムの粒子部分に圧縮ノイズが出て、それが細かいモザイク状態に見える場合があり、ノイズが画質を損ねる。粒子が目立つ場合には、粒子を除去するエフェクトなどを使用して粒子を目立たなくした動画ファイルに変換してからカラーコレクションを行うなどの工夫が必要である。

スクリーンの再撮影での方法

家庭にビデオが普及した1980年代には、8ミリフィルムをビデオ化する方法として、映写機でケント紙などの平滑な白い紙に小さく映写した8ミリフィルムの画面をビデオカメラで撮影するフロントプロジェクションでの「簡易テレシネ」と呼ばれる方法が行われていた。この方法の欠点は、撮影したビデオの画面が瞬くフリッカー現象が生じる点である。これは8ミリの映写コマ数とビデオのフレームレートが合わないために生じる。通常の8ミリ映写機のシャッターは3枚の羽根で構成されている。フィルムが映写される際に1コマが3回照射されるので、1秒間に18コマ×3で54回照射されているのだ。1980年代に存在していたビデオカメラの撮影フレームレートは60i（59.94fps）に固定されていたので、そのフレームレートと同期させるためには、映写機側を30で割り切れる照射回数にしなければならない。そこで、フリッカーを除去する手軽な方法として考えられたのが、映写速度を20コマ/秒に改造した映写機で映写すると1秒間に20コマ×3で60回照射されるので、ビデオと同調してフリッカーが消えるというものである。実際に映像事業者向けに20コマ映写ができる映写機も発売された。しかし1980年代では解決できなかった点が2点あった。それは、撮影するカメラが映写画面に対して斜めに位置する（写真3）ため、8ミリフィルムの画面が歪んで撮影されるという点と、ビデオのダイナミックレンジが狭いため、フィルムの明暗の諧調を再現するのが難しいという点である。この点から、あくまでフィルムをビデオの画面で手軽に見る方法として「簡易テレシネ」は位置付けられてきたのである。

しかし高画質なデジタルカメラと高機能な編集ソフトが存在する現在、この「簡易テレシネ」の方法でも優れたデジタルデータ化ができるのではないかと考えて試行したのが、紀要第48巻に記載した方法である。本研究ノー

写真3 カメラが斜めの位置になる様子



トに記載するのは、前回に試した方法を元に当時から進歩した撮影と編集の技術を加えて、より高画質化したデジタル動画データの作成方法である。

比較するために、映写するフィルムは、前回と同じ自主制作フィルム作品『Follow on』（1981）を使用した。この作品は低感度のデイルイトフィルム「フジカシingle 8 R25」で撮影していて現在でも退色していない。また上で述べたフィルムスキャナーでこのフィルムをキャプチャして、そのデータとの比較も行った。

「簡易テレシネ」で1980年代に解決できなかった、8ミリフィルムの画面が歪んで撮影される点については、ビデオ編集ソフトで画面の大きさや角度が補正できるので、斜めに歪んでいる画面を真っ直ぐに直すのはとても簡単にできる。「アドビ・プレミアプロ」では、「ディストーション」のホルダ内にある「コーナーピン」のエフェクトを使って、画面を見ながら四辺の座標を調整する。フィルムの明暗の諧調を再現するのが難しい点についても現在では解決可能である。現在のデジタル一眼カメラは、家庭用のビデオカメラに比べて、ダイナミックレンジが広く、10bitの撮影を行う事で、編集ソフトでのカラーコレクションの自由度が高くなった。そこで今回新たに試したのが、10bitの4Kサイズのピクセル数での撮影とLOG撮影によるカラーグレーディングである。

シンクロスキャンの撮影でフリッカーを回避する

通常の8ミリ映写機での1秒間に18コマ×3で54回照射とデジタル一眼カメラを同期させてフリッカーを生じさせない方法として、今回は、映写機の映写速度をカメラのシャッタースピードに合わせて調整する方法を行ったが、シンクロスキャン機能があるカメラを使えば、54

回の照射回数にカメラの方を合わせて同期させる方法も現在では選択肢として加わる。そこで今回使用した機材は、撮影するカメラはシンクロスキャンが可能なパナソニックLUMIX DC-GH5。18コマ/秒でフィルムを映写し、その画面をシンクロスキャンモードでシャッター速度を54分の1秒にして撮影するとフリッカーは簡単に消えた。ところが使用した映写機はクォーツロック・モーターを使用したハイエンドな機種ではなく、DCサーボ・モーターの機種なので、僅かな回転数の上下があり、映写機の変化が微妙になるとフワフワと非常に変化が遅いフリッカーが現れ始めた。そこでモニターを見ながら手動で54.1分の1秒から53.9分の1秒にシャッター速度を調整しながら撮影していった（写真4）。

LOG撮影でグレーディングする

さらにこの時には、4K（3840×2160ピクセル）10bitのLOG撮影で映写画面を撮影した。10bitのLOG撮影とは、簡単に述べるならば、幅広い色域と階調を保持したデータとして撮影できる方法で、ダイナミックレンジが広い。そのため、通常の8bitの撮影モードで撮ったデータに比較して編集ソフトでの補正や加工が行いやすい。8ミリフィルムを映写した画面を民生用ビデオカメラで撮影すると、明るい部分の階調や色彩が白く飛んでしまい、暗い部分は潰れて見えなくなってしまうのが普通であった。

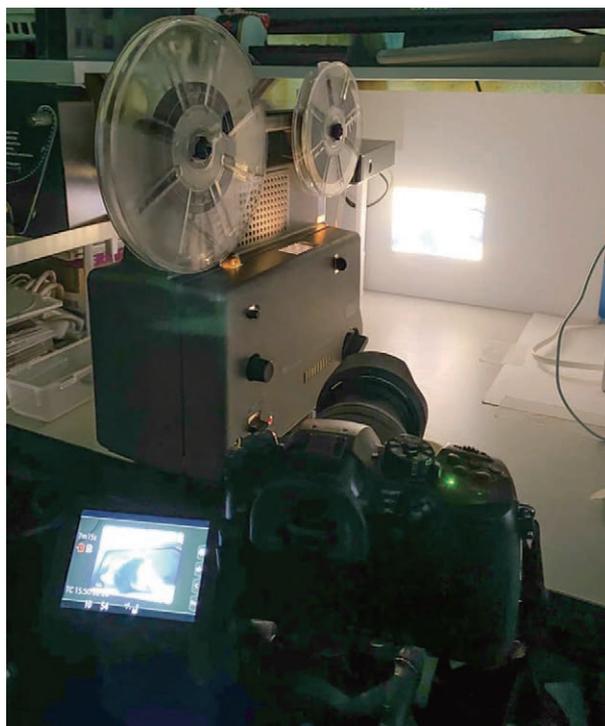


写真4 シンクロスキャンでの撮影

しかし、この10bitのLOG撮影で収録したデータは、元の8ミリフィルムの明暗と色彩を再現するのに十分なダイナミックレンジを持っている。グレーディングソフトによって特定の色彩を強調したり、一部分の明るさを変えたりといった加工も問題なく可能であった。グレーディングではもう1つの加工を試みた。それはソフトのノイズ除去のエフェクトを使用して、フィルムの粒子を消すという加工である。近年発売されているフィルム原版のテレビドラマのリマスター版Blu-rayを見ると、放送時の画面より、または以前に発売されていたDVDよりも鮮明さが増して見える事がある。同じ作品で過去のDVDと新しいBlu-rayを比較視聴したが、画面の粒状性が違う事に気付いた。リマスター作業の中でフィルムの粒子を消すことで、画面をより鮮明に見せる効果があるようだ。今回使用した『Follow on』（1981）は低感度フィルムで撮影しているので元のフィルムの粒子は細かく、ノイズ除去のエフェクトで簡単に消すことができた。そして動画データの書き出しでは、4Kサイズをフルハイビジョンサイズに縮小書出しの設定にしてフルハイビジョンデータとして完成させた。

スキャナーとスクリーン再撮影方式の比較

同じコマを並べてスキャナーとスクリーン再撮影方式とを比較した（写真5）。スキャナーを使用したデータの方の鮮明度が高いように見えるが、被写体や物体の輪郭が鮮明に見えるだけで、スクリーン再撮影には写っている制服のボタンがスキャナーの方の映像では全く再現されずに黒く潰れてしまっている。スクリーン再撮影方式では4K撮影を行ったため、フィルム画像のより細かい部分が細かいピクセルでデータとして再現されているのである。またスクリーン再撮影方式の方がグレーディングできる階調や色彩の幅が広いいため、スキャナー方式に比べると空の色や人肌の色、髪の毛の艶、また、別のカットでは、路面電車の黄色い塗装、色鉛筆で書いた文字の色などの彩度を調整して再現することができた。

ビデオテープのデジタルデータ化

動画映像は、720×480ピクセルまたは640×480ピクセルのSDサイズの時代から現在では1920×1080のフルハイビジョンサイズ、3840×2160ピクセルの4Kサイズの時代となり、高画質化がこの10年の間に進行した。編集ソフトを使ってSDサイズの動画映像をフルハイビジョンサイズに拡大してアップスケールする事もできるが、

使用するソフトによって、その画質は様々である。私は編集ソフトのアップスケーリングでは満足できず、できるだけ高画質でアップコンバートする方法、それも既存の民生機器を使用して行う方法を模索して試行してきた。ユネスコが2019年に提唱した「マグネティック・テープ・アラート」は、磁気メディアの劣化が加速していて、テープメディアの保存期間が2025年を限度に、その後はどんどん劣化が進行するため、早めにデジタルデータ化することを推奨するといった内容である。確かに、VHSや8ミリビデオ、Hi8、DVCなどのテープメディアは、テープ自体のカビや錆などによるダメージ以外に磁気の転写による画質の鮮明度の低下、テープの走行ムラによるトラッキング不良が起こることでのノイズの発生などが著しい場合がある。後述するDVDのアップコンバートでの方法も含めて、SDサイズの動画像からフルハイビジョンサイズのデジタルデータを作成する方法をここでは記載する。

S-VHSの作品をフルハイビジョンサイズのデータにする

ここでは、自作のビデオ作品『マジックロール・プロダクト』（1992）をフルハイビジョンサイズのデータに



写真5 画面の比較（上：スキャナー、下：再撮影）

アップコンバートした時の方法を述べる。国立新美術館で開催される日本アニメーション協会主催の会員作品上映会「イントゥ・アニメーション8」（2023年）で「90年代特集」が生まれ、そのプログラムで上映するため、S-VHSテープしか現存していないこの作品をPCのQuickTimeプレーヤーで上映できるデジタルデータに変換した。

SDサイズからアップスケールする方法

まず、S-VHSが再生できるビデオデッキの映像・音声出力端子からSDサイズの60i（インターレス）のアナログビデオ信号を出力し、それをデジタル信号に変換してHDMI端子から出力できる機器が必要である。さらにデジタル信号に変換するとともに1920×1080ピクセルのフルハイビジョンサイズにアップスケールし、フレームレートは30P（プログレッシブ）化できる機器を購入した。これは「HDMIコンバーター」と称する機器（写真6）で、通販サイトで安価に販売されていた。これはアナログ出力の古いゲームの画面を録画する用途で販売されている機器だが、アップスケールされた画面は、ビデオ編集ソフトで拡大したジャギーが目立つ画面よりも画質は良好であった。しかし音声に関してはノイズが多く、音声はビデオデッキからICレコーダーで別録音したMP3のデータを使用した。このコンバーターのHDMI端子から出力したデジタル信号を入力してSSDにデータとして収録する機器には、ブラックマジックデザインのリコーダー「ビデオアシスト12G HDR」（写真7）を使用し、10bitのProRes422HQの映像データを作成した。その後、「プレミアプロ」でそのデータを元にリマスター作業に着手した。

「プレミアプロ」でのリマスター方法



写真6 HDMIコンバーター



写真7 ビデオアシスト12G HDR

まず、1920×1080ピクセル30Pのタイムライン上に映像データを配置する。元の映像は4：3の比率なのだが、変換されたデータは16：9に横に引き伸ばされているため、横のサイズを縮小してサイドクロップの黒味を配置し、その後に明るさや色彩を調整していった。この作品は、撮影したカメラがHi8で、民生用Hi8ビデオデッキから民生用S-VHSのビデオデッキへダビングしながら編集する簡易なリニア編集で作っていたため、編集箇所での映像信号が不安定な箇所があり、HDMIコンバーターで変換した際にその編集箇所が数フレーム乱れてしまったカットがあった。そこで、音声トラックにMP3の音声データを配置してその同期を取った後に、編集箇所で乱れている数フレームを削除してカットとカットを詰めていった。音楽があるシーンもあったが、幸いにもリップシンクが必要な画面に音楽が流れているシーンは無かったので、音楽があるシーンでは、映像トラックのみを数フレームカットして編集した。編集後に納品用のQuickTime動画データとして出力した（写真8）。



写真8 『マジックロール・プロダクト』（1992）

DVDをアップスケールする方法

DVDはデジタル映像ではあるが、720×480ピクセルのSDサイズであり、動画データとして書き出せるソフトを使用してフルハイビジョンサイズにアップスケール

をすると、ジャギーが目立ち、さらにインターレス映像特有の楕円ノイズと呼ばれる細かい線が、被写体が高速に移動した際のブレた部分に現れてしまう。しかし、DVDを家庭用のBlu-rayプレーヤー(またはレコーダー)で再生し、大型画面に映し出してみると、ジャギーが無く輪郭も滑らかで、楕円ノイズも発生しない。これは家庭用のBlu-rayプレーヤーには、DVDをフルハイビジョンサイズにアップスケールしてHDMI端子から1920×1080ピクセルで30Pの信号を出力する機能が備わっているからである。この出力された信号を前述したブラックマジックデザインの「ビデオアシスト12G HDR」でキャプチャしてデータとして保存できれば、DVDのアップスケーリングは、ソフトで拡大するよりも画質が良いのではないだろうか。そこで、以前に自主制作したSDサイズのデジタル作品『BRAIN WARS』(2014/DVC規格のビデオテープ)をサンプルとしてDVD化し、そのDVDからフルハイビジョンサイズのデジタルデータを作成してみることにした。DVCテープをDVD化するには、まず、テープの映像をキャプチャーする。これはDVCのビデオデッキのIEEE1394端子からDVC規格のデジタル信号を出力し、IEEE1394端子を備えたPCでその信号をキャプチャーし、編集ソフトでDVD-Rに焼くという工程でDVD化した。DVD化では、グラスバレー社のプロ用編集ソフト「エディウス」を使用した。このソフトは「エディウス」以前に存在したDVCのデジタル信号の高画質処理で定評があったカノープス社の「超編ウルトラエディット」や「DVラプター」などのソフトをベースにして作られた国産の編集ソフトで、インターレス映像をプログレッシブ化する際に走査線をブレンドする技術が備わり、DVDやBlu-rayへの書き出しの画質も優れている(しかし現在の最新バージョン「エディウス11」でDVDやBlu-rayへの書き出し機能を使うためには別ライセンス化されたソフト「Disc Burner」を別途に購入する必要がある。ここで使用したバージョンは「エディウス8」である)。

Blu-rayプレーヤーのアップスケール画質の比較

Blu-rayプレーヤーのアップスケールは、ソニーのプレーヤーBDP-S360、パナソニックのプレーヤーDMP-BD85、またプレーヤーではなくゲーム機プレイステーション3(PS3)のDVD再生機能を使ったアップスケールも試みた。その画質を比較してみると「エディウス」の走査線ブレンドのエフェクトをかけた動画データを

DVDにしたものは今回比較したどのデッキやPS3でもジャギーが現れることはなかった。いちばん違いが現れたのがテロップ(文字)の部分で、BDP-S360では、ゴシック体の横線が細く再現され、DMP-BD85では均等の幅に再現される。PS3でも文字の肉痩せはなく横線は均等の幅に再現されている(写真9)。

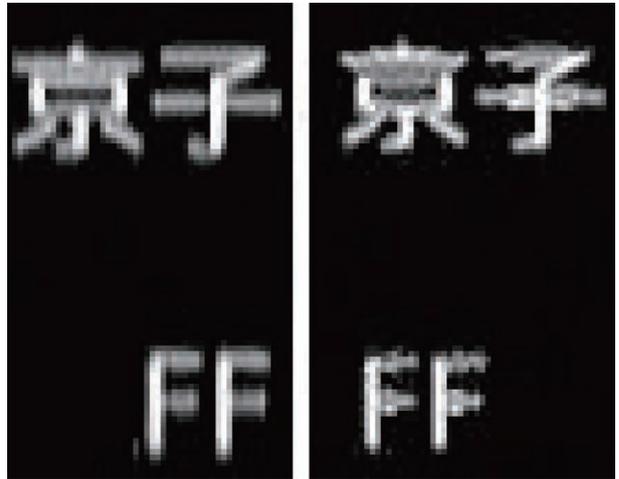


写真9 アップスケールでの文字の比較(左:PS3、右:BDP-S360)。拡大してみると、BDP-S360では横の線の先端が細くなり、ゴシック体が崩れて表現されている。

おわりに

先日、市販の音楽CDをCDプレーヤーで再生しようとしたが、エラー表示が出て再生ができないという事があった。同じCDが3枚手元にあったが、どれも再生できなかった。「マグネティック・テープ・アラート」の警鐘が出されているテープだけではなく、ディスクメディアの劣化も生じてきている。以前に家庭に普及していたアナログのディスクメディアであるレーザーディスクは、その盤面を貼り合わせた接着剤の劣化で再生不能となる事が多かった。上で述べたエラー表示が出て再生できなかったCDは1997年に製造されたものだが、同時期に購入した別のCDを見てみると、盤面から銀色の記録面が剥離している状態の物があった。フィルムやテープのアナログメディアだけでなくデジタルのディスクメディア、例えばDVD-Rに記録している映像なども徐々にデジタルデータ化を進めた方が良いのではないだろうか。

今後のデータ化に関する研究としては、4Kのモニターが普及している現在、SDサイズからハイビジョンサイズのアップスケーリングだけでなく、ハイビジョンサイズから4Kサイズへのアップスケールについても内製化する方法を考えて試行していこうと思っている。ま

た、画像生成AIをアップスケールに用いる技術も進歩し、ピクセルを補完するだけでなく、隣り合ったフレームから新たなフレームを作り出してフレーム数を増やすことで動きを滑らかに見せて、アップスケールした画質を向上させるソフトウェアも発売されている。このソフトウェアで18コマ/秒の8ミリフィルムを60fpsで再生したデータの作成も今後に検討して行きたいと考えている。

資料

本文に記載されている作品の一部は、YouTubeで視聴することができます。限定公開作品もありますので、URLの取り扱いにはご注意ください。

『スキャナと再撮影の比較』（限定公開）

<https://youtu.be/eaVICMIWC8s>

本文に記載している2通りの方法でデータ化した映像から1フレームをスクリーンショットで静止画映像化して比較したもの。



『BRAIN WARS』

<https://www.youtube.com/watch?v=TC-g0tdRIgM>

DVCテープをDVD化し、そのDVDをPS3で再生してアップコンバートしたりマスター作品。



大学生と読書

—読書環境の変化5—

University Students and Reading :

Changes in Reading Environment Part 5

吉田 昭子

YOSHIDA Akiko

要旨

文化庁の「国語に関する世論調査」令和5年版が公表され、全世代での読書離れが急速に進んでいることが新聞記事等で話題になっている。読書離れの現状はどのようになっているのか。「国語に関する世論調査」の不読率、読書量、読む本の選び方、電子書籍の利用に関する経年変化を確認した。読書を支援する図書館に注目し、読書離れが進んでいるとされる大学生がどのような図書館に興味や関心を持っているのか。司書課程を受講している学生を対象として、インターネット上の人気ランキングの上位に位置する図書館を手掛かりに、その図書館に興味を持った理由や評価の観点についてたずねた。その結果、大学生は図書館の規模や蔵書数だけではなく、館内の雰囲気、実施されているサービスやイベントなど、多様な点に関心を持っていることが判明した。建物の外観や設備の美しさに加えて、長時間過ごす際の空間としての心地よさを求めている。カフェやインターネット、パソコン等が使える場所だけではなく、体験型のイベントの実施や図書館以外の機関との連携による催しの開催等、より幅広い双方向性の交流の機会や出会いの場、空間の提供を期待していることが明らかになった。

●キーワード：読書 (reading) / 大学生 (university students) / 図書館 (library)

I. はじめに

文化庁の令和5年度「国語に関する世論調査」の調査結果(2024年9月公表)¹⁾に基づき、月に1冊も本を読まない人が6割を超え、全世代で読書離れが急速に進んでいることが『読売新聞』社説に取り上げられた²⁾。スマートフォンに多くの時間を割く毎日でよいのか、社会全体で考えなければならない時期であるという問題が提起された。

『朝日新聞』(2024年10月16日朝刊)「声」の欄には、「新聞を読んだことがなかった私」³⁾と題した記事が投稿されている。筆者は30歳を超えるまで新聞を読んだことがなく、活字が苦手だったという。「声」の欄を読むことをきっかけに新聞に興味を持つようになった。新聞の方がスマホのニュースサイトより考えさせられることが多く、読むだけではなく自分でも投稿してみたいと考えるようになったとしている。ニュースはテレビやネットでも見られるし、特に不便を感じてはいなかったが、新聞を少しずつ読むことで苦手だった活字を読むことを少しずつ克服していった経緯について述べている。

各種の調査やアンケートで読書離れが増加しているとされる中で、デジタル技術化の進展で全体の環境自体が変わっており、読書離れは昔から存在し、小中学生の書籍の読書量は増加しているという指摘等も見られる⁴⁾。

読書離れの実情はどのようになっているのだろうか。本稿ではまず「国語に関する世論調査」令和5年版を基に近年の読書をめぐる変化をとりあげる。次に読書を支援する機関としての図書館に注目し、近年様々な特色のある図書館が開館する中で、大学生はどのような図書館、のどのような点に関心を持つのだろうか。インターネット上の図書館ランキングを素材に大学生は具体的にどのような図書館に関心を示し、利用してみたいと考えるのかを調査し、その傾向を考察する。

II. 国語に関する世論調査にみる読書状況

2.1 不読率の変化

令和5年度の「国語に関する世論調査」は、令和6年1月から3月、全国の16歳以上の個人6,000人(有効回答数3,559人)を対象として郵送法で実施された。読書に関

する調査は過去に4回（平成14、20、25、30年度）行われた。過去4回の調査は、5年ごとに実施されてきた。不読率（1か月間に雑誌、漫画を除いた電子書籍を含めた本を1冊も読まないと回答した比率）に関する結果は、第1表のとおりである。

不読率は、令和5年度では60%を超えているが、過去4回の調査（平成14年度～30年度）では40%後半を示している。令和5年度と平成14年度では、1冊も読まないと回答した比率は2倍に達している。しかし、令和5年度調査は郵送法、過去4回の調査は個別面接調査方式で実施され、調査実施方法が異なる。そのため、過去の調査の数値は参考値として提示されている。第1表の令和5年度の結果が、平成30年よりも高い数値を示していることには実施方法の変化の影響も考えられる。

そこで、別の調査と比較してみる必要がある。全国大学生生活協同組合連合会が大学生の行動を調査した「学生生活実態調査」の結果の読書時間ゼロの学生の比率をみると、第2表のようになる。平成25年度には40%の達し、令和5年度は47.4%となっている。不読率は45から50%の間で推移し大きな変化は見られず、「国語に関する世論調査」に見られるような大きな変化は実際におきていないと考えられる。

第1表 国語に関する世論調査の不読率（単位%）

年度	平成14	平成20	平成25	平成30	令和5
読まない	37.6	46.1	47.5	47.3	62.6
読んだ（1冊以上）	61.1	53.4	52.3	52.6	36.9

第2表 大学生の読書時間ゼロの比率（単位%）

年度	平成20	平成25	平成30	令和5
読書時間ゼロ割合	34.5	40.5	48.0	47.4

2.2 読書量の変化

読書量について、令和5年度調査で「減っている」と解答したのは、69.1%、「変わっていない」が24.5%、「増えた」が5.5%である。つまり、7割の人は読書量は以前に比べて減ったと感じているのである。過去の結果（平成20、25、30年度）の読書量をみても、60%後半の数値を示しており、読書が減ったと考えている人は、年々増加していることが確認できる。

読書量が減っている理由については、①情報機器（携帯電話、スマートフォン等）で時間がとられる、②仕事や勉強が忙しくて読む時間がない、③視力など健康上の理由、④テレビの方が魅力的である、⑤読書の必要性を

感じない、⑥魅力的な本が減っている、⑦近所に本屋や図書館がない、⑧良い本の選び方がわからない、⑨読みたい本が電子書籍でしか読めない、⑩学校での読書指導が十分でない等がある。①から⑩の減少理由の推移について、年齢別に分けて全体で多い順に示したのが第3表である。

第3表 年齢別 読書量の減少理由（単位%）

	全体	16～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
①	43.6	70.9	67.3	60.7	59.4	51.8	42.8	18.3
②	38.9	56.4	63.3	67.2	61.3	48	28.1	13
③	31.2	1.8	2	1.6	7.7	27.5	41.9	56.9
④	19.8	7.3	6.8	7	7.2	8.8	24.4	38
⑤	8.5	12.7	9.5	5.7	6.4	7.2	8.6	10.6
⑥	7.7	1.8	6.1	6.6	5.8	7.4	9.7	8.7
⑦	6	3.6	4.8	5.3	3.4	5	6	8.5
⑧	4.6	5.5	8.2	7	5.3	2.9	5	3.3
⑨	0.6	—	0.7	0.8	0.3	0.7	—	1.1
⑩	0.2	5.5	—	0.4	—	—	—	0.3

①の「情報機器（携帯電話、スマートフォン等）で時間がとられる」は、16～19歳、20歳代、50歳代、60歳代でも最も多くを占め、多くの世代の読書量減少の理由になっていることがわかる。一方、30歳代、40歳代で最も多くを占めるのは、②の「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」である。

③の「視力などの健康上の理由」は70歳代で最も多い。健康上の理由は50歳代から増加する傾向にあり、④のテレビの方が魅力的であるも、50歳代から増加する。各年代によって頻繁に使用する媒体や方法はそれぞれ異なることを示している。

2.3 読む本の選び方

令和5年度の世論調査では、1か月に1冊以上読んでいると答えた人（36.9%）に対して、自分が読む本をどのような方法で選んでいるかをたずねている。2つまで選択可に設定して調査し、次のような結果が得られた。

回答数が多い順に、①書店で実際に手に取って選ぶ、②インターネットの情報を利用して選ぶ、③図書館や図書室で実際に手に取って選ぶ、④広告を参考にする、⑤友人や知人、家族などから勧められたものを選ぶ、⑥信頼できそうな書評を参考にする、⑦既に家にある本の中から選ぶ、⑧ベストセラーなど人気のある本を選ぶ等があげられた。過去の調査結果は、第4表のとおりである。

この中は直接手に取って選ぶ方法（①、③）と本に関

するなんらかの情報や評価をもとに選ぶ方法（②、④、⑤、⑥、⑧）に分けられる。①の書店で手に取って選ぶ方法は、年々減少傾向を示している。その一方で、②のインターネット情報の利用は、増加傾向を示している。なお、平成20年度の調査に「インターネット情報の利用」は選択肢としてあげられていないため、データはない。

注目すべきは、③図書館や図書室で実際に手に取って選ぶ方法である。同じように手に取って比較できる手段である①書店で選ぶ方法が減少しているのに対して、③図書館や図書室で実際に手に取って選ぶ方法は、平成30年度よりも令和5年度が増加傾向を示している。

第4表 読む本の選び方（単位％）

	平成20	平成25	平成30	令和5
①	74.0	68.9	66.7	57.9
②	選択肢になし	23.6	27.9	33.4
③	23.0	23.6	21.6	25.0
④	19.0	15.9	15.4	14.7
⑤	20.6	17.3	18.2	11.8
⑥	13.6	9.2	9.0	10.7
⑦	6.7	5.7	4.9	10.7
⑧	12.3	9.6	10.4	9.7

2.4 電子書籍の利用

雑誌や漫画を含む電子書籍をどの程度利用するかという質問に設定された4つの選択肢（①よく利用する、②たまに利用する、③紙の本・雑誌・漫画しか読まない、④紙の本・雑誌・漫画も電子書籍も読まない）に対する回答結果は第5表のとおりである。令和5年度調査で①と②をあわせた利用する人の合計は40.3%に達している。平成25年度調査結果に比べると増加していることが確認できる。

年齢別にみた電子書籍の利用状況が第5表である。40歳代以下では、5割以上が利用する（①+②の合計）と回答している。一方、60歳代以上は③「紙の本・雑誌・漫画しか読まない」と回答している比率が5割近くを占めている。

第5表 年齢別 電子書籍の利用（単位％）

年度	全体	16～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
①	15.0	25.3	27.9	37.1	23.4	14.4	6.7	3.1
②	25.3	27.7	37.2	35.3	36.9	29.4	19.8	12.3
③	38.2	26.5	19.8	16.1	29.4	37.8	49.4	52.5
④	20.6	19.3	15.1	11.6	19.8	17.7	23.6	30.0
①+②	40.3	53.0	65.1	72.4	60.3	43.8	26.5	15.4

電子書籍と紙の本でどちらを多く利用するかという質問に対しては、第6表のように答えている。選択肢は次の4つ、①電子書籍しか読まない、②電子書籍の方が多い、③同じくらい、④紙の本・雑誌漫画の方が多いである。

「電子書籍しか読まない」と「電子書籍の方が多い」をあわせる（①+②の合計）と、全体では5割近くの人が電子書籍を利用していることになる。年齢別にみると60歳以上は紙の本・雑誌・漫画を利用しており、約3割から4割を占めている。60歳代以上では紙媒体での利用に対する需要が依然として多いことを示している。

第6表 電子書籍と紙の本でどちらを多く利用するか（単位％）

年度	全体	16～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
①	7.9	11.4	10.7	8.0	8.3	7.6	6.9	4.7
②	40.5	34.1	45.2	51.3	38.5	41.5	35.1	26.7
③	21.4	29.5	20.8	15.3	25.9	21.3	20.1	22.0
④	29.5	22.7	22.6	25.5	26.7	29.6	36.8	44.7
①+②	48.4	45.5	55.9	59.3	46.8	49.1	42.0	31.4

2.5 読書環境の変化と図書館

2.1から2.4まで、令和5年度の「国語に関する世論調査」結果に基づいて、読書環境の変化を見てきた。その結果、次のようなことが判明した。令和5年度の世論調査で指摘された1か月に1冊も本を読まない不読者の急増については、同時期に実施された「学生生活実態調査」の結果の読書時間ゼロの学生の変化とあわせて考えると、調査方法の変更による影響を受けて大幅に増加しているものと考えられる。

読書量の減少は、70歳代を除いて情報機器（携帯電話、スマートフォン等）で時間がとられていることが主な原因としてあげられる。70歳以上は、視力の低下等の健康上の理由が読書量の減少の要因となっている。

読む本を選ぶ方法については、実際に本を手に取って見られる方法である書店に行くことと答えた人は減少している。しかし、図書館や図書室を利用するという回答は減少してはならず、むしろ増加している。信頼できる書評や家族や知人が勧める本を選ぶ人も見られ、本を選ぶ際に自分以外の信頼できる情報を求めていると考えられる。

実際に電子書籍を利用すると答えた人の割合は5割程

度を占めており、電子書籍の利用は確実に増加傾向を示している。20歳代から40歳代は6割以上が電子書籍を利用していることになる。しかし、16歳から19歳、50歳以上の電子書籍の利用は4割以下にとどまる。日常的に信頼できる情報を収集・利用するためには何らかの支援を行う必要があると考えられる。

こうした信頼できる読書環境の整備、利用者の支援という観点からみると、情報利用や提供に図書館が果たすことができる役割は大きなものがある。利用者はどのような図書館に関心や興味を持っているのか。次にインターネット上の図書館ランキングを手がかりに図書館への関心、興味について具体的に調査してみた。

Ⅲ. どんな図書館を求めているか

3.1 インターネット上の図書館ランキング

インターネット上には多くのおすすめの図書館紹介、ランキング掲載されている。図書館の建物、建築に注目した図書館ランキング、旅行に行った際に訪れたい図書館、人気の図書館など、さまざまな分野で評価が行われている。

「図書館ナビ」(<http://www.tosyokan-navi.com/>)は全国の図書館を図書館設備で検索することができる⁵⁾。1900館弱の図書館を検索でき、ランキングの結果を人気順、蔵書数順、閲覧席順に切り替えられる。また、都道府県別一覧から各県の図書館を検索することができる。

たとえば、大阪市立中央図書館をクリックすると、自習室、PC持ち込み、電源使用、Wifi使用、コインロッカー、レストラン、カフェの項目に利用可能なものには○、利用不可のものには×がつけられている。各図書館の「自由室の情報共有のお願い」が掲載され、サイトの閲覧者が自分のコメント等を投稿できる。開館時間、休館日、交通・アクセス、持ち込みPC使用や飲食に関する情報等が掲載され、貸出の登録条件等も掲載されている。

旅行関係のじゃらんニュースの「おすすめのおしゃれな図書館17選！カフェやアートな空間も楽しめる」(<https://www.jalan.net/news/article/393515/>)

では、建築家が設計した図書館やカフェを併設している図書館など、多様な施設が写真入りで紹介されている⁶⁾。

3.2 大学生が関心を持った図書館

大学生が利用者として図書館を見る際に、どのような図書館に関心を持つのだろうか。授業の中で、筆者が担当している図書館司書課程の学生18名にたずねた。

旅行関係サイト「日本人気の図書館ランキングTOP30」⁷⁾ (<https://recotripp.com/area/country-1/small-36/>)のうち、1位から10位にあげられた図書館(第7表)について、該当する各図書館のHPを見て、3館を選び、その図書館に関心を持った理由についてたずねた。

第7表 人気の図書館ランキングトップ10

順位	図書館名	地域
1	石川県立図書館	石川県
2	武雄市図書館	佐賀県
3	富山市立図書館本館(TOYAMAキラリ内)	富山県
4	多賀城市立図書館	宮城県
5	梶原(ゆすはら)町立図書館(雲の上の図書館)	高知県
6	こども本の森 中之島	大阪府
7	和歌山市民図書館	和歌山県
8	京都府立図書館	京都府
9	くめがわ電車図書館	東京都
10	男木島(おぎじま)図書館	香川県

3.3 大学生が興味関心を持った理由

大学生が取り上げた人数の多い順に配列したのが、第8表である。

第8表 大学生が興味関心を持った図書館

順位	図書館名	関心を持った学生数	比率(18人×3票)	ランキングの順位
1	石川県立図書館	9	16.7%	1
2	武雄市図書館	8	14.8%	2
3	京都府立図書館	7	13.0%	8
	くめがわ電車図書館	7	13.0%	9
5	多賀城市立図書館	5	9.3%	4
	梶原町立図書館	5	9.3%	5
	こども本の森 中之島	5	9.3%	6
8	富山市立図書館本館	4	7.4%	3
9	男木島図書館	2	3.7%	10
10	和歌山市民図書館	1	1.9%	7

大学生がそれぞれの図書館に、興味や関心をそそられた理由は以下のような点である。

○1位 石川県立図書館

- ・木で作られていてあたたかみがある図書館。
- ・ドーム型の施設に興味を持った。
- ・図書館の敷地内にブックリウムという本の集まりを宇宙に見立てたデジタルアートがある。体験スペース、食事のできるスペースなども用意されている。
- ・3Dプリンターやレーザーカッターなどのデジタル機器

が豊富な点が魅力的である。

- ・HPの内容も魅力的で行きたくするような図書館である。
- ・イベントや企画・展示が特に豊富で体験型で目を引くものが多く、興味をそそる。
- ・閲覧席だけではなく開放的なスペースや展示形式のコレクションなど、様々なエリアがある。
- ・2022年に開館した、SNSでも人気のスポットで以前から行ってみたいと思っていた図書館。
- ・美しく、子どものコーナーが充実していて、家族連れやカップルにも人気がありそうで行ってみたいと思った。

○2位 武雄市図書館

- ・シックで落ち着いた空間でゆったりとした雰囲気です本を読むことができそうな図書館。
- ・スターバックスがついていて、息抜きができる場所が用意されている。
- ・本の置き方も手にとってみたいという読書欲がわく。
- ・ipadの貸出、無料のwifiなどのサービスがある。
- ・セルフ貸出などの仕組みが整っている。
- ・TSUTAYAと提携しており、そのまま本を購入できる。
- ・日本国内に居住している人はだれでも本を借りられるという取組。
- ・国内全ての人をターゲットにしているため、返却問題については宅配返却サービスを利用して解決している。
- ・ヨガやレファレンス体験、映画上映会などの大人をターゲットにしたものがあって興味をそそる。
- ・インターネットを利用して実物の本を借りられる仕組みが実現されている。
- ・フェアも行っており、特集のような形で本を探すことができる。説明が物語の導入のように書かれていて、読書の世界観を壊さなくてよい。
- ・フリーマーケット等のイベントが行われている。
- ・混雑していることが多いようだが、HPで混雑状況をリアルタイムで紹介している点が良い。

○3位 京都府立図書館

- ・文化財の建物が素晴らしい。日本初の公立図書館を源流としており、歴史ある図書館で雰囲気がよい。
- ・館内はSNS撮影禁止とあるので、静かな空間を楽しめそうな図書館。
- ・館内の色合いが落ち着いた雰囲気で読書や探し物に便利だと思う。ホームページがシンプル見やすい。

- ・外観や館内の設備が旧館時代のものが残されていて、館内歩きも楽しめそう。
- ・大きく、光の入る窓が印象的で魅力的で美しい。
- ・京都ならではの文化や歴史、観光についての多くの資料があり、近くに京セラ美術館があるなど、芸術系の資料がたくさんありそうな図書館。
- ・利用者向けのイベントも用意されているが、さらに京都らしいイベントがあるともっとよいと思う。

○3位 くめがわ電車図書館

- ・車内にそのまま本棚があり、車内の椅子に座ることができる。
- ・見た目がかわいく、子どもが喜んで使って、わくわくしそうな設備である。
- ・非日常感が魅力的な図書館。
- ・引退した車両を買い取って開館しており、鉄道ファンの人々と地域の人々が協力して維持管理している点が良いし、話題性にも富んでいる。
- ・窓の大きな電車は広くはなくても窮屈さは感じさせないし、防犯面でもよいのではないかな。
- ・公式ツイッターで情報発信をしているが、市のHPに記載がないようで、気づくことが難しい。

○5位 多賀城市立図書館

- ・駅から徒歩1分という立地条件に興味がある。
- ・開館時間が長く、仕事帰りや夜の落ち着いた時間帯に行くことができる。
- ・図書館だけではなく、カフェや学習スペースもあるので、1日中楽しく過ごすことができそうな施設。
- ・壁一面に書架が並んでいて迫力がある設備。
- ・モダン、おしゃれで落ち着いた雰囲気がある図書館。
- ・フリーwifi等の設備が用意され、パソコンを持ち込んで作業ができる。

○5位 梶原町立図書館

- ・内装に木のあたたかみが感じられる。図書館内にジオラマが設定されているのがよい。
- ・世代をこえて交流することを目的としたコミュニケーションラウンジ、サイレントゾーンである閲覧コーナー、気軽な会話が楽しめる井戸端エリアなど、状況によって利用する場所を使い分けられる仕組みがよい。
- ・ボルダリングコーナーがあるのも魅力的である。
- ・「雲の上の図書館」という名前が印象的。

・標高の高いところに位置して自然に囲まれた開放感がある図書館。

・よい意味で図書館らしくないおしゃれな空間で、一人でひっそり本を読みたい図書館。

○5位 こどもの本の森 中之島

- ・自然の中、公園で本が読める空間がよい。
- ・事前予約制で、管理が行き届いている。一方で誰でも公平なサービスを提供するという点も考える必要があるのではないか。
- ・ベビーシートなどが用意され、幅広く対象を設定している。
- ・本がたくさんあり、全体的にきれいな印象の図書館。
- ・図書館のオリジナルグッズを用意している。
- ・子どもたちがメインで本に触れあえる図書館で、親にとっても魅力的。
- ・大人のための特別開館イベントも用意されているので、行ってみたい。
- ・事前予約制の導入など施設管理が行き届いている。
- ・イベントはワークショップ、親子向けのものや読み聞かせといった子どもメインのものだけではなく、子育て相談室なども用意されている。

○8位 富山市立図書館

- ・富山市ガラス美術館との併設の複合施設。建物が解放感とあたたかみがある施設。公共施設のかたくるしい雰囲気から抜け出したおしゃれな空間である。
- ・カフェやガラスギャラリーもあり、1日中いても飽きない工夫が見られる空間。
- ・観光地としての賑わい、地域の活性化にも役立っている図書館。
- ・以前、ラジオでこの図書館の話を聞いたことがあるが、併設されている美術館も美しく、行ってみたい。
- ・図書館を普段日常的に使う利用者と観光客がそれぞれ分かれて利用できるような施設づくりが行われている。

○9位 男木島図書館

- ・島民が作った民営の施設、雰囲気がある。
- ・寄付やボランティアで運営され、無料で利用できるなど、運営面での工夫がある。

○10位 和歌山市民図書館

- ・駅から近く、アクセスがよいので、気軽に立ち寄るこ

とができそうな図書館。特産品を置いてあったり、屋上に行ってくつろぐことが出来たりする点が魅力的である。

IV 大学生の図書館に対する興味や関心

「日本人気の図書館ランキングTOP30」に選ばれた図書館の上位10位までを素材に、各図書館のHPや関連するページを見て、興味を持った図書館について考えるというプロセスで実施した。その結果、3.3の大学生が興味関心を持った理由から見ると、大学生は、図書館の建物や設備、雰囲気、実施されているサービスなど多様な点に関心を持っていることが明らかになった。

図書館建築については、その形状だけではなく館内の色調、建物の美しさ、木を基調にした建物の雰囲気など居心地の良さに注目している。図書館を単なる建物ではなく、長時間過ごすための空間としてとらえている。立地条件、駅からのアクセスなど、日常生活の一部として図書館を利用する際の利便性に対する関心が高い。その自然の中に位置して開放的でくつろげる雰囲気について魅力的と感じたという感想も多い。図書館内にカフェや複合施設のギャラリーがあり、周辺にある施設の利便性等に対する重要性を指摘する意見もあった。

セキュリティに関する配慮について触れている感想も見られた。特に子どもを対象とした図書館では、事前予約制など、子どもの安全を確保することの必要性に対する指摘もあげられた。大人も子どもも、誰でも利用できる公平なサービスを提供する公共図書館にとって、安全安心なサービスの提供は切実な問題である。

図書館設備の点では、無料のwifi環境の提供の有無などがあげられている。パソコン利用、電源の使用等、図書館内の資料だけではなくインターネットやパソコンを利用した作業を行うための場所としての機能を重視している。また、インターネットを利用した図書館の貸出サービスについての関心も高い。図書館の利用を国内全ての人を対象にしていることや実物の宅配返却サービスの導入等に対する意見も見られた。

図書館のサービスを見るポイントとして、多くの学生がイベントの実施をあげている。図書館による体験型イベント、地域交流型のイベント、親子連れで楽しめる催しの実施をあげている。図書館以外の機関との連携によるイベントの開催など、より幅広い双方向性の交流の機会や場を提供している点を評価していることがわかる。

図書館PRについては、図書館のHPがわかりやすく提供されていること、色調や読みやすさなどに配慮する

ことの必要性についての意見が多い。PRの観点では「雲の上の図書館」などの表現のように、堅苦しくないおしゃれでわかりやすい表現を使うことの重要性を指摘している意見が多い。

IV おわりに

今回は「国語に関する世論調査」令和5年版を基に読書をめぐる近年の状況の変化を確認するとともに、特に読書を支援する機関としての図書館に注目した。

次に「日本人気の図書館ランキングTOP30」の1位から10位までを対象に大学生の図書館に対する興味や評価の観点について具体的な調査を行った。その結果、大学生が図書館を評価する視点が建物や蔵書冊数などの規模だけにとどまらず広範囲に及んでいること、長時間滞在しても居心地のよい雰囲気、くつろぎや双方向性の交流の場や空間の提供など、図書館に寄せる関心や期待が大きいことが明らかになった。

「日本人気の図書館ランキングTOP30」の12位にあげられている飛騨市図書館について、学生から次のような指摘があった。図書館が行った、SNSに投稿するための写真撮影や利用に対する利用者への注意喚起や配慮に関するものである。

飛騨市図書館は、アニメ映画『君の名は』の舞台になった図書館として知られている図書館である。アニメファンの中では観光目的で注目をあび、多くの利用者が訪れている。アニメの聖地巡礼として来館する観光客に対して、「聖地巡礼の皆様へ」と題して写真撮影に関する次のような注意点が示された。

図書館内で写真撮影をしたい場合は、カウンターに許可申請を行うこと、利用者の顔が識別できるような写真は撮らないこと、市民の利用の妨げにならないように注意すること等を内容とする説明である。そして、その際の図書館が行った柔軟な対応がSNSで話題になっている。来館者に対する図書館の対応がその評価をさらに高めている点で興味深いという事例とすることができる。

図書館に関する利用者の関心を喚起し、読書に対する関心を高めるには、図書館をめぐる状況の変化に対して、常にアンテナを張り、敏感かつ迅速に対応することが求められる。この事例は、それだけではなく、図書館が双方向性の柔軟な対応を心掛ける必要があることを示しているということができるのではないだろうか。

注・参考文献

- 1) 文化庁. 令和5年度「国語に関する世論調査」の結果について. https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/94111701.html (参照2024-10-18)
- 2) 岩崎裕貴. (声) 新聞を読んだことがなかった私. (『朝日新聞』2024年10月16日朝刊)
- 3) [社説] 国語世論調査 読書習慣の喪失は危機的だ. 読売新聞オンライン. <https://www.yomiuri.co.jp/editorial/20240918-OYT1T50005/> (参照2024-10-18)
- 4) 飯田一文. 「若者の読書離れ」はウソ、しつこいレタテルの裏に“一部の大人”の勝手な失望?. ダイヤモンドオンライン. <https://diamond.jp/articles/-/327931> (参照2024-10-18)
- 5) 図書館ナビ. <http://www.tosyokan-navi.com/> (参照2024-10-18)
- 6) おすすめのおしゃれな図書館17選! カフェやアートな空間も楽しめる. じゃらんニュース. <https://www.jalan.net/news/article/393515/> (参照2024-10-18)
- 7) 日本人気の図書館ランキングTOP30. <https://recotripp.com/area/country-1/small-36> (参照2024-10-18)

文化学園大学「学生生活調査」における喫煙率・喫煙者数の男女別分析

Analysis of Student Smokers' Gender Statistics Based on the Student Life Survey
Conducted by Bunka Gakuen University

杉田 秀二郎
SUGITA Shujiro

要旨

文化学園大学では「学生生活調査」を実施し、その中で喫煙の有無を聞いて学部ごとの喫煙率を示しているが男女別では示されておらず、また喫煙者の実数も示されていない。そこで、学生課および学生支援委員会の協力を得て、喫煙の有無に関連して改めて分析（二次分析）を行ったので報告することとした。その結果、学年別では2年次から3年次にかけて喫煙率が2倍の18.8%になっていた。学科別では、ファッション社会学科、ファッションクリエイション学科、国際ファッション文化学科のファッション系の喫煙率が男女ともに高かったが、他の学科も20代の平均喫煙率より高かった。喫煙者数は、喫煙率だけでなく学科の在籍者数によって異なってくるが、1学科につき100名前後と多いのがファッションクリエイション学科、ファッション社会学科であり、40名前後が建築・インテリア学科、デザイン・造形学科、国際ファッション文化学科であった。

●キーワード：学生生活調査 (student life survey) / 喫煙 (smoking or vaping) /
学年別・男女別分析 (analysis of students' gender and grades statistics)

1. はじめに

文化学園大学では「学生生活調査」を実施し、その中で喫煙の有無を聞いて学部ごとの喫煙率を示している（学生支援委員会，2016・2019・2023）。しかし、喫煙率は男女で異なるのが通常であるのに対して男女別では示されておらず、また喫煙者の実数も報告書上では示されていない（厳密に言えば、回答者数は記載されているので大学全体や学部については実数を算出することはできる。ただし男女や学科ごとの実数は不明である）。

そこで、学生課および学生支援委員会の協力を得て喫煙の有無に関連して改めて分析（二次分析）を行ったのでここに報告する。

2. 「学生生活調査」について

- (1) 「学生生活調査」の調査対象：文化学園大学の2年次以上の全学生（大学院生を除く）を対象に、4月初旬のオリエンテーション時のクラス集会等で担任・副担任を通じて実施している。
- (2) 今回の分析対象：文化学園大学のホームページに報

告書が掲載されている以下3年分。

「第17回学生生活調査」(2016)

「第18回学生生活調査」(2019)

「第19回学生生活調査」(2023)

（3年ごとに実施するが、2022年分は新型コロナウイルスの感染拡大の影響により1年延期し、2023年に実施）

3. 「学生生活調査結果報告書」による概要

- (1) 調査年度による喫煙率の比較（同報告書を参照）

学生生活調査は同じ対象を継続して追った縦断調査ではなく横断調査であるため、時系列的な変化ではなくそれぞれの時点での喫煙率の比較となる。

その上で2016・2019・2023の3年分を比較すると、2016年と2019年とでは3学部とも大きな違いはなく13～16%程度である。しかし服装学部では2019年の15.5%から2023年では20.7%となり、5.2ポイント増えている。

- (2) 学部別の比較（同報告書を参照）

上記(1)とも重なるが、2016年・2019年は3学部とも大きな差はなく13～16%程度である。しかし2023年では

造形学部と国際文化学部がともに13.1%であるのに対して服装学部では20.7%であった。

大学全体として、2019年に喫煙率は1.1ポイント下がったが、2023年に3.0ポイント上がり、やや上がった状況になった。

なおこれらの調査年とタバコに関する学園の対策とを時系列に並べると、以下の通りとなる。

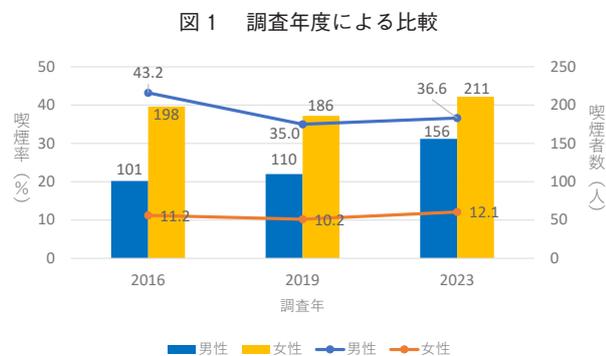
- 2016. 4. 第17回学生生活調査
- 2018. 1. 受動喫煙ゼロキャンパス宣言
- 2019. 4. 第18回学生生活調査
- 2021. 4. 学園敷地内全面禁煙（喫煙所撤去）
- 2022. 9. 喫煙所再設置
- 2023. 4. 第19回学生生活調査

4. 本研究での結果および考察

二次分析では、SPSS Ver.28により性・学科・学年と喫煙経験の有無のクロス集計を行い、属性別の喫煙率および喫煙者数を示した。

(1) 性別の喫煙率・喫煙者数（図1）

直近の2023年では大学全体で16.8%（372名）のうち、男性36.6%（156名）、女性12.1%（211名）であった。



(2) 学年別の喫煙率・喫煙者数の比較（学科・男女等込）（2023年）

2年次に喫煙率9.2%（喫煙者数68名）に対して、3年次に同18.8%（同139名）、4年次に同22.6%（同165名）となっており、2年次から3年次にかけて文字通り倍増している（図2）。この理由として、他の大学等でも同様かもしれないが、2年次の4月初めの時点では20歳になっている学生は少ないと考えられるのに対して、3年次は全員20歳になっており、法律上も喫煙可能となったからと考えられる。なお2023年時点の横断調査であり、縦断調査ではない。ただ、おそらくこのような経過をたどる

であろうと考えられる。（なお1年生の喫煙率は明らかになっていないが、参考として2023年度前期において1年生を対象としたある授業の喫煙率は6.7%であった（杉田, 2023）。）

図2 学年別の喫煙率・喫煙者数（2023）



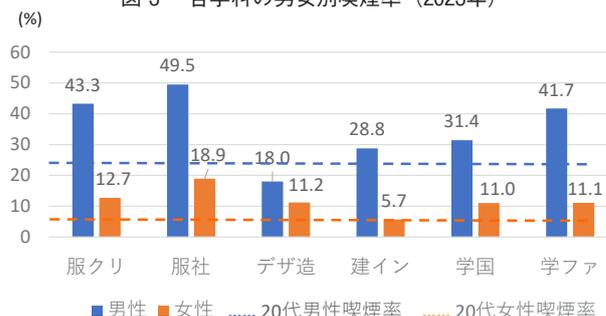
(3) 学科による男女別の喫煙率および喫煙者数

「学生生活調査結果報告書」では学部別に喫煙率が示されているが、学科別では示されていないので、それを示す。（「学生生活調査結果報告書」では他に大学全体と留学生という分類でも示されているが、ここでは学科のみ示す。また2016年・2019年は応用健康心理学科および短期大学部も対象となっているが、2023年分に対応させるためにここでは割愛する。また、2019年の調査からは性別の質問で男性・女性以外の選択肢も示されているが、男性・女性以外の回答数が少なく他との比較が難しいため、この男女別の集計には含まれていない。）

①喫煙率（図3）

喫煙率はどの学科でも男女で差があり、3年分とも男性のほうが高い。男性は最も高いのが2016年服装社会学科（2019年以降はファッション社会学科。以下、服社）で60%近く、低い場合は2023年デザイン・造形学科（以下、デザ造）の18.0%。女性では高いのが2023年の服社18.9%、低いのが同年の建築・インテリア学科（以下、建イン）5.7%である。

図3 各学科の男女別喫煙率（2023年）



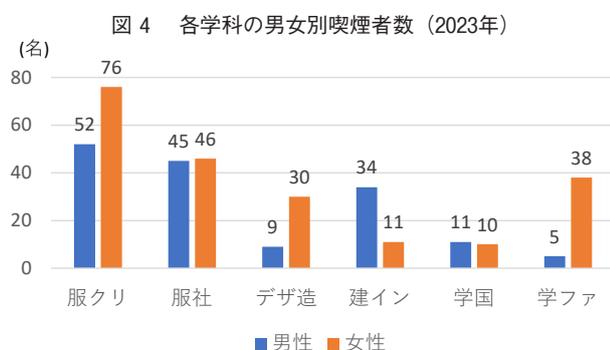
喫煙率に標準値はないが、多くが20代の平均喫煙率より高い。なおこの20代というのは厚生労働省（2019年：男性25.5%・女性7.6%）・JT（日本たばこ産業）（2018年：男性23.3%・女性6.6%）の調査によるものであるが、20～29歳まで含んでいる。それに対して学生生活調査では20～22歳を大多数とした調査であるため、一般的には学生生活調査のほうの喫煙率が低くなるはずである。

②喫煙者数（図4）

まず大学全体（2～4年の3学年分）の調査回答者における喫煙者数であるが、年度順に299名・301名・372名となり、2016年と2019年は約300名でほぼ変わらないが、2023年には約70名増加している。（これは回答者における喫煙者数である。調査自体への未回答者は10%前後であり、喫煙率がほぼ変わらないと仮定すると、未回答者数×喫煙率をこの喫煙者数に足した数が、実際の数に近いと考えられる。）

次に、喫煙率はどの学科も男性のほうが女性より高いが、本学ではどの学科でも女子学生の数が多いので、喫煙者数では女子学生のほうが多くなる学科が6学科中4学科ある（3年分とも）。学科により在籍者数は異なるので学科間の比較は一概にはできないが、単純に女子学生の喫煙者数の順にみるとファッションクリエイション学科（2016年まで服装造形学科。以下、服クリ）、服社、国際ファッション文化学科（以下、学ファ）とファッション系が多くなっている。

その他の特徴としては、建インと学国のみ喫煙率に加えて喫煙者数でも男性が多く、特に建インでは男性比率が高い（2023年度で男性の割合が36.7%）ため、このような結果になったと言えよう。



（学科別の喫煙率と喫煙者数を学年と男女に分け、調査年度ごとに付図1-1～6-6として巻末に示した。この付

図どうして比較しやすくするため、すべてのグラフの縦軸を喫煙率では80%、喫煙者数では50人に固定した。なお各学科や各学年の在籍者数が少ない場合には喫煙者が1名増えても喫煙率は大きく変わるため、見方や解釈には注意が必要である。）

5. まとめ

本研究の目的は「学生生活調査」の報告書には示されていない学年別や学科別、男女別の喫煙率・喫煙者数を詳細に示すことであった。その結果、①学年別では2年次から3年次、つまり20歳になると喫煙率・数ともに倍になる。②学科別では、ファッション系の学科の喫煙率が高く、喫煙者数も多い。③男女別では、男性のほうが喫煙率は高いが、男女とも20代の平均喫煙率を上回っている。④喫煙率としては男性のほうが高いが、学科によっては喫煙者数では女性のほうが多い。以上のことがわかった。

本研究は二次分析であるため、ここまでは数値の理由を考察するまでにとどめていたが、最後に若干私見を述べる。

学生の心身の健康のためには、その前に喫煙を開始させない教育が必要であると考えられる。本学の例で言えば喫煙するとしても20歳以降に吸い始める者が多いということになるが、それは法律は守るが健康を重視してのことではないと考えられるため、いずれにせよ学生の心身の健康のためには喫煙を開始させない教育が必要である。

また若年者の喫煙率が下がり受動喫煙防止が言われている世の中の状況において、ファッション系の学科において喫煙率が高く喫煙者数が多いことは当然のことではなく問題として受け止める必要があると考える。特に、本大学の学生に受動喫煙による心身への影響の有無を聞いたところ、あると答えた者が83名中35名で42.2%、198名中104名52.5%（杉田，2024）であった。これらの調査は教養の複数科目で行ったもので学生全体が対象ではないが、全体においてもおよそ半数は影響を受けている（被害がある）のではないかと考えられる。受動喫煙のすべてが学园内とは限らないが、上記の調査では授業中に三次喫煙で心身に影響があったという報告も複数あった。しかもすべてが1年生対象の授業でありかつ喫煙率が6.7～8.8%（杉田，2023：杉田，2024）であることを考えると、学年が上がって喫煙者数が増えればより被害を受ける学生も増えることになるはずである。

このように、本人の健康のためにも禁煙教育は必要であるが、それだけではなく影響を受ける者が少なからずいる一方で、学園全体としても大学としても喫煙者が多くいるために非喫煙者ががまんしたり声を挙げにくかったりという環境になっていないか、点検が必要ではないかと考えられる。

引用文献

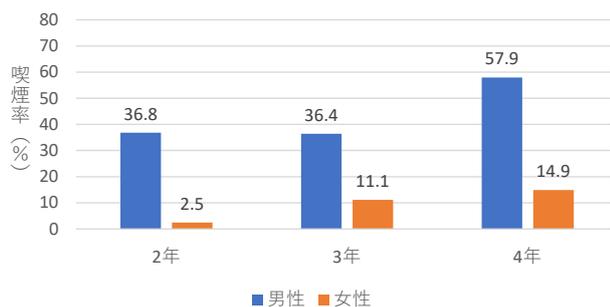
学生支援委員会 文化学園大学学生生活調査
(<https://bwu.bunka.ac.jp/outline/jiheer.php#tab2>)
(「2016学生生活調査結果報告書」「2019 同 」「2023 同 」)
杉田秀二郎 (2023) ある教養科目履修者を対象とした、たばこに関する意識調査について 文化学園大学紀要第55集, 55-62.
杉田秀二郎 (2024) 教養科目「健康心理学」における禁煙教育 2024年度文化学園大学学内研究発表・交流会要旨集, 25-26.

(本研究ノートの一部は、2024年度文化学園大学学内研究発表・交流会にて研究報告として発表した。)

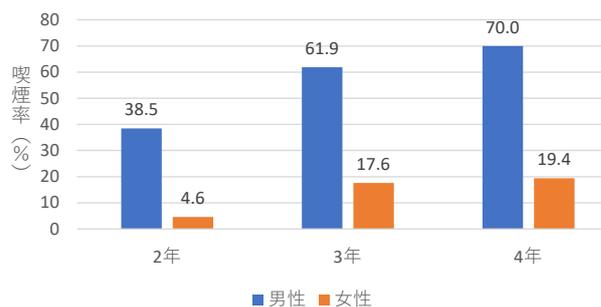
謝辞

本発表にあたり、学生支援委員会および学生課に多くのご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を記します。

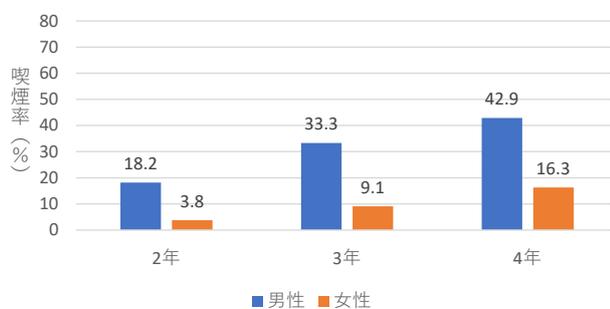
付図1-1 学年別喫煙率（2016服造）



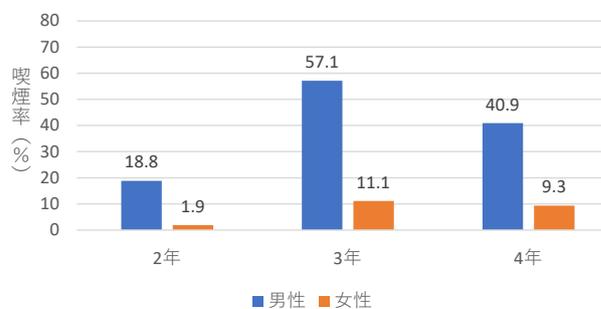
付図1-2 学年別喫煙率（2016服社）



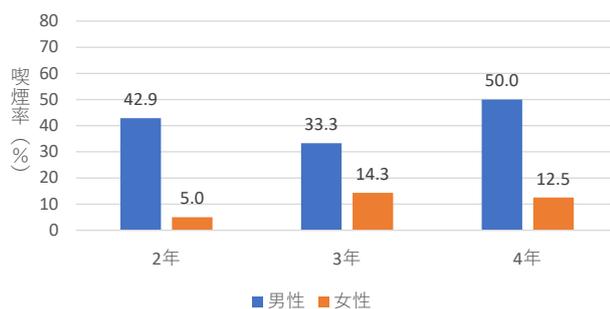
付図1-3 学年別喫煙率（2016デザ造）



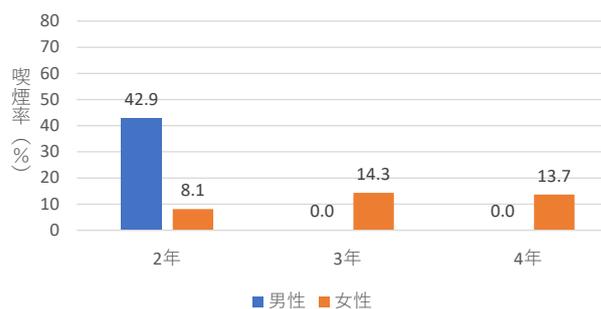
付図1-4 学年別喫煙率（2016建イン）



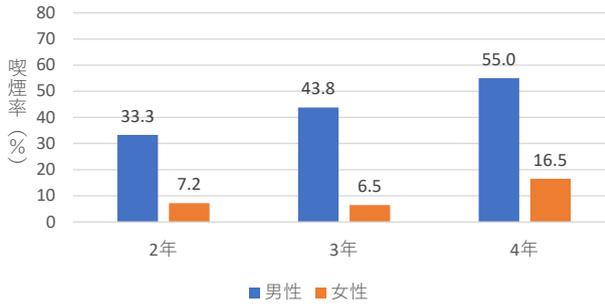
付図1-5 学年別喫煙率（2016学国）



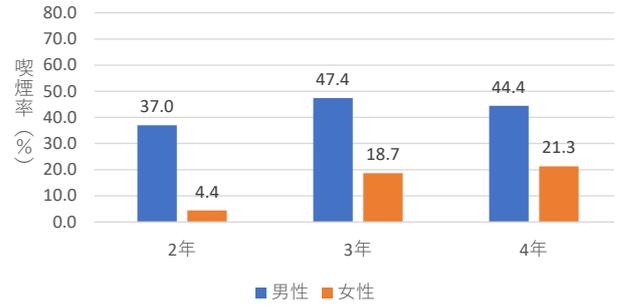
付図1-6 学年別喫煙率（2016学ファ）



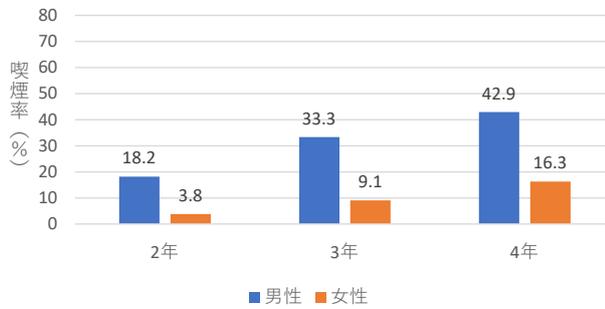
付図2-1 学年別喫煙率（2019服クリ）



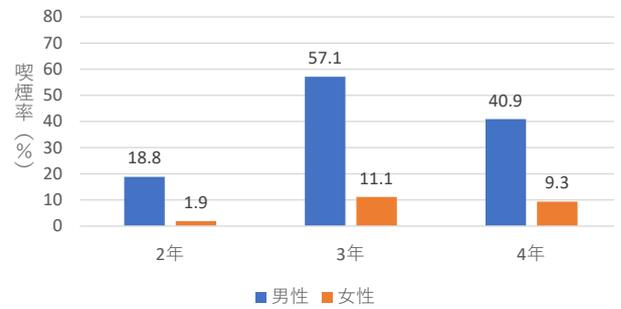
付図2-2 学年別喫煙率（2019服社）



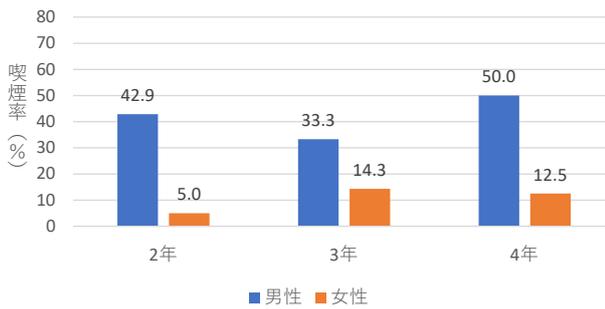
付図2-3 学年別喫煙率（2019デザ造）



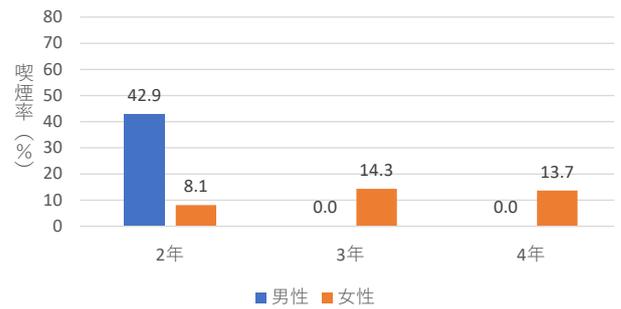
付図2-4 学年別喫煙率（2019建イン）



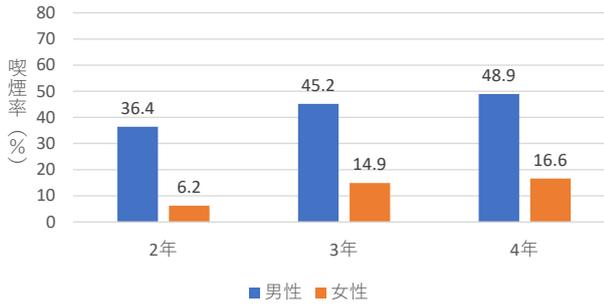
付図2-5 学年別喫煙率（2019学国）



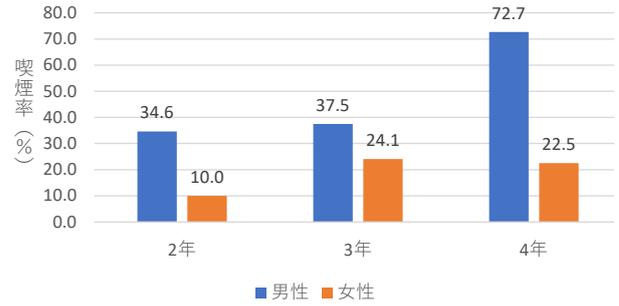
付図2-6 学年別喫煙率（2019学ファ）



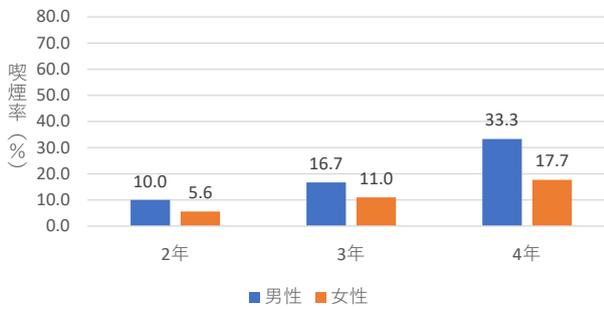
付図3-1 学年別喫煙率（2023服クリ）



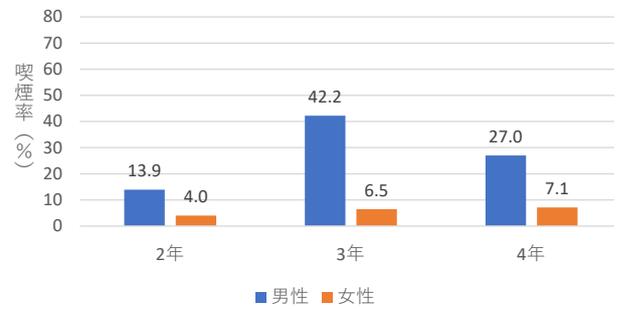
付図3-2 学年別喫煙率（2023服社）



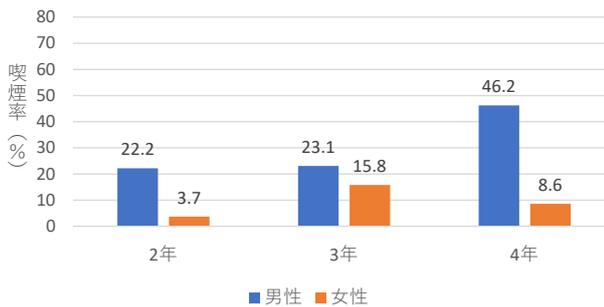
付図3-3 学年別喫煙率（2023デザ造）



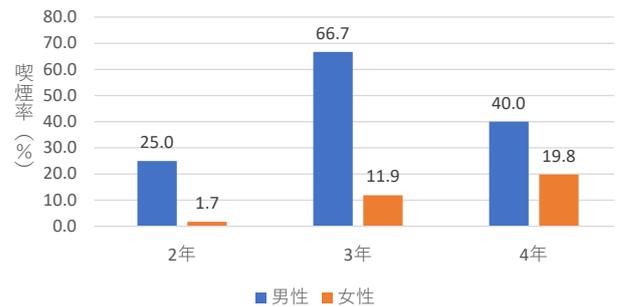
付図3-4 学年別喫煙率（2023建イン）



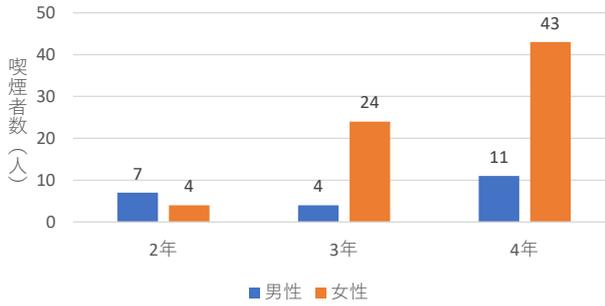
付図3-5 学年別喫煙率（2023学国）



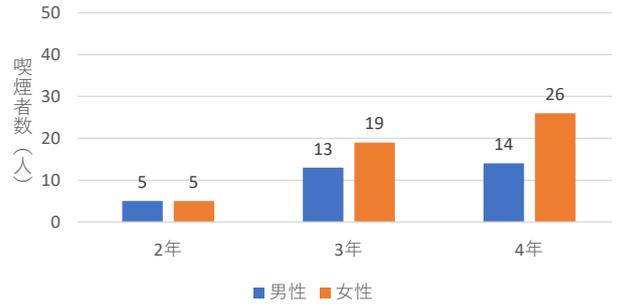
付図3-6 学年別喫煙率（2023学ファ）



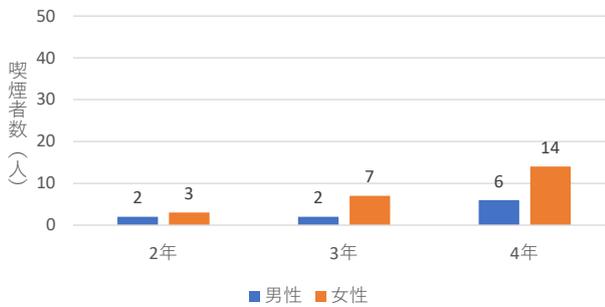
付図4-1 学年別喫煙者数（2016服造）



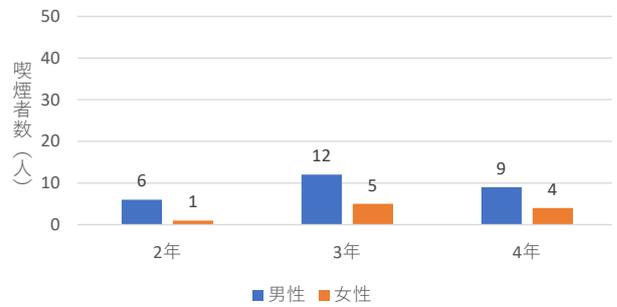
付図4-2 学年別喫煙者数（2016服社）



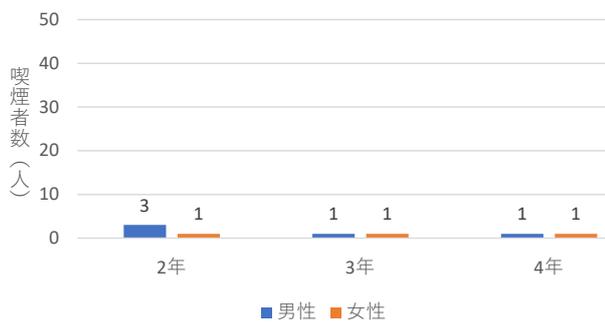
付図4-3 学年別喫煙者数（2016デザ造）



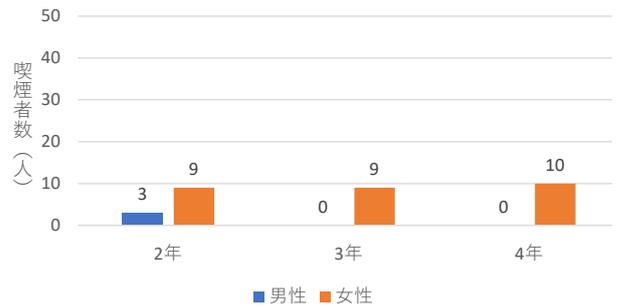
付図4-4 学年別喫煙者数（2016建イン）



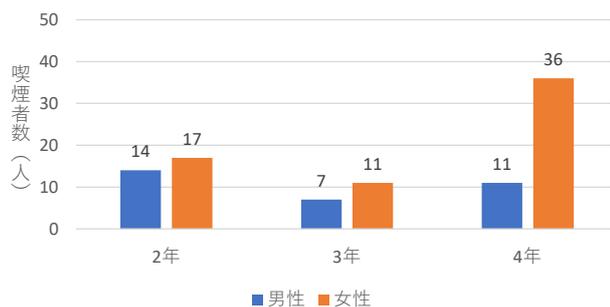
付図4-5 学年別喫煙者数（2016学国）



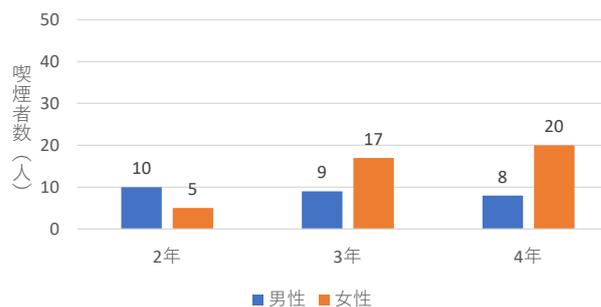
付図4-6 学年別喫煙者数（2016学ファ）



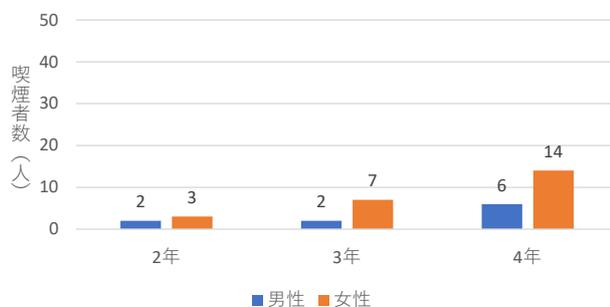
付図5-1 学年別喫煙者数（2019服クリ）



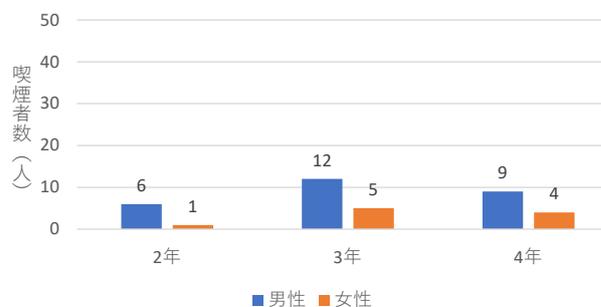
付図5-2 学年別喫煙者数（2019服社）



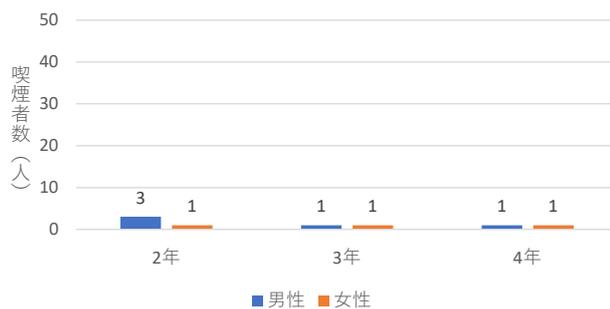
付図5-3 学年別喫煙者数（2019デザ造）



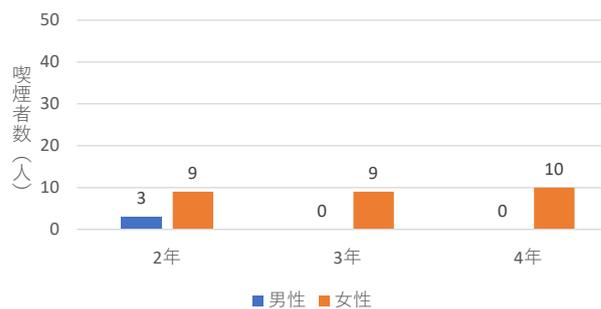
付図5-4 学年別喫煙者数（2019建イン）



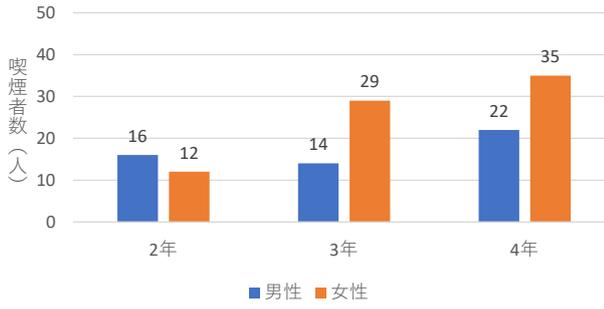
付図5-5 学年別喫煙者数（2019学国）



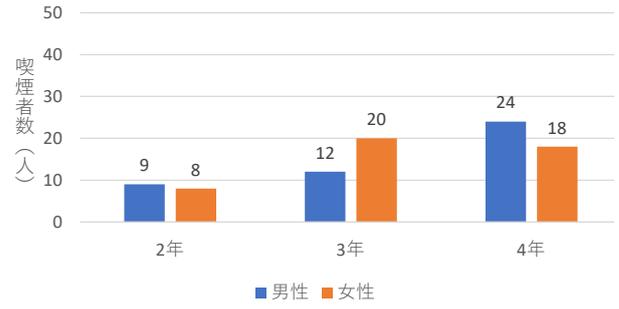
付図5-6 学年別喫煙者数（2019学ファ）



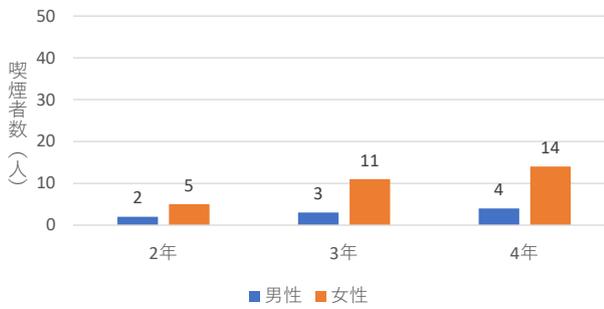
付図6-1 学年別喫煙者数（2023クリ）



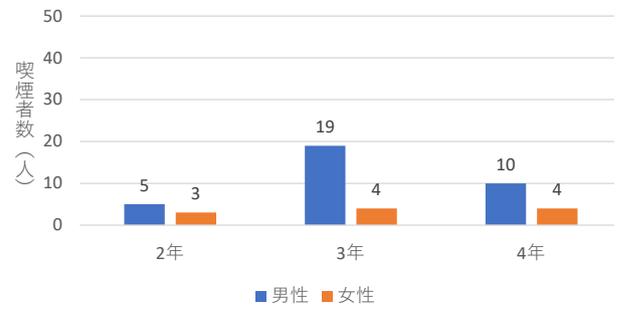
付図6-2 学年別喫煙者数（2023服社）



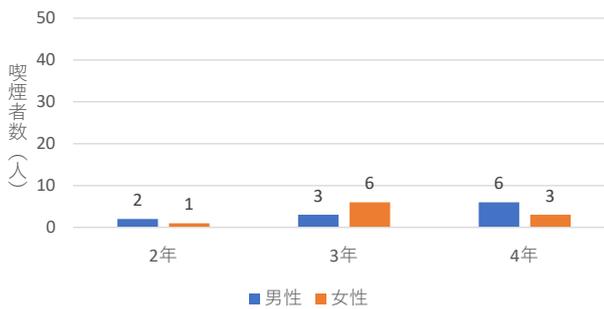
付図6-3 学年別喫煙者数（2023デザ造）



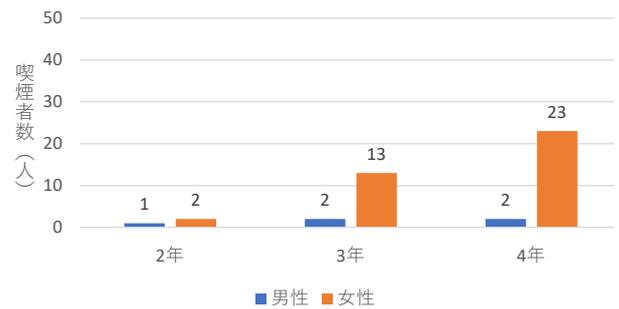
付図6-4 学年別喫煙者数（2023建イン）



付図6-5 学年別喫煙者数（2023学国）



付図6-6 学年別喫煙者数（2023学ファ）



異年齢の外あそびにおける育ち合いに関する考察

A Study of Mutual Development across Age Groups through Outdoor Play

石川 基子

ISHIKAWA Motoko

要旨

本研究は、街区公園における異年齢児のあそびを通じた関わり合いの中で、相互の育ち合いを検証することを目的に、参加観察法を用いて調査し、その効果を「身体運動の発達」「情緒・社会性の発達」「認知的な発達」の視点から考察した。その結果、①年下の子は、年上の子をモデルにすることで、発達課題を自力で達成できるようになる可能性があり、年上の子への憧れが発達を促進する。②幼児は、異なる発達段階の小学生との遊びを通じて、ルールや役割を学び、社会化を経験できる。③年上の子も年下の子の憧れの対象となることで社会的役割を担い、自己肯定感やアイデンティティの獲得に繋がるのが観察され、異年齢児の遊びが非認知能力向上に寄与する可能性を示唆した。現在、子どもたちの遊びの多様性が失われつつある中、異年齢児の遊びの機会を創出するために、学校、地域、家庭の連携が重要であると結論づけられた。

●キーワード：外あそび (outdoor play) / 異年齢集団 (cross-age groups) / 幼少年期 (childhood)

I. はじめに

近年、都市化や少子化をはじめとする社会の変化に伴い、あそびに必要といわれる「時間」「空間」「仲間」といわれる「3つの間 (サンマ)」が減少した。それにより、子どものあそび形態や方法が変化し、子どもの仲間集団は小規模化、同質化し、多様性が喪失されている。そして、「3つの間 (サンマ)」の減少は、子どもの社会化過程にも影響を与えている¹⁾。

そのような中、子どもの社会性を育むための異年齢の交流活動が教育や保育の中で注目されている^{2~5)}。文部科学省は、幼児と児童の交流活動の成果として、「お互いに育ち合うような交流の積み重ねにより、交流がイベント的なものではなく、子どもの発達にとって必要な学習の場であるとともに互いの学び合いの場となっている。」「子ども同士の交流の中で、それぞれの発達段階に応じた思いやりの気持ちがはぐくまれた。」「園児が小学校への期待を高めることができた。」⁶⁾と報告している。

異年齢交流が学校や保育所 (幼稚園) などで指導の一環として行われるようになった今日だが、かつては地域の道路や空き地にて、近所の子どもが自然発生的に集まり群れて遊ぶことで異年齢交流は行われていた。

しかし、都市化・地域社会の変化により、子どもにとっ

ての外あそび空間の中心は公園となっていった。公園の中でも、特に住宅街の身近な公園である街区公園は、近所の異年齢の子どもが交流する場として重要な役割を担っている⁷⁾。

そこで本研究は、街区公園における異年齢児のあそびを通じた関わり合いの中で、相互の育ち合いを検証することを目的に、公園あそびの事例を報告し分析する。

II. 方法

1. 対象者

本研究の対象は、公園の近所に住んでいたり、買い物などでたまたま立ち寄った幼児・児童であった。対象児の保護者へ、本研究の趣旨・目的および学術目的にのみ使用されることを説明した上で、写真や動画の使用許可を得られた事例を考察対象とした。

2. 調査方法

調査は、2018年から2022年に、埼玉県さいたま市の街区公園における放課後の公園あそびを、筆者が対象児の見守りや、対象児以外の子どもや保護者への配慮をし、写真や動画を撮影しながら参加観察を行った。子どもたちの自然な姿を観察・撮影しているが、子どもが撮影されていることを意識している場合もあった。

II. 事例報告と考察

観察が行われた公園は、1989年に、埼玉県さいたま市に開園した敷地面積6,501㎡の公営の街区公園である。さいたま市立の小学校と住宅街に挟まれるような形をしている。この公園は、近隣住民にも親しまれ、高齢者サークルが毎朝のラジオ体操の会場にしていたり、散歩コースや買い物の抜け道にする住民も多い。また、近くにスーパーがあるため、買い物にきた少し遠方に住む親子も利用することがある。このように、この公園は、近隣住民や子どもの生活の場となっており、近所の子も同士やたまたま立ち寄った子ども、さらに近所の大人たちとの出会いの場になっている。

以下、外あそびがもたらす効果である、「身体運動の発達（技能・運動能力）」、「情緒・社会性の発達（コミュニケーション・態度）」、「認知的な発達（思考・判断）」⁸⁾の視点から事例報告と考察を行った。

1. 動きが同期することの楽しさ（身体運動の発達）

年長女児、小学生、2歳9ヶ月女児の坂下り

年長の女児Aは、小学2年の姉と幼馴染の三姉妹（小学3年生、小学1年生、2歳9ヶ月）と一緒に公園内の急な坂を走り抜けるあそびをしようとしていたが、恐怖心が強く数歩踏み出しては、しゃがみ込むというのを繰り返していた。勇気を出して小走りで坂を下った瞬間に、その動きが友達と同期したことで楽しさを覚え、その後も坂下りを続け、動きの同期も繰り返された。遊び始めて3分程度で1人でも坂を下れるようになった。

坂下りが“できた”瞬間には、友達と身体的な同期が観察された（図1）。これにより、恐怖心を克服し楽しさを共感できた喜びが大きいことがAの表情から読み取

ることができた。

Aが恐怖心に打ち勝ち、坂を下り切るという課題が達成できた背景には、運動技術習得のモデルとなる小学生の存在と仲間が楽しんでいるあそびを一緒にやってみようという挑戦意欲が触発されたからと推考した。



写真1 年長女児の坂下り

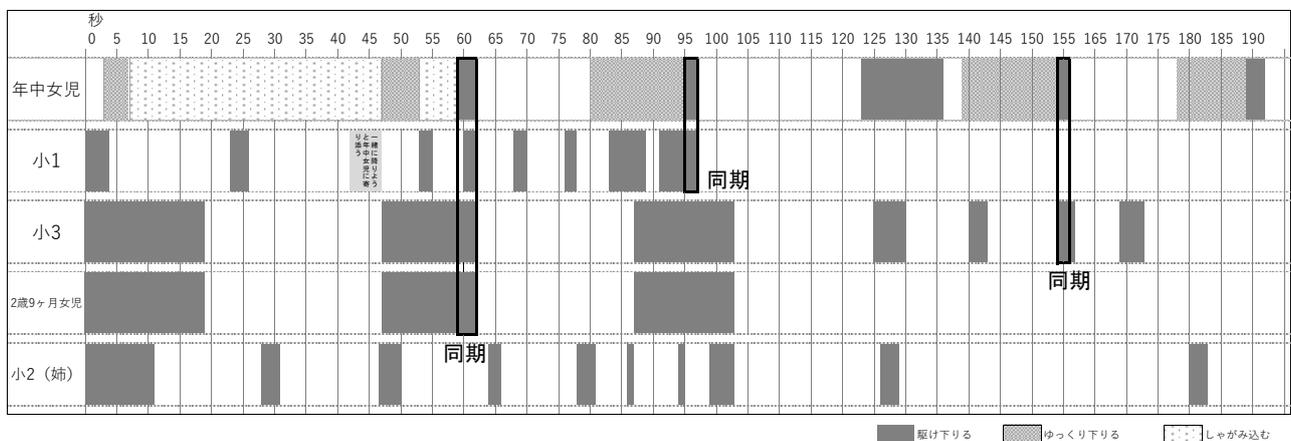


図1 年長女児の坂下りでの他児との同期

2. 年上の子への“憧れ”から運動技術の獲得 (身体運動の発達)

年中女兒と小学生集団の大なわとび

年中の女兒Bは、日頃からよく遊んでいる近所の“憧れ”のお姉さん達（小学生）がしている大なわとびの「郵便屋さん」に入れて欲しいと申し出たが、「Bちゃん、跳べないでしょ。」と断られ、仲間入りをすることは叶わなかった。このことで、とても落ち込んだBは、翌日から「郵便屋さん」を特訓し、数日で跳べるようになった。

翌月、再び大なわとびをしているお姉さん達に入れて欲しいと自信をもって申し出たが、「Bちゃん、8の字跳びできないでしょ。」と断られた。またしても、Bは仲間入りをすることは叶わず、翌日から「8の字跳び」の特訓を始め「8の字跳び」も跳べるようになった。Bは、以前より家族で幾度も大なわとびの練習をしてきたが、あまりやる気を見せなかった。しかし、今回、“憧れ”のお姉さん達の仲間入りをしたい一心で大なわとびの技術を身につけた。

小学生がBに仲間入りを断った言葉は、大人ではまず選択することがない辛辣とも思える言葉ではあるが、Bにとって「郵便屋さん」と「8の字跳び」という“助けを借りずに自力ではできない”発達の最近接領域にある課題が、年上の子からの刺激によって“助けを借りずに自力でできること”に移行したことが観察された。

また、なわとびのような運動技術が楽しさを左右するようなあそびにおいて、年下の子は年上の子の技術に“憧れ”、同じことができるようにと練習に励み、直接教えてもらうことで運動技術が飛躍的に向上することがある。他者への“憧れ”は、運動・スポーツ参加の動機づけとなり、その価値を自分の中に内在化させることができる⁹⁾。“憧れ”の年上の子とのあそびは、運動技術の獲得のみならず、生涯を通して運動に親しむ動機づけとなることが期待された。

3. 年上の子への“憧れ”から運動技術の獲得 (情緒・社会性の発達)

1歳3ヶ月女兒と小学2年女兒のサッカーごっこ

1歳3ヶ月の女兒Cがボールを蹴って遊んでいるところに、近所に住む小学2年の女兒Dと一緒に遊び始める。Cが、1人でボールを蹴って遊んでいる時は、ボールの動きや自身でボールをコントロールすることに楽しさを感じている様子であった。Dとあそ

び始めてからはDの多彩で緩急のついた動きやその間合いに、Cは大きな声を出して喜んだ。Dとのあそびによってボールあそびを通したやり取りやコミュニケーションの楽しさを、Cは知ることができた。

ボールを蹴ることや蹴ったボールの動きを楽しむ1人あそびが、受容的・応答的な関わりができる年上の子とのあそびにより、人と関わることの喜びや楽しさを知ることができた事例である。幼児にとって言葉にならない思いを受け止めてもらう経験は、周囲の環境に能動的に関わるための意欲の基盤になるであろう。



写真2 1歳3ヶ月女兒と小学2年女兒のサッカーごっこ

4. 自身の気持ちに折り合いをつける (情緒・社会性の発達)

年中女兒と小学生の鬼ごっこ

年少の女兒（3歳6ヶ月）Eと年中の女兒（4歳10ヶ月）Fは小学生に混ざって鬼ごっこをしていた。Eは、あまりルールを理解していないが、小学生の匙加減で鬼ごっこに楽しく参加できていた。

一方、Fはルールをある程度理解し、積極的に関わろうとするが、小学生の鬼ごっこの展開の速さについていくことができなかつたり、鬼になりたくない思いが強かつたりと、自身の思い通りにならないことに少しずつ拗ねはじめ、鬼にタッチされたことをきっかけに怒り出してしまった。小学生がFの気持ちを聞き出そうとするが、1人集団から離れて行った。小学生がFを気にせず、鬼ごっこを再開して少しすると、小学1年の男児が集団から離れているFに気付き、優しく「どうしたの？」と声を掛けた。しかし、Fは自身の気持ちに折り合いを付けられず、母に訴えることになった。

年少の女兒Eは、鬼ごっこに参加はしているが、ルールの理解ができておらず、並行あそびの要素が強かつた。その一方で、年中の女兒Fは、ルールを理解して自発的にあそびに参加できていた。しかし、自身の思い通りに

したい気持ちと集団のルールとの折り合いをつけることがまだできなかった。

2017年改訂の幼稚園教育要領¹⁰⁾では、幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な10の姿が示された。その一つの道徳性・規範意識の芽生えについて、「友達と様々な体験を重ねる中で、して良いことや悪いことがわかり、自分の行動を振り返ったり、友達に共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、決まりを守る必要性がわかり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いをつけながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。」と示されている。

これらは、5歳児後半に育ってほしい姿として記述されている。道徳性や規範意識の芽生えは、5歳以前から友達と一緒にあそびを通して協同する経験の中で、自分の思いを相手にわかるように伝え、友達の思いに気づき自己を調整しようとする力を身につけ、自分の気持ちに折り合いをつける等、他者の存在を意識し、様々な楽しさ喜びとともに葛藤を経験することが必要である。

幼児期は、基本的に他律的な道徳性をもつ時期である¹¹⁾。大人が「ルールを守りましょう」と説明をしたからといって、子どもはルールがわかっているでも自分の都合や思いが優先したり、感情に左右されてルールが守れないことも多い。「ルールを守る」ことを教え込むのではなく、子ども自身が自分でルールを守ることの大切さに気づき、自律的な道徳性を身につけていけるようにすることが必要である。

異年齢での集団あそびの場合、年上の子は保護者や保育者（指導者）の保護的指導的な立場とは異なる。特に小学生は、自分自身のあそびを継続するために、仲間同士で互いに折り合いをつけつつ相互の許容範囲に収まるように解決しようとする発達段階である。

本事例では、Fが1人拗ねても小学生らは全体の鬼ごっこを継続するために、他の仲間との折り合いをつけながら鬼ごっこを再開した。



写真3 異年齢集団の鬼ごっこ

幼児が小学生と異年齢で集団あそびを行うことは、自分の気持ちに折り合いをつけ、規範意識をもつための喜びや葛藤を経験的に学べる場として期待される。

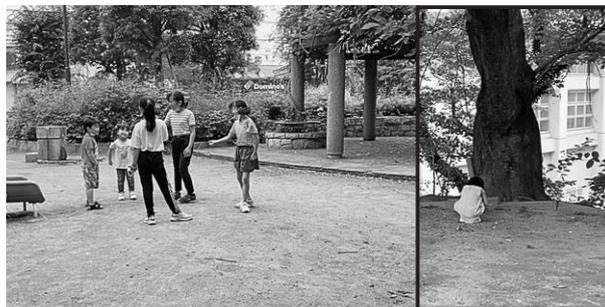


写真4 気持ちの折り合いがつかない年中女児と小学生ら

5. 想像力（創造力）と自己肯定感の育ち （認知的な発達）

小学6年男児の大きな砂の山づくり

月に1回、公園で開催される「あそび場」にて、小学6年男の児Gと同級生の男児が慕っている学生サポーターと3人で、今までつくったことがない程大きな砂の山をつくり始めた。3人で工夫を重ねて直径1m、高さ80cm程の大きな砂の山ができてき、次にトンネルをつくり始めると、周りで遊んでいた幼児3～5名が大きな山に「すごいね～、大きいね！」と言って集まって来て、一緒にトンネルを掘りはじめた。そして、保護者も一緒に大きな砂の山にトンネルを何本通せるか、それぞれが思い思いの方向から掘りはじめた。山が大きくなり、幼児は奥まで掘り進めることができない時は、Gやその同級生が掘り進めてあげて、5本のトンネルが山の中で繋がった。

幼児たちが興味津々で集まって来た際、Gは少し身を引いて幼児にその場を譲るような行動をみせ、皆が驚き喜んでる様子を眺めていたその姿は、少し誇らしげにも見えた。

幼児は、今までで見たことがない大きな砂の山に感動し、今までつくったことがない深いトンネルを掘ってみようという挑戦心や意欲が掻き立てられた。実際にトンネルを掘ってみると意外と掘ることが難しく、小さい山のようにトンネルを反対側まで開通できるかどうかや、どのように掘ったら開通できるかという想像力（創造力）を働かせながら、全身を使って掘り進めていた。幼児らは、Gとその同級生に手伝ってもらいトンネルを掘り進めた。5本のトンネルが山の中でつながった時には、皆が大きな歓声をあげ、達成感や一体感を得ることができ

た。Gは、とても満足感を得ているように見えた。

東京都教育委員会¹²⁾は、子どもの自己肯定感を高めることが重要であると述べており、自己肯定感を「自己に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情。」と定義している。

大きな砂の山をつくれたGは、自分がつくったものに対して幼児が夢中になって遊んでいることや、幼児の“憧れ”の対象となったことで、自己肯定感が高まる可能性が考えられた。

Gの保護者は、この日の帰宅後、Gがとても清々しい顔をして公園での出来事を楽しそうに話していたといっている。また、砂あそびで汚した靴を自分で洗ったとも報告している（普段は自分で洗わない）。異年齢児のあそびは、年上の子にとっても多くの成長が期待される有意義な経験と言えよう。



写真5 大きな砂の山をつくる小学6年男児



写真6 皆でトンネルを掘る

6. 役割を与えられるということ（情緒・社会性の発達）

砂あそびでの幼児の“お仕事”

年少の女児（3歳6ヶ月）Eと年中の女児（4歳10ヶ月）Fが近所の小学生と水を使った砂あそびをする際は、いつも水運びの“お仕事”で大忙しである。この日は、小学生が砂場の囲いを使ってダムのような、滝のような立体的な川をつくっていた。EとFは協力したり、少し揉めたりしながら小学生の指示のもと、たくさんの水を運び続ける。水が流れて小学生が喜ぶと、さらに責任感を覚え“お仕事”に喜んで励み、何度も何度も水場との往復を繰り返した。

幼児が異年齢児とのあそびの中で役割を得るということは、家族集団から抜け出し、仲間集団に所属し社会化への過程を一步踏み出したと考えることができる。自分の思考や行動が、他人である仲間の評価や承認を得られるものであるかどうかを想定しながら、つまり、仲間の立場に立って自己を見ながら、行為するようになることで、子どもは段々と社会一般でも通用するような役割を取得して、自我を形成していく¹³⁾。異年齢でのあそびは、縦の関係ができることから、それぞれの役割が明確になりやすい。年上の子からの指示により、年下の子は評価や承認を得られる行動をすることができる。

本事例では、小学生の砂場でのダイナミックな建造物に幼児が“憧れ”を抱いている様子も見られた。その製



写真7 水運びの“お仕事”

作に重要な役割を与えられ、自分が「役に立っている」、年上の子に「評価されている」という自信や責任を感じ、喜んでいる様子が伺えたことから、自己肯定感や自我の形成に寄与している可能性が考えられた。

Ⅲ. 総合考察

本研究は、街区公園における異年齢児のあそびを通じた関わり合いの中で、相互の育ち合いを検証することを目的に、参加観察法を用いて調査を行なった。報告と考察は、外あそびがもたらす効果である、「身体運動の発達」、「情緒・社会性の発達」、「認知的な発達」の視点から、行った。

下記に、観察された子ども同士の主な育ち合いを要約するとともに、異年齢児の公園あそびの可能性についての展望を整理した。

- (1) 年下の子にとって、年上の子のがモデルになり、様々な刺激を受けることで、発達の最近接領域にある課題が“助けを借りずに自力でできること”に移行することが、「身体運動の発達」、「情緒・社会性の発達」、「認知的な発達」のどの視点からも期待された。年上の子への“憧れ”により、これらの発達を促進する可能性があった。
- (2) 幼児が発達段階の異なる小学生との集団あそびを通してルールを守ったり、役割を担うことで、社会化の過程をあそびの中で経験的に学ぶことができる。
- (3) 年上の子にとっても、年下の子のモデルや“憧れ”の対象となることで、年長者としての社会的な役割を担い、社会性を身につける機会になる。さらに、この経験は自己肯定感やアイデンティティの獲得に繋がっていくことが期待される有意義な経験であった。

本研究は、一例に過ぎず、また調査が参加観察法であるため、観察者である筆者の存在が対象者に影響を及ぼしている可能性もある。しかし、異年齢児の公園あそびは、現在の教育や保育で重要視されている非認知能力の向上に貢献する可能性が示された。

子どものあそびに必要な「3つの間（サンマ）」が減少し、子どもの仲間集団が小規模化、同質化し多様性が喪失していく今日、自然発生的な異年齢児のあそびをどのように確保し、機会を創出するかが今後の課題である。そのためには、学校、地域、家庭がそれぞれの特性を生かしながら連携し、子どもの成長を支える術を考える必要があるだろう。

文献

- 1) 住田正樹・高島秀樹：子どもの発達と現代社会，北樹出版，pp.37-91，2002.
- 2) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター：子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」：活動実施の考え方から教師用活動案まで，2011. https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/2306sien/2306sien3_2s.pdf（参照，2024.10.03）.
- 3) 数馬彩香・西館有沙・若山育代：幼小接続における幼児と小学生の交流活動の現状と課題，富山大学人間発達科学部紀要13（1），pp.59-66，2018.
- 4) 開浩一・柿森昭長：異年齢集団活動が児童の発達に関わる可能性，長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要7（1），pp.39-45，2009.
- 5) 室崎生子：異年齢集団の活動拠点＝基地の空間構成，性質，役割に関する研究：異年齢集団による遊び行動と遊び空間利用に関する研究-その1-中津川市における豆学校の活動を事例にして，日本建築学会計画系論文報告集424，pp.89-99，1991.
- 6) 文部科学省：保幼小連携の成果と課題（調査研究事業報告書等より），2008. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/057/shiryo/attach/1367255.htm（参照，2024.10.05）.
- 7) 椎野亜紀夫・愛甲哲也：児童の年齢差による都市公園選択の差異に関する研究 小学校区を単位とした都市公園配置の差異の検証，都市計画論文集49（3），pp.267-272，2014.
- 8) 中村和彦：子どものこころと体の危機！遊びの復興を，さがみはら教育N0.152，pp.5-9，2012.
- 9) 上地広昭：運動・スポーツ領域における同一視の発達の变化，スポーツ心理学研究40（1），pp.1-12，2013.
- 10) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，p.55，2017. https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf（参照，2024.10.06）.
- 11) 岩立京子・西坂小百合：乳幼児教育・保育シリーズ保育内容人間関係，光生館，p.72，2021.
- 12) 東京都教育委員会：自尊感情や自己肯定感に関する研究，2009. https://web.archive.org/web/20160910025117/https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h20/h20_01.pdf（参照，2024.10.01）.
- 13) 田中理絵：子ども社会とは何か：ギャング・エイジの仲間集団研究（特集「子どもらしさ」へのアプローチ），子ども社会研究（2），pp.5-17，2016.

古英詩 *The Panther* における感覚的表現のリアリズム

Realism of Sensuous Description in *The Panther*

白井 菜穂子

SHIRAI Naoko

要旨

古英詩写本 *The Exeter Book* に収録された *The Panther* は、もともとタイトルはなく、動物の「豹」であることは明確に示されていないが、長編の宗教詩に続く一連の elegies の中に組み込まれたような bestiary 「動物寓意譚」のひとつという位置づけになっている。わずか74行という短さとラテン語からの翻訳であることから、その内容があまり注目されず研究論文も少ないという現状である。本稿では、*The Panther* に見られるリアリズムの手法を考察し、獣の「眠り」を境に、目覚めている状態では「視覚」を使った描写に焦点を当て、3日の眠りの後の「目覚め」の瞬間には「聴覚」による描写が使われ、徐々に遠くへ届く「嗅覚」による表現があり、近代文学にも匹敵するリアリズムの表現が使われていることを指摘する。聞き手の想像力を刺激するため、最初は目に入る獣の姿の描写を、そして目覚めた直後には獣の発する音の描写に変わり、さらに目に見えない遠くから漂う香りの描写と変化していく様は、古英詩においても詩作にリアリズムの手法が使われているという仮説を立証したい。

●キーワード：リアリズム (realism) / 古英詩「豹」(*The Panther*) / 感覚的表現 (sensuous description)

I. Introduction

The Panther in the *Exeter Book* is regarded as one of the preeminent bestiary poems in Anglo-Saxon literature. It was compiled with elegies such as *The Wanderer*, *The Seafarer*, and *Wulf and Eadwacer*, following voluminous and renowned religious poems.¹⁾ The bestiary in the *Exeter Book* comprises *The Panther*, *The Whale*, and *The Partridge* (or *The Phoenix*), arranged sequentially in order of appearance. These poems are untitled, with their epithets derived from the original Greek codex *Physiologus*, in which various creatures, plants, and inorganic matter are meticulously allegorised to expound the righteousness of the Christian world.²⁾ In contrast to the colloquial understanding of the term 'beast', the panther in the Old English *Physiologus* represents the nature of Christ, embodying benevolence and serving as a guardian of humanity. This creature is engaged in combating the malevolent dragon, symbolising Satan, to safeguard individuals in the Anglo-Saxon world. Consequently, the panther is portrayed as an anthropomorphic entity of

Christendom, destined to vanquish the adversaries of humankind. Williamson posits that 'the Christlike beast (who is beautiful and exotic) is friendly to all creatures except the serpent or dragon who represents his archenemy, Satan, in this particular allegory.'³⁾ The majority of scholars specialising in the *Exeter Book* concur on the beast's majestic nature as a sacred entity, attributing this interpretation to the poem's origin as an Old English translation derived from one of the Latin versions of *Physiologus*. The Old English translation, however, appears to be an assemblage of incomplete fragments.⁴⁾ Notwithstanding its imperfect structure, the bestiary merits examination from a poetic perspective for its depiction of creatures. This study aimed to demonstrate that a detailed depiction of sensory experiences, including visual, auditory, and olfactory elements, is integrated into the structure of the poem, with the pivotal moment occurring in the description of the sleeping panther in lines 35–42a. The initial section of the poem effectively portrays the panther's noble character and its overwhelming

superiority over the dragon, characterised as a demon. Subsequently, the panther rests for three nights to recuperate. On the third day, a magnificent sound emanates from its mouth, followed by a fragrant aroma akin to perfume. Upon awakening and disseminating the scent of the blossoming flowers, the poet presents the spectacular surrounding landscape from a visual perspective. This sensory transition is explicitly employed in Mark Twain's work *The Adventures of Tom Sawyer*, on Jackson's Island.⁵⁾ The objective of this study was to analyse instances where the poetic technique of realism is employed to enhance the verisimilitude of the language for Anglo-Saxon audiences.

II. Visual Effect

The initial section of the poem, comprising lines 1–30, depicts the vibrant and dignified appearance of the panther (Christ), using numerous radiant adjectives. As Williamson notes, 'The panther has a magical coat of many colours like that of Joseph, its "luminous hues" an indication of its compelling beauty.' The poet emphasises Christ's ability to extol his dignity, portraying the panther's coat (or Christ's) as a colourful, luminous garment.⁶⁾ The subsequent lines illustrate the visual effects of the beast's resplendent appearance.

Dæt is wrætlic deor, wundrum scyne
 hiwa gehwylces; swa hæleð secgað,
 gæsthalge guman, þætte Iosephes
 tunece wære telga gehwylces
 bleom bregdende, þara beorhtra gehwylc
 æghwæs ænlicra oþrum lixte
 dryhta bearnum, swa þæs deores hiw,
 blæc brigða gehwæs, beorhtra ond scynra
 wundrum lixeð, þætte wrætlicra
 æghwylc oþrum, ænlicra gien
 ond fægerra frætwwum bliceð,
 symle sellicra. (ll.19–30a)⁷⁾

That is an ornamental beast, wonderfully shining
 every colour; so men say,

the holy man, that Joseph's
 coat was each of colours
 changing colours, then of each shining
 entirely more splendidly than any other it glitters
 children of men, so the beast's hue,
 bright changing of each colour, bright and shining
 wondrous shines, so that ornamental
 each other, glorious now
 and beautiful shines with ornaments,
 wondrous forever.⁸⁾

The synonyms for 'colours' employed in this section, such as 'hiwa', 'telga', 'bleom', and 'brigða', create a visual effect of diverse hues in the audience's imagination. Furthermore, it is noteworthy that terms such as 'scyne', 'bregdende', 'beorhtra', 'lixte', 'scynra', 'lixed', and 'bliceð' all pertain to the concept of luminescence, representing the changing colours of the panther's skin or fur. In addition, the repetitive use of these verbs contributes to creating a dynamic mental image for the audience. The colour-changing coat of the beast is portrayed as a representation of Christ's dignity. The sequence of luminescent expressions suggests that the audience initially envisioned the visual image of a radiant animal. Consequently, the sense of sight takes precedence in the poem.

III. Sleep for Resurrection

The pivotal turning point is situated in the middle of the poem and reveals that the panther must enter a state of sleep to regain power. In contrast to the visual scene depicted in the first half of the poem, the sleep scene represents a motionless, silent, and shaded period in the narrative. This scene functions as a moment of obscuring the audience's field of vision and subsequently transitioning to employing auditory effects.

Symle fülle fægen, þonne foddor þigeð,
 æfter þam gereordum ræste seceð
 drygle stowe under dunsorafum;
 ðær se þeodwiga þreonihta fæc
 swifeð on swefote, slæpe gebiesgad.
 Þonne ellenrof up astondeð,

þrymme gewelgad, on þone þriddan dæg,
sneome of slæpe. (ll.35–42a)

Always glad to be full, when he tastes food,
after the search he looks for his rest
a dry spot under the hill-cave;
there the great warrior for the period of three days
recovers on sleep, he sleeps occupied.
Therefore the powerful stands up,
powerfully enriched, upon three days,
immediately out of sleep.

The panther is depicted as a corporeal entity engaged in activities such as foraging, seeking shelter, and resting. In this poem, the creature possesses the specific characteristic of slumbering for three nights and subsequently regains its formidable strength. This portrayal potentially alludes to Christ's resurrection occurring three days after the crucifixion.⁹ A quiescent effect of sleep is employed herein with the repetitive usage of 'ræste (rest)', 'drygle stowe (dry spot)', 'under dunsorafum (under the hill-cave)', 'on swefote (on sleep)', and 'slæpe gebiesgad (sleep occupied/soundly)'. These five lines (l.35–l.39) represent an interval denoting the passage of time, after which rebirth commences from line 40. Subsequently, the panther's vigour is accentuated through the reiteration of adjectives such as 'ellenrof (powerful)', 'þrymme gewelgad (powerfully enriched)', 'sneome of slæpe (immediately out of sleep)', and the verb 'up astondeð (stands up)'. Once more, the panther rises in the presence of people to illuminate the audience with its vocalisation and safeguard them from malevolence. Following the silent repose of the animal, the auditory sense is utilised as the panther produces a sound. In the absence of visual perception, initial contact with people would necessarily occur through an auditory medium. In the natural world, lightning precedes thunder.

IV. Auditory Effect

Notably, the auditory effect appears to be remarkably brief in its representation within the poem compared to the sense of sight. Only one and a half

lines are presented as follows:

Sweghleoþor cymeð
woþa wynsumast þurh þæs wildres muð.
The sound comes
of joyful sound through the mouth of wild beast.
(ll.42b–45a)

The sound emanating from the beast's mouth is described as 'wynsumast (delightful)', which symbolises Christ's initial address to humanity following the resurrection. Concealed entirely from human view within the cave, the panther vocalises to attract attention from a considerable distance. The brevity of the lines employing the auditory effect indicates that the poet's focus is not on sound but on the scent that subsequently emerges. The vocalisation produced by the beast appears to serve as a signal indicating its revival. This observation demonstrates that the poet concentrated solely on two characteristics of the panther: its luminous appearance in the first half and its scent in the latter half. Evidently, scent holds significance throughout the poem, a topic that warrants further examination.

V. Olfactory Effect

The most enigmatic symbol of all is the scent emitted by the panther.¹⁰ The olfactory scene described below indicates that the panther remains concealed in the cave out of human sight. The phrase 'of þam wongstede (out of the place)' presents a landscape depicting the origin of the panther's scent from the cave where it continues to reside.

Æfter þære stefne stenc ut cymeð
of þam wongstede, wynsumra steam,
swettra ond swiþra swæcca gehwylcum,
wyrta blostmum ond wudubledum,
eallum æþelicra eorþan frætwwum. (ll.44–48)

After that sound the scent comes out
out of the place, joyful breath,

more fragrant and powerful than fragrance of any,
than the plants of blossoms and of forest blossoms,
all possible treasures on the earth.

Line 44a explicitly states that scent follows sound, which corresponds to the natural sequence of human sensory perception. In the absence of a visual input, auditory stimuli are perceived more rapidly than olfactory stimuli. By eliminating visual cues, the poet endeavours to emphasise the significance of imperceptible elements, such as sound and scent. Rather than describing the visual attributes of the panther's lustrous appearance, the text extols its intangible fragrance, which is portrayed as permeating the world. This imagery symbolises the prospective dominion of Christianity over the Anglo-Saxon realm.

Ʒæt wæs swete stenc,
wlitig ond wynsum geond woruld eall.
Siþþan to þam swicce soðfæste men
on healfa gehwone heapum þrungon
geond ealne ymbhwyrft eorþan sceata.
(ll.64b-68)

That was a sweet scent,
beautiful and delightful over the all world.
Then to the fragrance righteous men
on every side people went
all over the world every corner of the earth.

The modifiers attributed to scent are 'swete stenc (sweet)', 'wlitig (beautiful)', and 'wynsum (delightful)'. The olfactory imagery that the poet intended to evoke may have had a sweet and delightful effect on the audience. Consequently, individuals from all the regions were persuaded to proceed to the source of the scent. As elucidated previously, the use of sound and scent is divided into two distinct sections. The sounds precede the scent in the narrative structure. It is crucial to note the order in which sounds and scents appear in *The Panther*.¹¹⁾ This significance stems from the fact that the scent of the panther holds greater importance for the poet, as evidenced by the following lines:

fæder ælmihtig,
ond se anga hyht ealra gesceafta,
uppe ge niþre. Ʒæt is æþele stenc. (ll.72b-74)

Almighty God,
and the only joy for all creatures,
above and below. That is the glorious scent.

This constitutes the epilogue of *The Panther*, which venerates the divine essence of the omnipotent deity portrayed as a source of jubilation for all celestial, terrestrial, and marine creatures. Of particular significance is the final verse 'Ʒæt is æþele stenc. (That is the glorious scent.)', wherein the term 'stenc (scent)' concludes the poem. Consequently, the panther's olfactory emanation emerges as the central phenomenon that the poet endeavours to elucidate throughout the composition. Furthermore, in the latter half of the poem, neither visual nor auditory elements are used to depict the panther. This section of the poem exclusively emphasises olfactory effects. The olfactory sense is ultimately invoked when individuals seek the panther (or Christ) from a considerable distance.

VI. Conclusion

As discussed above, the sequence in which the visual, auditory, and olfactory senses emerge significantly influences the poem's structure. The poet endeavours to transition from a prioritised sense of vision to an intangible olfactory sense that appears to effectively evoke realistic imagery for the audience. Interspersed with the sleep scene in the middle, the poem presents the visual radiance of the panther in the first half, while the invisible fragrance of his breath is emphasised in the latter half. The order of the visual, auditory, and olfactory senses corresponds to the human sensory perception, as individuals see, hear, and smell. In reality, light travels faster than sound, and sound is transmitted faster than scent. It is plausible that the poet intended this realistic approach to the composition. It is also noteworthy that the intangible quality of 'the scent' should have equal value to the visual luminescence of the panther (Christ). This

assertion is supported by the final line of the poem, which states, 'That is the glorious scent', wherein the word 'that' signifies the almighty God.

NOTES

- 1) The poems in the Exeter Book were arranged by Krapp and Dobbie as follows: a religious group at the beginning comprising *Christ*, *Guthlac*, *Azarias*, *The Phoenix*, and *Juliana*; an elegiac group in the middle consisting of *The Wanderer*, *The Seafarer*, and *Widsith*; a bestiary group including *The Panther*, *The Whale*, and *The Partridge*; another elegiac group containing *Deor*, *Wulf and Eadwacer*, Riddles 1-59; the final group of elegies comprising *The Wife's Lament*, *The Husband's Message*, and *The Ruin*; and Riddles 61-95. Several short poems are interspersed between the elegies and riddles. For further reference, see *The Exeter Book* in *Anglo-Saxon Poetic Records*, Vol. III, edited by George Philip Krapp and Elliott Van Kirk Dobbie, New York: Columbia University Press, 1936.
- 2) Williamson summarises in the introduction to *The Panther* that 'Marckwardt and Rosier note that "the medieval Latin versions of the Greek *Physiologus* (or *Bestiary*, as it was sometimes later called) contained between twenty-six and forty-nine chapters, each devoted to a real or legendary creature together with its interpreted moral or theological significance" (236)'. He also refers to Greenfield that 'the poem treats the themes of salvation and damnation allegorically as it "describes the traits and actions of birds and animals—these do not necessarily bear any resemblance to natural history—and then didactically explicates their significance in terms of God, Christ, mankind, or the devil" (Greenfield and Calder, 241)'. See *The Complete Old English Poems*, translated by Craig Williamson, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 2017, (505).
- 3) See *The Complete Old English Poems*, 505.
- 4) Krapp and Dobbie reference the perspective of several scholars that 'Ebert, the first scholar to attack these problems in detail, after a comparison with Latin texts of the *Physiologus*, especially the ninth century text in Bern MS. 233, concluded that the three Anglo-Saxon poems were only a fragment of a much larger group. Sokoll, basing his study upon Ebert's conclusions, believed that the Anglo-Saxon poems were the result of an incomplete reworking of the Latin original, the extant text being about one-seventh of the whole work.' See *The Exeter Book*, l.
- 5) See Naoko Shirai, 'Realism of Sensuous Description in *The Ruin*', *Journal of Bunka Gakuen University—Humanities & Social Sciences*, No. 20 (2012), 97-105, (98).
- 6) See *The Complete Old English Poems*, 505.
- 7) All citations of *The Panther* are derived from *The Exeter Book*.
- 8) All translations of *The Panther* are attributed to the author.
- 9) Williamson also mentions that 'The panther eats its fill, then sleeps in a cave for three nights, increasing its power. This corresponds to the period of Christ's entombment after the crucifixion, during which time he harrowed hell and left the Devil enchained.' See *The Complete Old English Poems*, 505.
- 10) Brian McFadden denotes that 'The motif of a sweet odor is linked to a set of images about successful sin offerings and sacrifices, not only in Paul but in many places throughout the Hebrew Scriptures, and as the order of sanctity, it is also a repetitive motif in many hagiographies and ecclesiastical texts to indicate that a saint's life, an exemplary *imitatio Christi*, has been pleasing to God'. See 'Sweet Odors and Interpretative Authority in the Exeter Book *Physiologus* and *Phoenix*', *Papers on Language and Literature*, Spring 2006; 42, 2; 181-209, (187). In *The Panther*, successful sin offerings and sacrifices are unlikely to be discerned through observable indicators.
- 11) Williamson suggests that 'The musical scent (or the perfumed melody) draws the faithful to him. The implicit connection between Christ and the panther is made explicit in the concluding half of the poem'. He translates lines 44-48 as 'After that melody, a strange smell rises / And plays like perfume in that same place, / Sweeter and stronger than any scent.' He may conflate the sensory impressions of auditory and olfactory stimuli when denoting 'the musical scent or the perfumed melody' by 'stefne (sound)' in his introduction. However, the connotations of sounds are not included in the meaning of the scent in lines 44-48. See Williamson, *The Complete Old English Poems*, 506.

浅間哲平著 『プルーストと愛好家』

『プルースト叢書』 クラシック・ガルニエ社、2020年、389 pp.

Teppeï ASAMA, *Proust et les amateurs*

Classiques Garnier, « Bibliothèque proustienne », Paris, 2020, 389 p.

勝山 祐子

KATSUYAMA Yuko

要旨

本書の主張によれば、『失われた時を求めて』の物語の縦軸は〈芸術の愛好家であった主人公がいかにして小説家へと変貌を遂げたのか〉である。これは作者プルースト自身の道程でもあり、その〈創作の秘密〉の鍵でもある。著者はまず、プルーストが、ゴンクール兄弟とモンテスキウという「愛好家」から何を学んだのかを問う。「愛好家」という言葉はしばしば軽蔑的ニュアンスで用いられるが、『失われた時を求めて』においても同様である。プルースト自身が「愛好家」に過ぎないとジッドによって断じられたこともあったのだ。浅間は、モンテスキウとアルセール・アレクサンドルとの間に繰り広げられた「愛好家」VS「職業芸術家」論争を分析し、プルーストの曖昧な立場を明らかにする。最後に、スワンとシャルリュスというプルーストの小説を代表する「愛好家=失敗した芸術家」を取り上げる。二人の過ちは「芸術と人生」を、つまり「芸術と愛」とを混同したことである。これは話者自身も無意識に犯した過ちなのだが、これなくしては話者も小説家への道を見出すことはできなかった。現実とフィクションとが入り混じった『失われた時を求めて』においては、話者の声と小説家の声に混じって「愛好家=批評家」の声もまた響き渡るが、このような複雑な小説世界に対峙した本書は、プルーストにとっては「芸術と愛」を語るには「小説」という形態が必要だったことをも明らかにする。

●キーワード：『失われた時を求めて』 (À la recherche du temps perdu) /

ゴンクール兄弟 (Frères Goncourt) / ロベール・ド・モンテスキウ (Robert de Montesquiou)

本書の著者浅間哲平の主張は明解である。マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の物語の縦軸は、これまでに多くの研究者によって指摘されてきたような〈主人公がいかにして小説家になったのか〉ではない。〈芸術の愛好家であった主人公がいかにして小説家へと変貌を遂げたのか〉なのである。小説の話者はスワンのような蒐集家^{コレクショナール}ではないし、シャルリュスのようにサロン・コンサートを企画することもない。だが、彼は、芸術について談義し、作家になりたいと欲し、自らの無才に失望する。教会建築に夢中になり、セヴィニエ夫人の文体の特異性について力説し、ヴェネチアのアカデミア美術館でカルパッチョの連作を見つめる。ワーグナーの一節を奏でることもあるのだ。そして、「愛好家」という語からあらゆる軽蔑的ニュアンスを捨て去った存在である祖母、「反面教師」スワンとシャルリュス、画家エルスチールらの導きのもと、自らの才能及び文学への懷疑を乗り越え、「愛好家」から「芸術家」へと脱皮す

るのである。したがって、浅間の提示する命題に、まずは誰もが頷くことであろう。しかも、この道程が、プルースト自身のものであったことは明白なのだから、この命題は、プルースト自身の「創造の秘密」の鍵ともなるのだ。

その方法もまた明解である。まずは、「愛好家」という言葉を取り巻く歴史的、社会的文脈、その多義性を明示する。続いてゴンクール兄弟とロベール・ド・モンテスキウという一組と一人の作家の——誰もが富さえあれば「愛好家」になりうる時代にあって、前者がブルジョワであり、後者が大貴族であったことも無視できないように思われるが——、「愛好家」としての側面にフォーカスし、プルースト自身が何を吸収し、それをどのように「芸術家への変貌」の足がかりとしたのかを問う。ただし、この「ゴンクール兄弟」が、現実のゴンクール兄弟である以上に、『日記』のパスティッシュにおけるゴンクール兄弟であることには留意したい。続いて、スワ

ンとシャルリュス男爵という、(著者によれば誰もが「愛好家」として描かれる)『失われた時を求めて』の中でも抜きん出た「愛好家」に関する分析を試みる。

ここで、一つ注意が必要である。フランス語でも英語でも「amateur」と綴る「愛好家」は——このラテン語由来の語と、動詞「愛する・好む(aimer)」との関連性は明白だが——、芸術の分野のみに存在するわけではない。美術品や工芸品の蒐集家コレクショナールと同じく、食道楽者も洒落者も「愛好家」である。一方で、週に一度のレッスンを受けサロンで演奏を披露する素人ピアニストもまた「愛好家」である。アマチュア画家、アマチュア音楽家、アマチュアゴルファーといった言葉が示す通りなのだ。しかも、スワンのような「女好き」も「女性の愛好家」と定義される。あらゆる趣味の分野に「愛好家」が存在するのであり、彼らはいわば「数寄者すきもの」なのだ(これら「数寄者」たちのおしゃべりがこの小説の面白味の一つであることは間違いないだろう)。だからこそ、『失われた時を求めて』においては、優れた調理人の料理も、美しいドレスも「愛好家」を獲得し、彼らの評価によって芸術作品に昇華しうるのである。

果たしてこのような、芸術作品を評価し、批評し、場合によっては模倣もする「愛好家」たちは、「芸術家」つまり「創造者」でありうるのだろうか？ その趣味、技術が洗練を極め、音感に、文才に、画才に、その他なんでも表現の才に恵まれていれば、彼らは「芸術家」という呼称を授けられるに足るのか？ 「愛好家」と「芸術家」との線引きはどこにあるのか？ 「社交界の貴族による『芸術的』創作活動」は、何もモンテスキウやノアイユ夫人に限ったことではない。プルーストによれば、ゲルヌ伯爵夫人は「愛好家」というよりは「本物の歌手」であり、絵を嗜むエメリー・ド・ラ・ロシュフーコー伯爵夫人は「愛好家」にとどまるようだが、その理由は何であろうか？

ところで、「愛好家」という言葉が「職業芸術家」の対義語であるとすれば、この語が軽蔑的ニュアンスを持つ場合のあることにも合点がゆく。プルースト自身の著作もまた、社交好きの「愛好家」の手すさび(アンドレ・ジッド)との評価を受けたという。プルーストの全著作においても「愛好家」は、「術学者ベグン」、「退廃主義者デカダニ」、「スノップ」、「社交人」などの様相を呈する。しかし、「愛好家」に対するプルーストの評価は両義的だという。例えば、一見すると、「芸術家」エルスチールの主観を重

視する「イデアリスム」を浮き上がらせるために、擬—ゴンクール兄弟の事物自体への執着が強調されているかのようだが、浅間の丹念な読解によれば、話者の立場はエルスチールと擬—ゴンクールとの間で揺れている。

その一方で、プルーストは、「退廃主義者」と断じられることの多かったモンテスキウ(エドモン・ド・ゴンクールに言わせれば「貴族で金持ちで社交人」でありながら「ブラッスリーに通うボヘミアン」と、プルーストにとって「創造」への導きの一人であったジョン・ラスキンとを「愛好家」として同列に置き、彼らの「フェティシズム」と「偶像崇拜」とを批判的に考察したという。また、著者が精緻に分析する、モンテスキウとアルセヌ・アレクサンドルとの「愛好家」をめぐる論争によれば、「無私無欲な」「愛好家」こそ、「職業芸術家」を凌ぐ存在であるとモンテスキウは考えていた。極論が許されるならば、伯爵モンテスキウにとっては、美への「愛(amour)」は「金銭」に勝利すべきなのだ。それにもかかわらず、アカデミー会員という作家としての「社会的」地位を求めずにはいられないという矛盾！ 軽蔑的に「愛好家」と呼ばれることに納得できなかったのであろうか？ だが、浅間によれば、プルーストは「作家」(この場合はモンテスキウだが、『サント＝ブーヴに反対する』におけるボードレールでもあり、プルースト自身でもある)の、社会的認知への欲求を断罪しているわけではない。モンテスキウの両義的態度は、「愛好家」と「職業芸術家」との区別の曖昧さを示している。つまり、プルーストは「愛好家」をめぐる議論に決着をつけたいわけではないのである。

浅間は、最後に、架空の「愛好家」スワンとシャルリュスに迫る。両者ともモンテスキウとは異なり何も物さなない。「失敗した(なりそこねた)芸術家」にとどまるのだ。では二人の「失敗」は何に起因するのだろうか？ 話者は、この「失敗」を回避できるのだろうか？ スワンが好みではないオデットの顔に美を見出すようになったのは、ポッティチェルリが描く「チッポラ」の顔との類似が理由であった。シャルリュスの場合、その博識(とりわけ女性の服飾への好み)は、彼の秘密(男らしい男性への愛)と密接に結びつく。この二人の「愛好家」の深刻な、だが甘美な過ち、きっと話者も作者も、そして読者も犯す過ち、それは「芸術と人生の混同」である。実際、浅間によれば、話者もまた無意識のうちにこの過ちを犯しているのだ。しかし、この甘美な混同によって、スワンとシャルリュスとが話者に差し出す「芸術と愛と

「^{アマルガム}の合金」は、話者の〈来るべき書物〉の素材ともなりうるである。

*ここで評者が個人的に興味を持った点をあげさせていただく。それは、ブルーストが「複製」の蒐集家であったということだ。つまり、写真、豊富な図版入り旅行ガイド、美術雑誌や美術品の図録である。

評者には、浅間の功績が、これまで十分に議論されることのなかった「愛好家」の問題に対峙したことにとどまるようには思われない。『失われた時を求めて』は、小説家ブルーストが「生涯をかけて執筆した作品の最終形態」であり、生前未発表のものも含み、これに先立つ著作の全てがこの怪物的小説の習作、いわばその一部でもあるという認識のもと、この小説が、現実とフィクションとによって成るいくつもの擬-現実が生み出す重層的なアラバスクであり、そこには「愛好家=批評家」としての声、主人公の声、あるいは作者の声に混じり合いながら響き渡ることを明らかにする。話者が事物を描くのに、特定の芸術作品との比較（謎めいた暗示の場合も少なくない）に頼ることのいかに多いことか！ 美への愛を語ることになんの慎みが必要か？ というわけだ。そして、この「愛好家=批評家」の声の存在によって、この複雑な小説世界が支えられているのである。この重層性は、実は作家として歩み始めようとしていた時代のブルーストの著作にすでに認められ、生涯を通してこのアラバスクを練り広げたといえる。本書の著者は、ブルーストの生前は未発表であった美術批評『シャルダンとレンブラント』（1895年頃）から分析を始めるが、ここでブルーストは、架空の少年を登場させる。しかも、『18世紀の芸術家』のゴンクール兄弟の囁き声も聞こえてくるのだ。一体これは批評なのか？ それとも小説？ 『失われた時を求めて』に向けて書き始めることになるブルーストの疑義の芽は、すでにここにあったのだ。一組と一人の「愛好家=批評家」の声と、未来の小説家の声との三重奏。

浅間は「序文」において、晩年のロラン・バルトがブルーストに認めた「書くことへの意志」（『小説の準備』）に言及する。評者としては、同じくバルトの遺稿「人は常に愛するものを語り損なう」を想起せずにはいられなかった。バルトによれば、イタリアを、ミラノを、イタリア女性を愛しすぎたスタンダールは、その美を、愛を描くのに、小説という芸術的表現の一形態にたどり着くしかなかったのだ（『パルムの僧院』）。ブルーストの小説における「愛好家」というテーマは、美を、愛を、い

かに書くべきか？ という点に、最終的には収斂するのであろう。

評者は先ほど、『失われた時を求めて』は、現実とフィクションから成る擬-現実のアラバスクであると述べた。このような現実とフィクションの絡み合い、境界線の曖昧さこそが『失われた時を求めて』の魅力であるのと同時に、この曖昧さに鋭敏であることが研究者には求められる。本書は、この曖昧さに厳密な姿勢で対峙した、紛うことなき学術研究書でありながら、複数の擬-現実の絡み合いによって打ち建てられた小説世界の渦に読者を巻き込み、眩暈のような感覚を与える。優れた読書体験をもたらす快作であると述べたい。本書こそが、「愛好家」でもある私たち研究者が自問することをやめない問い、未（来）の芸術家であった話者が、そしてブルースト自身が繰り返し自問したであろう問いへの一つの回答であり、その実践なのである。

浅間哲平氏は、2023年、本書によって、第28回連合駿台会学術奨励賞、及び第3回ロベール・ド・モンテスキウ賞（フランス）を受賞した。本書への賛辞とともに受賞への祝意を申し上げたい。

文化学園大学紀要

紀要編集委員会

委員長 曾根里子

副委員長 砂長谷由香

書記 工藤雅人

委員 久保田文

委員 白井菜穂子

委員 渡邊裕子

委員 橋本智徳

文化学園大学紀要 第56集

発行日 2025年3月31日

発行 文化学園大学
〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1
電話 03(3299)2304

印刷所 株式会社文化カラー印刷
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町3-4-9
水道橋MSビル4階
電話 03(3264)7575
